毎月二回一日十五日發兌（明治二十四年八月創刊 明治二十五年三月十二日第三種郵便物認可）

女鑑

第十三年 第二十號

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

女鑑 第拾七年 第貳拾號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年十月十四日印刷
明治三十六年十月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

衛生無毒
クイーン白粉

皮膚艶美
クイーン水



發賣本舗　花陽堂

東京市日本橋區新和泉町

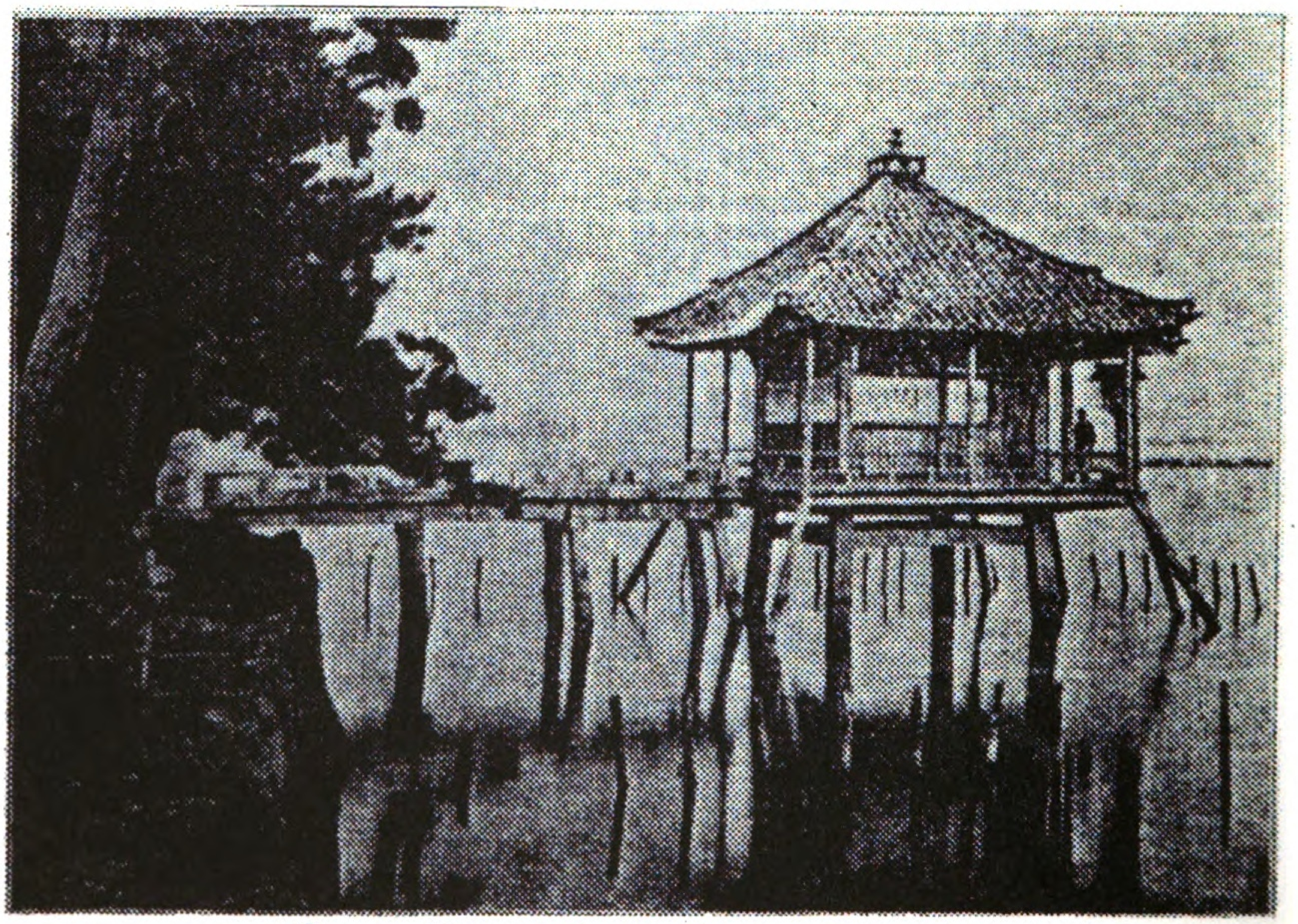


大阪府立堂島高等女學校技藝科職員並卒業生

女鑑兼題投稿優等者



德永廣子



近江國浮御堂


子宮病
産前後又諸症に効あり
一貼入 金七錢
三貼入 金二十錢
七日分箱入 金四十五錢
詳細は効能書にあり
婦人血の道諸病良剤
商標
順經湯
東京市芝区宇田川町廿三番地
(電話新橋弐九七〇番)
調剤本舗 近江屋 清水作兵衛
特約店 大不合名、帝國堂、玉置、森谷、福井、佐々木

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

傳染病研究所

養生園

東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎消毒　傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎防臭　便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く悪臭を止む

◎洗濯　衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎入浴　アルボース石鹸を入浴の時用ひよアセボニキビ等を治す

◎頭髪　禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の拔けるを防ぐ

◎毒蟲　蚤蚊蜂等に刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎植物　アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

◎疵所　突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹸大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地

扇橋製藥株式會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東洋唯一
滋養喰料品



乳卵粉（こなみるく）

壹鑵 正味 五拾匁入
代金卅五錢

滋養物の營養上欠くべからざるは今更に喋々を要せず抑も滋養品中最も世人の需用せらるゝ牛乳は搾取後數時間を經れば腐敗を來すの憂ひあり依て之れが保存の方法として（コンデンスミルク）（ミルクフード）の數多製品あるも特に（コンデンスミルク）にありては暑中は勿論冬時と雖も往々變色腐敗を免かれず世人之を知らずして飲用し故に健康を害し且つ諸病の誘因となる事あり又（ミルクフード）の如きは澱粉製にして恰も（ビスケット）を粉末に爲したるに異ならず故に之を憂ひ腐敗を防ぎ永久保存せらるゝ良品を得んと多年苦心研究の結果漸く今般滋養分豐富貯藏に便なる乳卵粉一名「コナミルク」を製出する事を得依て之れが患者に供用方を傳染病研究所に申出たるに左記の如き證明書を賜はり故に世に公にせんと製造發賣を開始し普く大方諸彥の需用に應ぜんと欲す冀くば續々御購求の上可否を試みられよ敬白

一 乳卵粉は無病健全なる乳牛より搾取したる乳と卵を以て精製したる粉末佳良の滋養品なり故に數年を經て如何なる炎暑不順の候に會ふも決して變色變味腐敗の憂ひなき良品なり

一 乳卵粉は美味にして如何に牛乳卵嫌ひの人にても本邦人の嗜好に適する樣製造せし故飲み好き事は特に發明者の誇る處且つ（コンデンスミルク）の如く滋養分中の「クリトムバタ」を取り去りたる沈澱物を以て製したる品にあらざる故小兒養育病者等には一日も欠くべからざる最良の滋養品なり

一 乳卵粉は飲用の節には粉末を適宜に器に入れ白湯を灌げば直に生乳の如くなり又は粉の儘にて用てよし「注意」多少の臭味を忌む御方は御茶にて溶解せば更に無臭となり飲み好き事實に妙なり

一 乳卵粉は紅茶（カヒー）に用ひて尤も美味常に座右に備置かば非常に便利にして生乳より危險の恐れなき至極輕便なる滋養品なり

一 乳卵粉は裝飾高尚にして四季の進物等には勿論海陸旅行者には尤も欠くべからざる必用の滋養品なり

證明書

乳卵粉製造所の製品乳卵粉を安藤甚太郎より當所に於て患者に供用方申出に付試みに之が檢査を施行したるに左の成蹟を認めたり

一 乳卵粉　牛乳固有の臭味を有し且つ甚だ甘き帶黃白色の粉末なり 其の百分中含有せる主要成分は

○總窒素量二、一八（蛋白質乾酪素トシテ一三、八八）　○脂肪 一七、一二
○糖分 五二、七三（乳糖一九、五一 蔗糖三三、二二）　○水分 三、八三 灰分 二、八七
澱粉、水楊酸其他有害性物質を檢出せず鏡檢、培養並に動物試驗に於て病原的細菌殊に結核菌、窒扶私菌等を含まず

因て本品は滋養分に富める佳良の食物品なりとす

明治三十六年三月十日　傳染病研究所㊞

右の品藥種店又は西洋食料品販賣店に有之候間御高評の上陸續御購求被成下度且鑵詰の裝飾美にして四季の進物に頗る妙なり
○特約販賣御望の方は直に御來談あれ

東京麻布網代町廿六番地
製造發賣元　乳卵粉製造所（電話架設中）

鎌倉風景



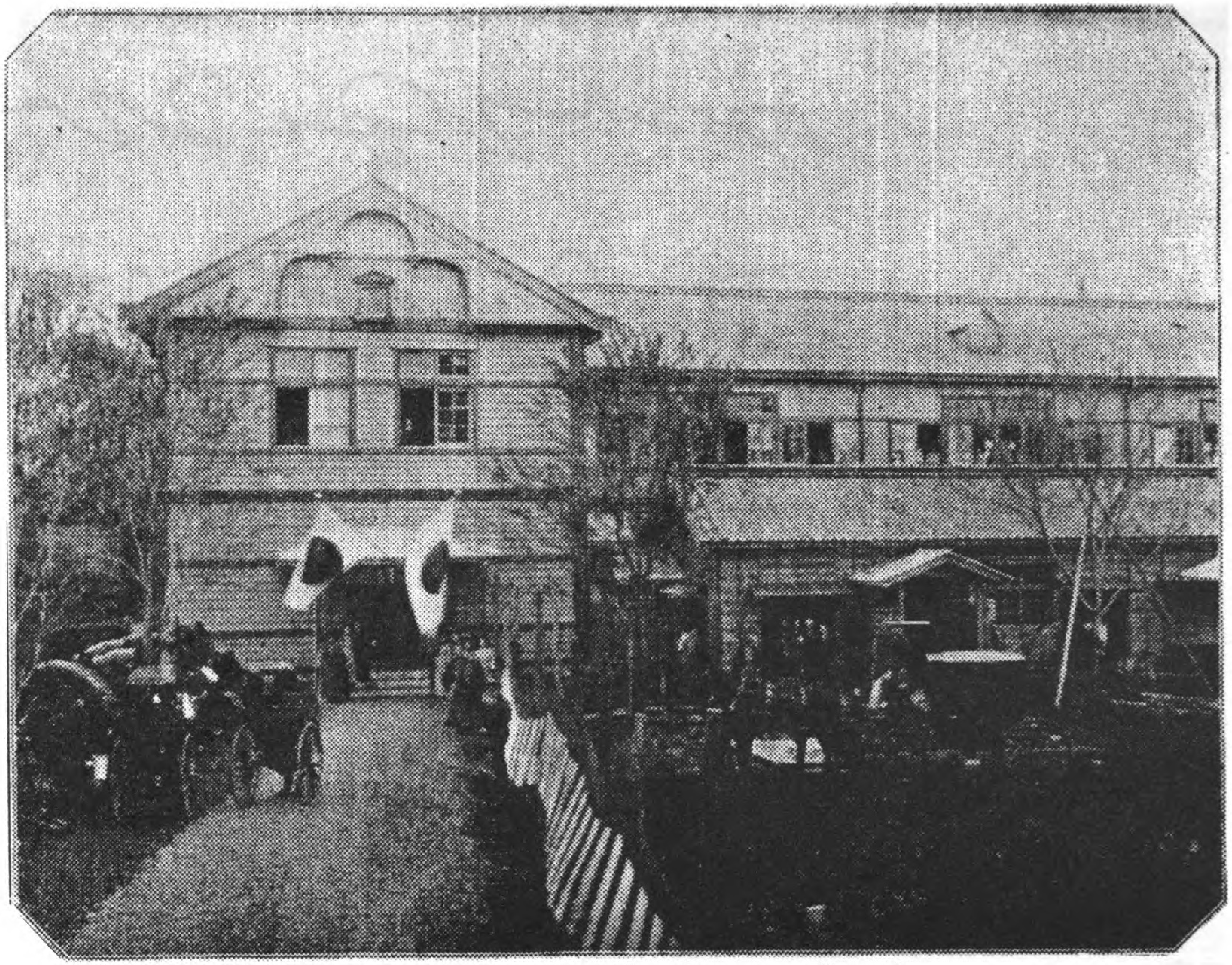
滑川



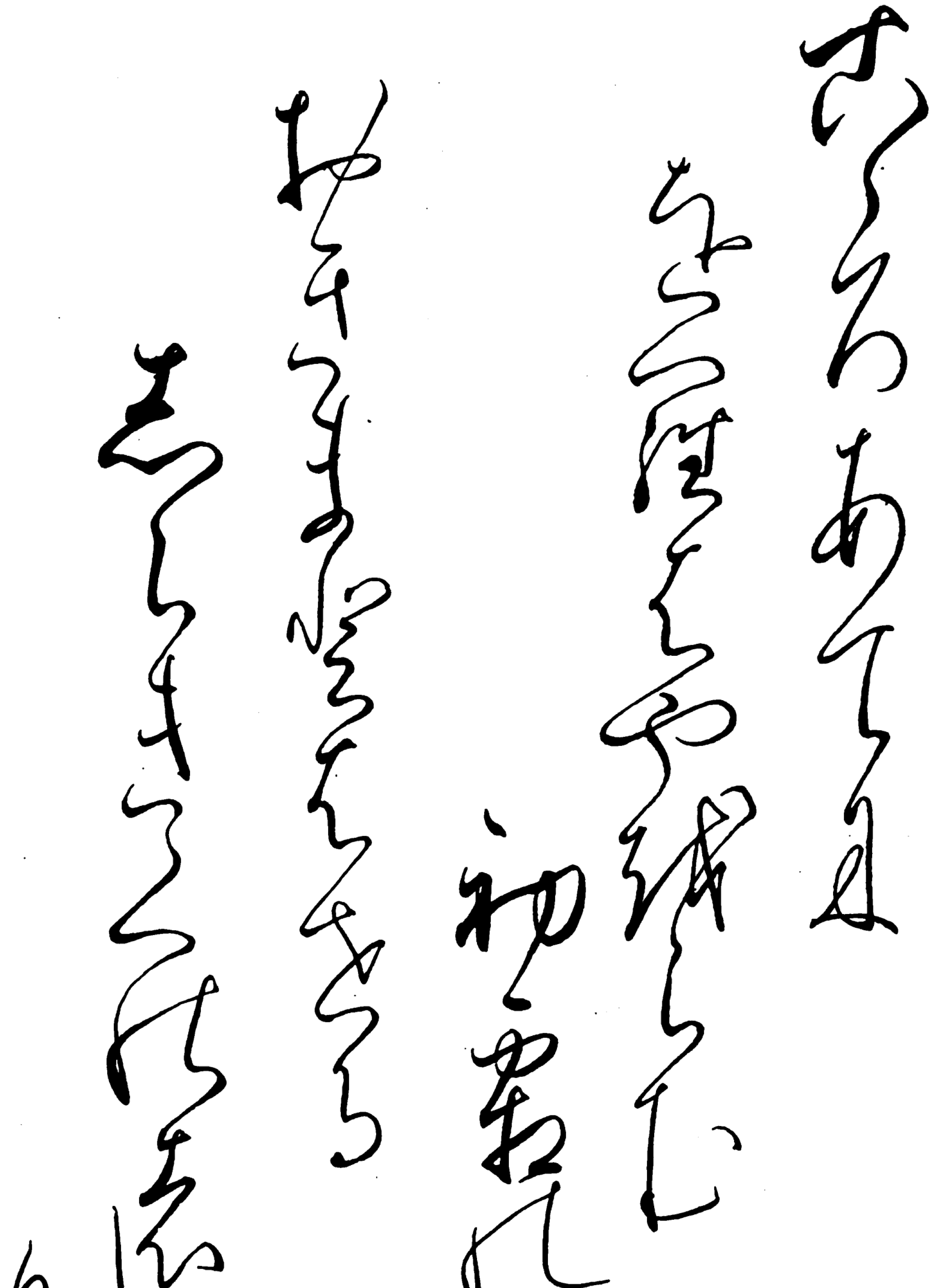
源頼朝の墓



由井ヶ濱



實踐女學校新築校舍

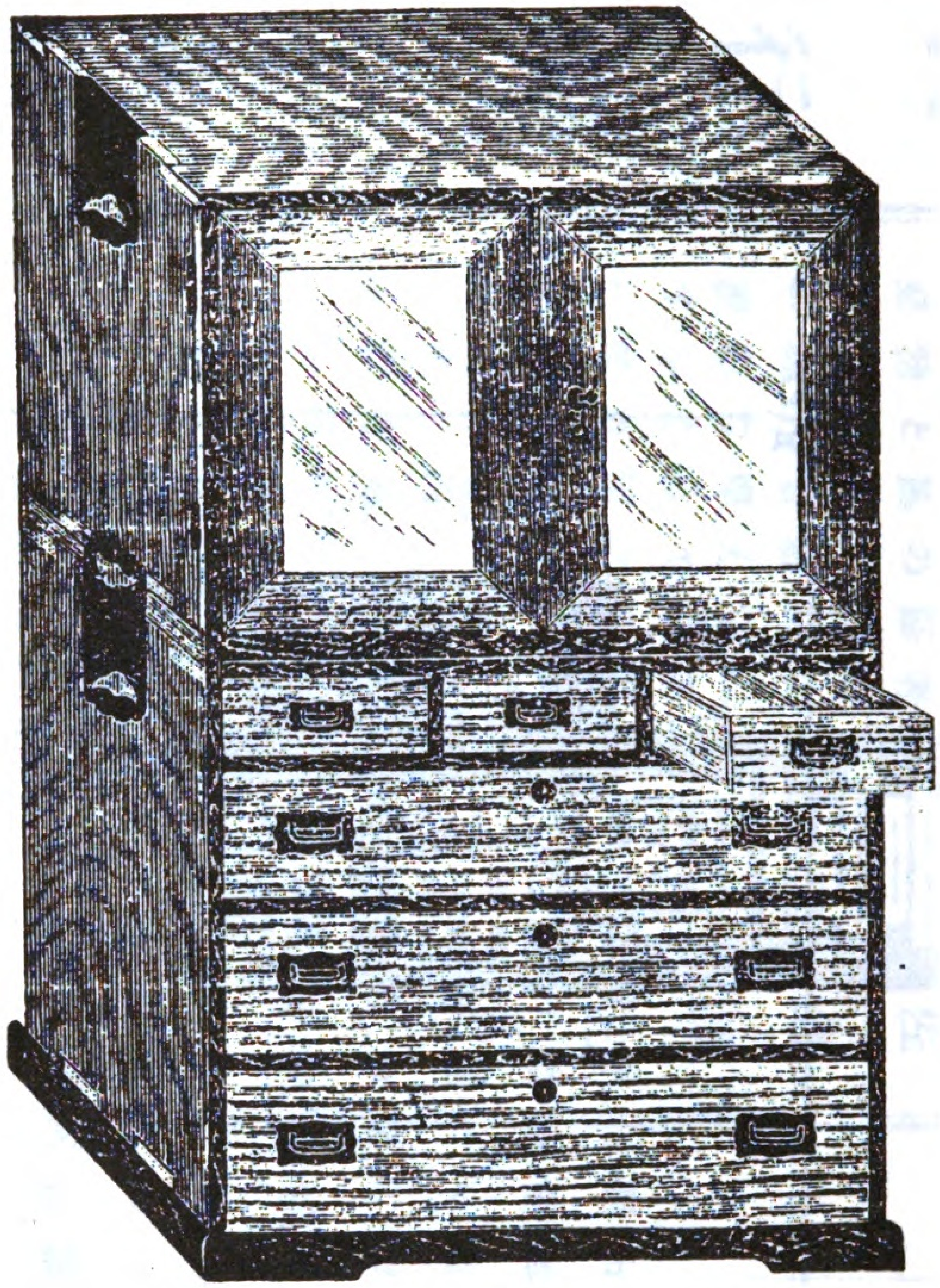


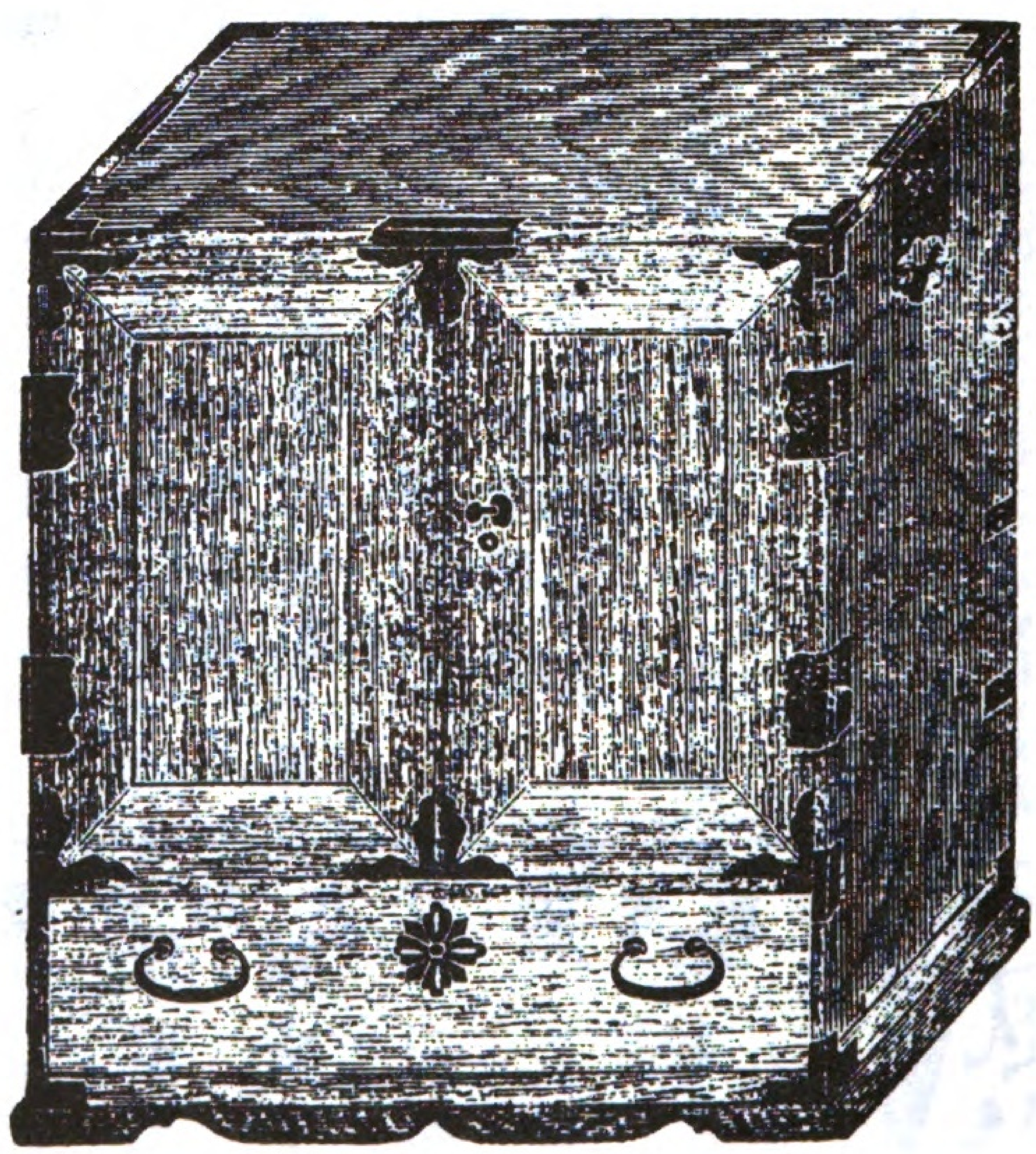
宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

第五回内國勸業博覽會褒賞授與式に於て一等賞銀牌授與せら

れ候同業者出品の種類中に於て此稀有の名譽を荷ひ候こと江湖愛顧各位の御餘光と難有奉感佩候因て益々奮勵製作に關する總てに一層●注意を加へ尚御各位の御引立に酬ひ可申候此段謹告仕候





御注文の思召ある御方には御申込次第たんす目錄一冊呈上仕候（但郵券貳錢封入の事）

(清)

東京市京橋區水谷町一番地角

越中屋 鷲塚清次郎

電話新橋五百七十一番

支店 越清支店

東京市京橋區水谷町三番地

(中) 代理店 中原元助
大阪市東區南本町四丁目角

(金) 特約店 桑野商店
長崎市酒屋町

(一) 特約店 丸一家具合資會社
長崎市今鍛冶屋町

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

女鑑

第十三年　第二十號

品格の養成

淡々として素粧せる曠野の百合花は、妖艶穠厚なる牡丹花よりも、却つて可愛の風姿を有するは、花にもまた品格ありて、自ら犯すべからざるものあればなり。錦繡綾羅に身を纏ひ、金銀珠玉に體を飾り、粉黛香ばしく、釵影花を飄し、世の美麗を鍾めたる窈窕の美人にても、禮讓の徳なくして、舉動放恣に流れ、言語野卑にして、謙遜の道を守らずんば、かの天眞爛熳として毫も修飾を加へざる田舍の少婦の可憐なる風姿に比して、劣るあるも、優るなきにあらずや、是れ豈品格の以て外觀の美の爲に動かすべからざるを證するものにあらずや。錦繡や、綾羅や、珠玉や、金銀の飾りや、富の力を以て、よく一朝にして之を求むるを得べきも、たゞ品格に至つては、陶朱巨萬の富を重ぬるも竟に之を如何ともする能はざるなり。

容姿の鮮娟たるは、必ずしも品格に要すべき資格の一にはあらざるなり。眉目盼たらざるも、好笑倩たらざるも、禮節度に適ひて、謙遜の美風を有し、言語閑雅にして、擧動穏和なれば、氣品は自ら備はりて、人をして嗟嘆措く能はざらしむるなり。又た衣服調度の美麗なるは、必ずしも品格に欠くべからざる資格の一にはあらざるなり。錦衣玉飾を纏はずとも、臙脂粉黛を施さずとも、蕭洒たる其容、潔白なる其姿の中に、氣品は自ら發露して、包むべからざるものあるなり。されば品格は決して外より來るものにあらずして、必ず内より生ずるものなることを知らざるべからず。

太田道灌の一少村女に於ける故事は、世の遍ねく知るところ、詩人當時の情況を賦して曰ふ、少女言はず花語らず、英雄の心緒紊れて絲の如しと、道灌は賢良の士なり、豈に一少村婦の容色に心を奪はれて、情緒を動かすが如き痴漢を學ぶものならんや。彼れは此の少女の氣品高くして、其の容止の閑雅なるに感動し、自ら心緒を亂さゞるを得ざりしなり。宜なるかな、彼れが少女の捧げし款冬の花の意義を、其の臣下より聞くに及びて、赧然として慚悔し、遽然として發憤し、遂に歌道を學びて、其の奥義に達するを得たりといふことや。ア、簑笠の用意だになき、賤が伏屋の一少女は、勇武絶倫の士人をして、みやび心を起さしめ、物の哀れを感せしめ、三十一文字の道に入るに至らしめぬ。品格の人を感動せしむるや、寔に斯の如きものあるなり。

されば品格は女生の最も重んずべきものにして、その養成は女生が最も先んじて務むべきものたらざるを得ず。而かも亦一朝一夕にして養成すべきにあらざれば、學問執業の道にある妙齢の女學生が、居常注意して假初にも忘るべからざるものならざるを得ざるべし。抑も品格の養成に於て第一の要義は、心と行とをして常に一致せしむるにあるなり。心と行とが相睽離せば、其行は虚飾たらざるを得ず、虚飾は一般女子の通患にして、品格を害ふこと最も大なるものなり。次には凛然として犯すべからざる獨立の氣象を備へんことを要す。此の氣象なくんば、事に臨みて沮喪落膽し、或は常に他人に媚び阿ねりて、たゞ人に悦ばれんことを求むるを免かれざるなり。斯の如きは又一般婦女の通性にして、品格を損ずること少小ならざるなり。第三は禮讓を重んじ謙遜を守らざるべからず。禮讓なければ、自然に粗野に陷り、謙遜を欠くときは、乃ち驕慢に流れざるを得ず。粗野は婦人の美德にあらず、驕慢はその最も愼まざるを得ざるところにして、共に品格を養成する所以の道にあらざるなり。シエキスピア曰く、美麗は婦人をして傲慢ならしめ、德行は之を頌讃せられしめ、禮讓は之を神聖の如く見えしむと。蓋し至言といふべし。頌讃せしむると、神聖の如く見えしむるとは、則ち高き品格なり。然らば則ち禮讓と德行とが、高き品格の上に欠くべからざる要件たるは、以て知るべきにあらずや。故に妖艶濃厚なる牡丹花の粧に倣はんよりは、百合花の飾りなくして最も潔き姿を學べ、是れ予輩が現今の女學生諸孃に向つて、品格養成の第一義として敢て希望するところなり。



泰西女子新教育の利弊

リギヨル博士談
前田越嶺記

四十年來歐洲就中佛國に於て、女子の風俗の上に一大變革の行はれたる事は、人の皆見て以て異とする所なり、此の變革の理由原因何くに在るやと云ふに、固より人性の變に在りと云ふ可からず、蓋し人性は千秋萬古變ずるものにあらざればなり、人性は宛も田園の如し、新世紀の民は乃ち是れ新田新園の如きものと觀て可なり、人は此の田園に耕作播種するに教育を以てす、是れ有史以來然る所なり、土地によりて多少莠草の生ずることなきにしもあらざれども、常には蒔かぬ種は生せざるを以て法則とす、果して然りとすれば、今日人生の田園に、昔の如き菓實を收むる能はざるは、確かに此に同じ種を蒔かざるに原由する事疎なりとす、果せる哉四五十年來歐洲の女子教育には一大變革、否、一大革命の行はれたるを見て之

を知る可きなり。
是より以前には泰西公私教育の土臺は宗教なりき、就中女子教育に於て然りとなせり、然るに一千八百六十八年決議して曰く、爾來女子も男子も無宗教の教育を受けざるべからずと、此の劃策たるや習慣にも、公德にも、且は先祖傳來の道にも反背せる前代未聞の異例にして、之が實行極めて困難なりしが故に、固より一朝一夕に行はるべきにあらず、其の是が爲に幾多の歲月を要すべきや瞭なり、此點に就て開始せられたる戰爭は今仍ほ終局を結ばざるは、教育の問題たる重大にして家庭の將來も國運の消長も之に關聯すればなり。

然れども其後三十五年目に當りて、秘密結社員の硬强なる手段により、宗教を教育より、(女子の教育よりか)、排斥するの議遂に決定し、今や教宗分離說は國法となり、此法頓て全世界に實施せらるゝに至らむとす、何となれば如何なる邦國と雖、苟も文明國を以て稱せられむと欲するものは、皆之に則りて、時勢に後れざらんことを務むればなり。

此の革命首唱者の提供せる理由は甚だ奇なり、女子も男子の如く同じ人間なれば、特に民法によりても斯く認知せらるゝからには、男子と同一の教育を受くるの權利あり、姉妹が兄弟の如く教員たる能はずと云ふ理由は、吾人之を見ずと、且當時既に青年男子の多くは信仰もなく、宗教もなかりしかば、是等青年の配偶たるべき者は、須く意氣相投合せざるべからず、否らずんば家庭の安秩保ち難く、夫妻の契合期し難しと云ふに在り、所謂似た者夫婦を作らんとの意なりき。

如何にも自由言論者、隨て自由行動者たる良人の爲には、矢張り自由言論者、自由行動者なる細君の必要なるは、固より然り、是れ論理なり、論理的行歩を取らんとする者は、必須的に玆に出でざる可からず、所謂俗に言ふ信なく法なき男の爲には、宗敎あり品格ある婦人は、甚だ厄介なり、邪魔なり、此の如き婦人に對しては其意の欲する所を行ふ能はざるなり、又翻て他の一方より考察するに、宗敎と良心により て其の義務に縛りつけらるゝ婦人に至りても、良心義務等を蹂躙して顧ざる男子と共に其の一生を送るは、辛さの極みなり、奴隸中の最も酷なるものなり、嗚呼是れ實に革命首唱者が男女敎育より宗敎を排斥したる所以にして、如何にも此等の方面より立論すれば、敎宗分離說は一の利益ありと云ふ可し、男にも女にも自由と云ふ大好物を與ふればなり。

一言以て之を蔽へば、自由言動の男に自由言動の女、否らずんば夫妻の合調、家庭の和合、社會の安秩期し難しと云ふは、即ち是れ敎宗分離說の因つて起れる大原由にして、世界の文明國、否、文明國の稱に負かざらんとする邦國は、往々皆此の『プログラム』に賛成し、且之を國内に實施せむと欲す。

嗚呼人間と云ふ動物は、理性の司配を脱して情慾の左右する所となる時には、如何なる怪事を働き出す者なるかを知らずんば、人間の面あり、人間の心ある者が如何にして此の如き怪案を案出するを得たるかを解する能はざるべし、而して今や之を案出せるのみならず、是が爲に多年働き、是が爲に國の大費を投じ、是が爲に古來の傳統を打破りて、國内に爭亂の種子を蒔きつゝありとは、そも何たる心ぞや。

然れども退て靜に之を考ふるに、此の怪案の中にも多少の眞理なくんばあらず、眞理は其の何處に在り

ても之を沒すべからず、砂泥の中より之を拾收する、亦吾人の業なり。

怪案の中に女子も亦人間なりと云ふ、是れ眞理なり、萬口皆茲に一致す、女子も男子の如く相應の敎育を受けざるべからずと云ふも亦、人之を否定せず、或程度までは是れ其の權利なりと謂ふを得べし、何となれば、開明の今日、女子も多少の敎育なくんば、最早世に立つて生活する能はざればなり、加旃凡て人間の常として、女子も天性美を愛し眞を知り、善を行ふに適應する者なり、果して然らば、敎育を以て此の方面の能力を修錬發達せしめむとするは、啻に女子自身をして完美善良ならしむるのみならず、又實に家庭及び社會の福利の爲を計るものと云ふべし、蓋し是を以て家庭にも社會にも有爲有用の成員を提供して、風敎上偉大なる寄貢をなさしめむと欲すればなり。

然りと雖吾人の所見を陳ぶれば、是あるが爲に女子も全く男子の如く敎育せざるべからずと云ふ理由を認めず、先づ第一其の身體は〔男子のそれに比して〕纖弱、其の能力は優柔にして男子と同じく勞働に堪ゆるものにあらず、疲勞分に過ぎ、度を失すれば、脆き器の如く直に破碎す、次に女子に取りても男子に於けるが如く、學校は人生の仕上塲と見做さゝるべからず、故に其の敎育は之をして將來其の竭す所の義務、忍ぶ所の苦辛に適應せしめて準備せざるべからず、蓋し婦人の生活義務は男子のそれと自ら別あるものなればなり、設令文學に精通し、諸藝に長じ、天文理化等の心得ありとするも、貞操、謹愼、聽順、勤勉以て家庭春温き生活の爲に之を準備するを妨ぐるものにあらざるなり、否らずんば人の妻となりて一家を整理するが爲には、其の知る所旣に多きに失するの嫌なきにあらずや、是を以て世に學問ある婦人の

多く出で來れるより、往々家庭に良妻賢母を失ふの歎あり、彼等の多くは結婚を嫌へり、假令結婚する者ありと雖、多くは子なきを以て常とす、嗚呼是れ亦一の弊ならずや。

父母は常に其娘に就て『高等女學校の免狀を有せり』と語り得るを以て一種の榮譽となせり、然れども一二年の後之と結婚せる男子即ち其娘の夫は必ずしも、其父母と共に其の榮譽を同うすと云ふ可からず、寧ろ之と反對の歎を發するにあらずや、今や『高等女學校の免狀を有せり』の語は我妻に滿足せざる良人間に一種の諺となれり、嗚呼是れ女子の學問に就き不名譽なる語にあらずとせむや、學問固より罪なし、學問は善事なり、美事なり、誰か之を否とせむ、然れども學問は萬事にあらず、之のみを以て足れりとすべからず、就中女子に取りて然りとす、試に視よ、今日の開けたる學問は舊時の信仰に代ふに足らざるにあらずや、前者は後者の如き貞操靜淑、勤勉等の德を生む能はざるなり、然れども記せよ、德は學問よりも多く用をなす器なり、就中家庭に於て最も然りとす世の善良なる家庭に於ては學問の家具あらんよりは、淑德の家具あらんこそ好ましけれ。

是を以て泰西愛國憂世の士は、國家百年の大計の上より此種の女子新敎育の弊を預測して、自稱敎育革新者に語て曰く、『今や一主義、一私說の論にあらず、重大なる實際問題なり、事、家國の將來に關す、國運消長の繋る所世之を忽諸に附すべけんや、抑、卿等の準備する所の敎育は毒なり、魂を殺すものなり、良心を殺すものなり、新敎育の名を以て將來の國民となるべき者の魂と良心とを殺さむとするの意か、卿等は國家の破滅を計らむが爲に、國稅を費消し、國權を濫用す、罪孰れか焉より大ならむ、一私人の調劑

局に己が思ふ儘の試驗をなして調藥するは、其人の隨意なり、自由なり、然れども其の試驗は人間の身の上に行ふ可からず、公然藥劑師の免狀を以て世に立つ者と雖、人命の上に己が思ふ儘の危險なる試驗調劑をなすは斷じて許されずと。

此の如き斷乎たる合理的抗議のあるにも係らず、無宗教々育の危險なる試驗は公然魂のある人間の上に行はれたり、今仍ほ行はれつゝあり、其の結果や如何、世界萬衆之を具瞻するを得、日々之を檢覈するを得、國の立法者の意志なれば、婦人も此道に養成せられて、信仰と宗教の羈絆を脱却し、玆に二箇の特典を得たり、即ち此種の革新者の意見通り、自由言動者になれる事と、能く其夫に類して、似た者夫婦になれる事是れなり、然れども爲に家庭は以前よりも幸福になりたるや、社會は以前よりも安寧になりたるや、否、不幸にして然らず、似た者夫婦の間に言論の自由と行動の自由とは必然的に和合を生せず、往々反對の結論起れり、而して相互に忍容する德既に缺陷せるが故に、遺存する道は唯だ一つ、離婚即ち是なり、然り、是れ實に新教育の產み出したる前代未聞の珍事なり、古來宗教の道によりて離緣沙汰の最も稀なる否、絶無なる國に於て、先づ第一着に此の美術展覽會 否、醜術 博覽會 が開始せられ、今や實に一の流行となれり、嗚呼是れ大恥辱大不幸大禍殃にあらずや、然ども、此の離婚も尙未た家庭に福音を來さず、社會に安秩を復せず、寧ろ却て是が爲に道義の紊亂、風紀の頹敗一層甚しくなり、最近十年來敗德汚行の濁浪は滔々として天日を覆ひ、其の急激なることも亦實に一瀉千里の勢なり。模倣も事にこそ依れ、泰西女子新教育の如き、豈東洋君子國の取つて以て則とすべきものならむや。

（をはり）



賢女瀧氏小傳

林　槐　軒

床の間の花瓶に挿みたる一輪の花は、秀麗豊艶にして芳香室内に満ち、得も言へぬ風情あるも、庭園の丘上に聳つ緑樹の、或は旭に映して滴る許りの色を添へ、或は風雨の中に怒號して凜として動かざるの雄風を視すが如きこと能はざるのみならず、御園の名花が縦枝横斜して萬朶一時に發し、爛熳として風に飄り馥郁十里に聞ゆるが如くなるを得ざるは、我邦婦人の足閾内を出でずして、言行一家の中に止まり、其賢といひ貞といひ節といふも、所謂社會的なる能はずして、家庭の中に沒するを以て常態と爲せるの世に於ては、然らざるを得ざるものありしなり、然れども多少芳香の室外に溢れ秀色の外間より窺ふを得しものありて、良人を内助して其職を全くするを得せしめ、其子等を敎訓して名を成さしめたるの、當時の女子に於ける龜鑑とすべく、今日も亦之を學ぶに足るの言行ありしものあり、瀧氏の如きは即ち是れなり。

瀧氏名を瑠璃といひ、寛文庚戌十年を以て備前岡山に生る、父陳良國主池田光政に仕へ、職を以て江戸に移住し、居ること數年にして延寶五年歸國す、時に瑠璃女年甫めて八歳なりし、此時江戸より岡山に至るまで其通過せる山川及び名勝の地を聞き、能く之を記してなほ遺忘せず、歸國後談話の之に及びて、聞

ふものあれば應答流るゝが如く、人々其聴敏強記なるを歎稱して夙く牝鳳雛たるを知れり、當時は男子すら餘り文學を重んせず、況んや女子に於ては裁縫厨房の事の外、僅に假名交り文の卑近なるものを讀み書きせしめば足れるなりし、然るに瑠璃女は天性文學を好みて、常例の諸稽古の終りて些少の閑もあれば、意を讀書に潜めて倦む氣色なく、之によりて尋常女子以上の敎育智識を備へたるべく、此時に於て既に後來良人に對するの務及び其子等を敎訓するの道を得たるや明なり、是れ花の芳香を含みし蕾の將に其唇を動かさんとするの時なり。

瑠璃女は斯く女子としての性行智識を充分に備へたるに拘らず、其容貌は人に優れて美にして艶なりといふ程にはあらざりしも、人に劣りて醜しといふにもあらざりしに、當時は今日の如く早婚の風なかりしには相違なきも、人に擢んでたる智識性行の伉儷を得るに却つて常人に後れたるものか、漸く元祿十年に至りて、年二十八にして同藩士なる湯淺英に嫁したり、當時儒者の敎には夫婦別ありといひて、兎角親しみより遠慮なく、果ては不作法といふに陷り易きものなるを誡めたるなり、瑠璃女は常に良人英に仕ふる、坐作進退より言語に至るまで、恰も當時婢の其主に仕ふるが如く敬事し、英も亦瑠璃女に對するに、賓客に應接するが如くし、互に愛と敬とを失はずして、家風は常に和氣靄然たる中に禮儀正しく威儀も自ら備はりて、一藩の摸範となり、此夫にして此妻あり、此妻にして此夫ありといはしむるに至れるは、英をして輕職に沈滯せしむると能はず、所謂內助の功も此に其一端を發露せしむるものにて、是れ花の芳菲が既に室內に充てるの時なり。

英は久しからずして同藩の目附に登庸せられ、其出でゝ職に從ふや專ら之に勵精して、家事は一切瑠璃

女に委して顧ず、瑠璃女の家事を治むる、大小悉く法度ありて些少の事も之を逸するを許さず、能く身分を斟酌して奢に渉らず、吝に陥らず、故に家計裕なりといふにあらざれども、亦用度を缺くに至らず、英の職を以て江戸に至ること數々なり、瑠璃女留りて家を守りて其子に教ふ、嘗て曰く永延の天子雪後に山を望みて、香爐峰の雪は如何と宣ひしに、侍女清原氏起つて御簾を捲かれたり、是れ唐の白樂天の詩に香爐峰雪撥簾看といふ句あるを思ひ出でゝなり、今日男子は専ら槍劍弓術等に勵むも、士となり不學にして古の女流にも及ばざるは、恥づべきの甚しきものなりと、此の如き教訓は常に其子の頭腦に注入せらるゝを見ば、其子の發達見るべきものある怪しむに足らざるなり。

英の職たる目附にして藩士以下の曲直正否を監するに在り、其重職たるいふ迄もなく、之を勤むるものは藩中の儀表たらざるべからずして、其職に當るものは却つて内謁苞苴の爲めに職を瀆し身を過るものを出し易し、瑠璃女は能く之を知れるものにして、或は來りて窃に瑠璃女によりて、請ふ所あらんとするものあり、瑠璃女常に容を改め色を正して之を斥け、敢て近づくこと能はざらしむるに努め、藩中往々其嚴に過ぐるを誹るものあるに至れり、以て如何に良人の職を大切にし、後顧の憂なきに心を用ゐたるやを知るに足るべく、英の目的の職に在ること十有八年の久しきに至り、些の過失なかりしかば、後には藩中何れも瑠璃女の内助の與りて大に力ありしを稱したり、是等は花の芳非室外に漏るゝものといふべし。

英疾を以て職を辭して久しく癒えず、瑠璃女床に侍して看護に意を盡して怠らず、扶持按摩日夜衣帯を解かざりしと六年一日の如くなりしも、英遂に天

命を以て歿し、瑠璃女の悲歎は素よりいふ迄もなく、葬祭形の如くせし後は、唯々老を養ふに書を讀み和歌を詠じ、時に箏を彈ずるも淫樂を好まず、墓參齋祭を怠らざるも僧尼巫祝を近づけず、其子未だ娶るに至らずんば家事を見ると故の如く、時に瑠璃女の弟にして出でゝ中村氏を嗣ぎたるものあり、家裕ならずして其上妻に三子を遺して先だる、瑠璃女其子の少にして母を失へるを愍み、自ら之を視ること子の如くし、人を導くに姑息を以てせずして、若し過あれば少しも假貸することなし、故に其子はいふ迄もなく、甥三人共人と成るを得たり、世に其母を見て其子の後來を推すべく、其子を見て其母の人と成りを察すべしといへるは、母の敎導如何によりて子の成立に雲泥の差あるを以てなり、瑠璃女後老いて疾に寢ねたるが、讀書を好むより床中にも貝原益軒翁が書ける岐岨紀行を枕頭に置けりと、是れ少時通過の地なりしが故なるべく、寛保元年を以て歿す年七十有二、嗚呼花散るも餘芳尙は其室に在り、其子とは誰ぞ後に大儒たりし、湯淺元禎常山先生にして棟梁の材後凋の姿一世を風靡せしもの、瑠璃女は交際社會に出でゝ女王と呼ばるゝが如き、御國の名花にはあらざりしも、一輪の瓶花馥郁として室の内外に聞えたるもの、人の妻として人の母として、之に倣ふものあるを信ずるなり。

(完)

修養時代のナイチンゲール

松濤庵

古往今來、多くの歷史を繙いて、最も能く女子の美性を發揮した者を尋ねて見たなら、恐らくは、彼の英國の、否世界の赤十字の女王ナイチンゲールの右に出るものは無いであらう。然り而して、其有名な

るナイチンゲールの、修養時代は甚麽であつたらうか。

彼女は、西暦千八百二十年五月十二日、伊太利のフローレンスに生まれ、英國英蘭洲に有名なる大地主の子であつた、彼女の父は、性質温良高潔、頗る慈愛の心篤く、常に救世濟民の事に力を盡し、尙詩文を好んだ立派なる人で、母は、國會議員として、奴隷解放論者として、所謂名士と稱へられた人の娘であつた。彼女は實に、斯く揃ひも揃つた父母の血脈を享けて生れたのである。

既に、世間類稀なる善き父母を持つた彼女は、さて如何なる教育を受けたであらうか。

當時英國は、女子教育の程度はさまで高からず、縱令上流の人々でも、誰一人女子教育の事に意を注いだものはなくたゞ、徒らに女子をして交際場裏に出入せしめ、殆ど爲すが儘に任す樣な有樣であつた。が、獨り彼女の父は、夙に女子教育の重んずべきを知り、我子にも男子同樣の修養を爲さしめたのであつた、是れ甚だ異數の事で、或は他の頑固なる父老の爲には、嘲笑せられた事もあつたが、夫等には頓と構ひなく、總て女子の爲に必要の科業學術と思はれたものは、一として學ばざるなく、殊に伊佛獨語に至つては、充分に力を注いだのであつた。是ぞ、他日彼女が歐洲各國を巡視し、クリミヤ戰爭の時に、大なる便宜を與へるの種とはなつたのである。

世の多くの婦女は、己の智力の進むと共に、漸次に冷血の人となり、無情の人と化する事は、得て有勝であるが、彼女は、斯く修養を積むでも、些しも其麽傾きもなかつた。否確かに、英國上流社會における模範の婦人として、耻かしからぬ修養を積んだのであつた。加之も慈善を以て名高かつた父母より享けたる彼女の血脈には、慈愛の血塊を融くに同情の

熱涙を以てしたともいふべき、純潔旺盛なる情泉の流れ〳〵て居たのである、實に彼女は、極く幼い時から、天性を發揮して居たのであつた。

彼女が十七歳の時には、ヴヰクトリア女王が皇位につかれて、英國は俄然として旺盛の域に進んだのであつたが、是がため一方には、人民に貧富の懸隔が著しくなつて、富は益す富み、貧は益す貧くなり、洋々たる歡樂、轆々たる車輪の音は、饑に泣き凍に叫ぶの聲、相混ずるといふ有樣で、或富豪等は、細民の不平を和げんため、子女等に慈善の心を養成せんとする者さへ出來た。さなきだに、彼女が燃ゆる如き慈善心は、何うして之を等閑視する事が出來やう、彼女は卒先して、常に憐むべき近隣の貧家を見舞ひ、乏しきは衣食を給し、病めるには藥餌を與へ倘暇あれば醫書を繙き、看護の術を研究して、苟くも病者を救護するの準備を怠たらなかつたのである。

彼女は、此時から大に慈善博愛的事業の諸制度を取調べる事に注意し、倫敦に出て熱心に其實際を見、其間に多くの欠點あることを知つて、大に改良意見を抱いたのであつた、倘夫のみならず、彼女は、當時の看護婦――誠に貴重なる人の命を托する看護婦――の樣を見て、其無智識なのに驚き、是非改善をしなければならぬと考へ、斷然意を決して、專念斯の事を研究する事と定めた。

彼女は廿五歳になつて、父母と共に獨逸、佛蘭西、伊太利の諸國を歷遊して、到る處の學校、工塲、病院育兒院等を巡覽して、看護上における幾多の智識と感慨とを抱きつゝ、一旦歸國の後、再び父母の許を得て獨逸に渡り、ルーテラン大病院の附屬看護慈善學校に入學した。

此看護慈善學校は、非常に入ケ間しい學校で、學科

程度の高いよりも、恰かも下婢の如に、あらゆる下司の業も、各般の荒仕事も、能く耐へ忍ばなければならぬのであつた。で、彼女は其容貌風采において、到底力量根氣の耐へ續かぬものとして、入學を拒絶せられたのであつた。併し彼女は、如何なる難事にても、能く堪へ忍ぶ故……と再三頼み入り、遂に漸く入學することを許された。吁、身は富豪に生れ、淑徳秀て容姿正しく、思ふて成らざるなく、欲して得ざるなき身の上なる彼女は、何を苦しんでか敢て身を深淵に投じやうとはするのであるか!。たゞそれ彼女の胸中には、一片慈愛の焔炎燃ゆるあつて、遂に苦楚を受くるを甘せしむるに至つたのである、果せる哉彼女は、此校に學ぶこと半年、最も優等の成績で卒業したのであつた。

夫から彼女は、佛蘭西の巴里に往つて、サンバンサンポール慈恵姉妹病院に入つて、其制度方法を研究し、素志を遂げて英國に歸つて、再び温かき家庭の中に入つたが、早くも親愛なる家族に別れて、又もや塵芥の巷に趨いたのであつた。そは倫敦にある一の看護院であつて、此處は憐むべき女教師の老年を安く送らせる所の、一の救濟院で、併せて看護婦學校を兼設したのであつたが、中頃資本に欠乏して維持のつき難きため、將に廢院の止むなきに至らんとしたのを、彼女は餘所に見るに忍びず、同院の人々の請ふがまゝに、自ら其監督となつた譯であつた。此處で彼女は、自ら資財を擲ち、學識と手腕とをもて、三年の間熱血を注いで、非常なる辛苦經營をして、遂に能く搖がざる礎を形るに至つた。

世には、聲の美なる女子は多かれど、其行は醜陋である、心の優しき女子も求むるに難くはないが松柏の節に乏しい。心立の雄々しい女子はあらうけれど、併し温雅の徳を缺いて居るではないか?。(完)

學藝

通俗土佐日記

北海道師範學校教諭　兒玉彌三郎

夜更けて、來れば、處々も見えず、京に入り立ちて嬉し、

○夜更けて　桂川を七時頃に渡りて京に入るにはさまで夜の更くることもなかるべきに、斯く更けたるは人目に立たせじと思ひて、殊更處々にて休息し、さて人の寢靜まりたる頃入京したるなるべし。

○來れば　我が家を目指して歸り來るをいふなり

○處々も見えず　とは洛中の樣の見えざるを遺憾とせる樣に書きて、其の實、入京の樣を見る人なくて心安きをいへるなり、

○京に入り立ちて嬉し　嬉しの一語、普通の嬉しさとは異なり、快からざりし任を果して、數年懷かしみし都に歸りし嬉しさは、言外に推し量りて知るべし、

○以上、桂川の渡りより家に到るまでの路の程をいひしなり、

家に到りて門に入るに、月明ければ、いと好く、有樣見ゆ、聞きしよりも增して、言ふ甲斐なくぞ毀れ破れたる、家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり、中垣こそあれ、一つ家の樣なれば、望みて預か

れるなり、さるは、便り毎に、物は絶えず得させたる、

○家　とは紀氏の宅なり、鴨長明の無名抄には或る人の說として、勘解由小路の北、富小路の東隅とあり、又、拾芥抄には萬里小路東南櫻町とあり、何れ是なるかを知らず、

○門　に入りて既に荒れ果てたる樣著るしければ家の內は推して知るべき樣に書きたるなり、

○聞きしよりも　土佐に在りし時、京より來し人の語りしか、又は昨日車を取りに歸せし使の語りしかを聞きしなるべし、

○言ふ甲斐なく　いかに言へども其の甲斐なき義にて、修繕も出來ぬまでに荒れたるなり、俗に取り返しの付かぬといふに同じ、

○心も荒れたるなりけり　家の荒れたると共に、此の留守預りの人の心も荒れたるなりとのみいひ

て、其の人の不都合を咎めざる心中推し量りて酌むべし、

○中垣　は家と家との間の隔ての垣をいふにて、紀氏の家と預り主の家との中垣なり、是れ下の一つ家の樣なればといふに應せしめたるなり、

○望みて云々　預り人は隣りなれば、其の家に居ながら望みて、心を附くる樣に依賴し置きたるなり、

○以上、預り主の家、隔たりしならば、斯くまでに荒るゝに心附かざる理もあれど、一つ家の樣なる近き處に居りながら、修理も出來ぬまでに荒らし置きたる不人情を恨みたる心を、其れとなく書きて、又一方には、態々雇ひ入れ置きたる留守番にもあらねば、其れも其の筈にて、畢竟自分の預け方、其の宜しきを得ざりしが故とも聞ゆる樣にしたるなり、更に其の衷心を繹ぬれば、紀氏元來

清貧にして、在任中修繕費をも送らざりしが爲めにもあるべく、且つ、壯麗堅固なる建築なりしならんには、斯く僅々四五年にして荒廢する筈もなかるべきにと、身の清貧なるを其れとなく示したるにもあるべく、所詮任の歎きより發したるものなるべし、

○さるは　とは俗に然かも其れがといふ程の意にて、拾遺集に「未だ知らぬ思ひに燃ゆる我が身かなさるは淚の川の中にて」とあるも是れなり、思ひ合して其の意を得べし、

○便り毎に　とは土佐より京への便每にといふ意なり、

○物は得させたる　身、元より清貧なれば充分の事は爲し得ざりしかど、謝意を表するしるしばかりの物をば送り與へて、己れの心だけは盡したる積りなり、されど、其れも先方へは充分に意の達せざりしにて、斯く荒れしを放任したるも無理ならずといふ程の心に書きたるなれど、其の實、預り人の不人情を怒りたるには相違なし、

今宵、斯かる事と、聲高に物言はせず、いとは酷くに見ゆれど、志はせむとす、

○斯かる事と　の事の下にありの意を省きたるなり、

○聲高に物言はせず　とは侍婢從者等、口さがなく、斯かる事もあり、云々のこともありなど、大聲に言ひ罵らば、元來一つ家の如き隣りなる預かり主に聞ねんことを憚りて制したるなり、

○いとは酷くに見ゆれど　のは字を酷くの下に置きて、いと酷くは見ゆれどとあるを普通とすれど、いといふ詞に重きを置く爲めに、斯く上に置きたるなり、即ち此の預かり主の仕わざは甚だ不人情には思はるれどゝいふ意なり、

○志はせむとす　とは任中留守をしたる謝儀をばせんとすといふにて、人は我につらけれど我は人につらくせざるなり、怨みに報ゆるに徳を以てする類といふべし、以て紀氏の人と爲りを知るに足らん、

さて、池めいて窪まり、水つける處あり、邊りに松もありき、五六年の中に、千年や過ぎにけむ、片枝は無くなりにけり、今生ひたるぞまじれる、大方の皆荒れにたれば、憐れとぞ人々言ふ

○前段は家の荒れたるをいひ、此の段は庭の荒れたるをいふなり、

○池めいて云々　池めくとは、池ならざるものゝ池に似たるをいふなれど、是れは謙辭に書きたるにて、實際池なるを斯く言へるなり、水つけるは水の溜まれるをいふ、

○五六年　前には或る人縣の四五年とあり、其は昨年の記事なればなり、

○千年　松は千年を經る物といふに寄せていひたるにて、其の實、土佐の任の物憂かりし爲め、任中千年を經たる心地せるを思はせたるなり、

○今生ひたるぞ云々　是は留守中に、實ばへせし小松をいふ、片枝の枯れたる松に付けては、土佐にての亡兒の上を思ひ、小松の生じたるに付けては、從者等の、子なかりしも、生みて共に歸れるを思ひ、從つて亡兒のことをも歎くにて、下文を引き起さん爲めの緒なり、

○大方の　は總てのといふに同じ、

思ひ出でぬ事なく戀しきが中に、此の家にて生れし女子の、諸共に歸らねば、いかゞは悲しき、舟人共皆、子抱かりて罵る、

斯かる中に、尙ほ悲しきに堪へずして、竊かに、心知れる人と言へりける歌、

生れしも歸らぬものを我が宿に小松の有るを見るが悲しさ、

とぞ言へる、尙ほ飽かずやあらむ、又斯くなむ、

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや、

○思ひ出でぬ事なく　とは家に、庭に、池に、松に、見る物每に思ひ出でらるゝをいふ、是れ亡兒の事を言はん爲めにて、然かも思ふこと亡兒の上のみならぬ樣に書きたるなり、さて本意は、土佐の任の歎きを主としたるなり、

○いかゞは悲しき　とは悲しさの限りなくて、測り知るべからざるをいふ、是れ記者の女、傍らより父母の心を推し量りて書きたる樣にせるなり、

○舟人　とは楫取等にはあらず、北村季吟は、舟にて來りし人なるべしといへり、本文に誤脫あるにあらずば姑らく此の說に從はんより外なし、

○抱かりて　は抱かれてのれをりに通はしたるにて、隱れてを隱りてといふ類なり、然かして抱かりては、抱かるゝ方即ち子を主としていへるにて、抱く方の親を主とせざりしなり、

○尙ほ　とあるは、忍ばんとして忍び得ざりしを以てなり、

○竊かに　とは餘りに未練なりと人の思はんことを憚かりたるなり、

○心知れる人　とは紀氏夫婦の間なるべし、さもなくば、聞かせても憚りなき人なるべし、

○生れしも云々　任以前に此の家にて生れし子の今此の家に歸らぬをいへるなり、

○小松のあるを　とは前文の今生ひたるぞまじれるとある小松を指し、さて、子の無かりし從者等の、子を連れて歸れるをいふなり、

○見るが悲しさ　といひて、其の悲しさを推量せよと誂らへたるなり、

○一首、從者等は、無かりし子を得て歸り、我は、有りし子を亡ひて歸れるを對照して歎息し、不運なりしが上の不運を思はせたるなり、

○尙は飽かずやあらむ云々　記者の女の祭したる心に書きたるにて斯くなむの下いへるを省けるなり、

○見し人の云々　見し人とは亡兒を指すなり、其の亡兒の、松の千年の如くに長生きしてあらんを見得たらんにはと、有り得べからざることを有れかしと假說したるなり、

○遠く悲しき別云々　死別を生別の如く言ひ出でたるなり、ましやはましやは又はましかはの意にて、其の判斷を聞く人に求めたるなり、

○一首、亡兒の歎きを言ひて任の歎きを漏らしたるにて、二首共に松に寄せたるは、前文に緣を取れるなり、

○以上、繰り返し、亡兒の歎きを言ひたるは、卷首に言へるが如く、任の歎きたることを外らしたるなり、

忘れ難く、口惜しき事多かれど、得悉くさず、兎まれ角まれ、疾く破りてむ、

○忘れ難く　とは途中にて有りし種々の出來事に付けていへるなり、

○口惜しき事　のくち惜しきは朽惜しきの義にして、記るし置かずば、後に殘らで殘念なるをいふ、

○得悉くさず　とは記るし悉くすことを得で殘りたる事多しといふ意にて、女の仕わざなれば斯か

る次第なるを思はせたるなり、

○以上、途中の記事に遺漏ある如く書きたるも、實は、任の歎きのことにて、今少し詳しく書かでは滿足せざれども、之れを詳悉せざるは、廟堂を憚りてなりとの意を思はせたるなり、

○兎まれ角まれ　はやわの約まりたるを書けるにて、元來後日に殘して思ひ出にせんとの心にもあらで、唯男のするといふ日記のまねを、女もして見んとて試みたることなれば、よし遺漏はありともまゝよとの意なり、

○疾く破りてむ　若し人に見られもしなば都合惡しかるべし、疾く破り棄てんとの意なり、

○右、此の日記の結文なり、今此の結文を讀み終りて、更らに卷首に回りて大意の條を讀み味ふべし、此の日記の性質並びに紀貫之其の人の眞面目自ら明瞭なるべし、

（完結）

次號要目

（十一月一日發行）

和畫通信教授

山崎隆子



眼



妻女たる者の資格

嘉悦孝子

私が社會の役に立つ婦女を敎育して見たい、國家の役に立つ人間を養成して見たいと、かねて骨折つて居ますのは、畢竟妻女として完全（完全な人物はとても望まれませぬけれど）に近き人物即ち妻女たるべき資格を完備したる女子を求めたいといふ目的に外ならぬのである。此の事に關しては、是れまで隨分思考を凝らした事もありますし、又種々調査を試みた事もありますが、併し私の述ぶる所は、自分が實地に經驗を積んだことではなく、云はゞ私一己の臆測に過ぎぬのであるから、彼是と說き立たゝ讀者諸子の閲讀に供するほどの價値はあるまいと思ふけれど、兎に角、世の妻母たるものゝ備ふべき資格に關しては、私は極の平民主義を執らんとする意見である。所謂働いて衣食する中流以下の妻女を標準と爲して子女を敎

育して行きたいと思ふので、坐食の民を作くることは成るべく避けたい精神である。されば茲にお話致さんとする妻女の性格も、矢張り中流以下の家庭に適せし婦人を目的としての事である。それで私の意見では、その資格を先づ下の如く撰定して見ませうと思ふ。

第一　身體壯健にしてつねに活潑なる事

健康は人生萬事の基となるものであつて、身體の健康な位一家の幸福なるはなく、而して身體の軟弱い位一家の不幸なことはないのである。されば肢體の弱い女子は、たしかに、人の妻母たるべき資格の重要なる部分を缺けるものと云つても支障ありますまい。たとひ如何ほど立派な思索を懐き、藝能を備へて居つても、體軀が尫弱くては何の役にも立ちませぬ。立たせやうと思ふても立たせることが出來ませぬ。殊に私共のやうに、躬ら大に働いて衣食しやうと思ふ中流以下の婦人に在りては、剛健なる身體でなくては一日も勤まりませぬ。然るに近世の女子を見るに、纎巧孱弱といふ宿弊は、今も尙は其形體の裡に留まり居りて矯正の困難なるは歎かはしい次第である。この健不健と云ふことは、多くは其人自己より拵らへ出して居るやうなれば、自己の決心一つで確かに健康な人となられる道理である。私は誰人にでもから話して居る。『兎に角お働きなさい、肢體をお動かしなさい、人間は働きさへすれば、身體は屹度健全になります、身體が健全でありさへすれば、世の中は愉快なものです、何事を爲しても苦にならず樂しいものです』と。實に一家の裡で一人快活に樂しさうな人があつて家族を融和させて居るならば、全家の慶福は之に依りて維持せられ、主人と云はず、僕婢と云はず、皆其の感化を享けて幾層の勇氣を増すに相違ないと思はれる。

第二　同情の心に富む事

夫れから肝要なるものは同情である。同情とは平易にいへば、所謂思ひやりである。夫は世事に奔走して苦しみ、一家の經營に汲々として骨を折りて居るに方りて、其妻は恬として之を關知せざるものゝやうでは、妻たる者の義務が盡されたと云はれませうか。同情相憐の念に薄き婦人は決して良妻とは認められない。夫の苦悶はその半は妻女たる者が之を分擔する覺悟がなくてはなるまひと思ふ。家人の苦樂に對して、その遭遇する毎に深き同情者となるべきものは、他者でもないその主婦である。また男子の最も煩悶を感ずるのは、相供に自己の不幸を歎つべき同情者を持たない時であつて、たとひ如何なる薄倖に逢ふとも、共に歎げき、共に語りあふ深き思ひやりある人を得た時分には、たしかに其處に希望の光明が輝いて來るものである。艱苦の全部を除き得ざるまでも、その幾部を減じて慰籍を與ふることは、同情なるものゝ價値ある所であらう。子に對して慈愛深き母親と尊まるゝも、僕婢より情けある主婦として戴かるゝも、畢竟この同情が基本となつて、種々の障害物を取排ひ、我人を融合連結するからの事であらうと信ぜられる。

第三　意志の堅固なる事

次に話したきは意志の强固といふ事である。何事につけ世人より婦女は薄志弱行で意氣地がないと罵らるるのも、その源は何處に在りやと問へば、皆意志の鞏固ならざるより起る弊害に外ならぬのである。女子は何事も躬ら進んで行らうといふ勇氣がなく、又一旦着手せし事をどこまでも成し遂げやうといふ堅忍不拔の氣象にも乏しい。而して之が原因となりて屢々意外の災害を生じたり、耻辱を被つたり、損失を招い

たりする。例へば夫を選ぶにも、その人物如何を究めず、財産の有無を第一に問ふといふやうな情けない程弱い、間違つた意見を起すやうになるのである。私は平素學校の生徒等に向つて『人は意志が鞏固で勇氣さへあつたら、他人の力を俟たないで、どんな立派な人物にでも確かに成れると私は信じます』と、かう誡めて敎へて居る。實に世の中を渡りますには、今後はたとひ女子たりとも、強固なる意志を錬磨し發揮することが極めて肝要である。男子は勿論の事、今日は婦人なりとて必ずしも一家內一國內の事業にばかり係はりて滿足して居るべき時代でない。日本婦人の力を盡すべき事業は海の外にも許多存在するのである。先般我國に來游したるコール氏などは、頻りに日本人の滿洲移民を勸められたといふ事であるが、併し男子にして海外進取の事業を企つるならば、女子も亦た進んで同伴を試み、危険困厄を冒しても、家國の福利を收むることを樂しむやうな勇氣を持たせたいものである。



第四　可成寬大にして宏量なる心を持つ事

夫れから寬厚淳雅の德も、妻や母として缺くべからざる一性格であらうと信ずる。天を怨みず、人を尤め

ず、未練を云はず、愚痴をこぼさぬといふ位な見識は、婦人にも備へて貰ひたいものだと或人が言つて居つたが、寔に其の通りであつて、せめてこれだけ位の德性は、どうなりとして一般婦女に涵養せしめたいものである。つら〳〵考へて見るに、所謂日本人の島國根性の狹量なる癖が、男性よりも殊に女性の側面に於て多く露はるゝやうに認められますが、苟も理想の妻女を得んとするには、これは是非とも除去せねばならぬ無形上の缺點であらうと考へられる。

以上の諸性格は、主として無形に屬する資格中で、特に妻女たる者に缺くべからざる要件であらうと思ふが、更に有形上より考へて見ると、

第一　割烹

第二　裁縫

第三　其他の手藝

の三者は何人を問はず必ず備へざるべからざる藝術にて、若し資格と稱し得るならば、右は最も重要なる有形上の資格であるのである。唯だ之は今更私の述ぶるまでもなく、世人の大率稔知せらるゝ所ならんと察する故に詳說を省き、讀者諸子のお推量に任かす方が却つて宜からうと思ふ。（をはり）

家庭小話（下）

堀内新泉

（九）嫁姑の折合

嫁姑の折合と云ふことに就いて、さる老夫人は次のやうに語られた。

總じて折合と云ふことは、ひとり嫁姑の間ばかりで無く、日常知己朋友と交はるのにも、互ひに最も必要なことで、世はお互ひさまに相ゆづり合つて、相方から仲よく折合つて行かねば成らぬ。即ち相和ぎあつて行かねば、その交際は決して永くはつゞきませぬ。常に交際の圓滿に行く人は、相互に信義を重じ合つて、互に相讓り合つて、即ち常に善く居合つて參るからでございます。然るにこれが若し左樣で無くて、常に互ひに募り合つて、向ふは此方の落度を咎め、此方は又向ふの弱點を探すやうでは、何方も生きた人同士、常にその間の圓滿に行きさうな筈はありませぬ。ですから嫁姑の間を常に暖かに仕やうと云ふにも、矢張互に心の至誠を盡くし合つて、毎日常に居合つて行くより外はありますまい。そうすれば、其中には、互ひに心から相愛し合ふ情も起つて、嫁も笑へば姑も笑ひ、引ては一家繁昌の分子に成つて參ります。これはお話するまでも無いことですが、一歩進んで嫁姑の間を生涯圓滿に爲やうと云ふには、嫁を貰つた當座が誠に大切であらうと私は思ひます。

然るに世間一般の姑の爲す所を見ますると、先づ自分の忰に嫁を貰うと云ふと、當初の珍らしい間は、舐めるやうに可愛がり、その後程經て、少し飽きて來ると云ふと、今度は無闇に嫁の弱點ばかしを探して、イヤそれもいかん、これも氣に入らんと云つて、毎日家で嫁を苦めるばかりで無く、他人に向つてま

でも嫁の善く無い風評などを致します。左樣すると云ふと嫁の方でも亦忍んでは居りませぬ。「此方のおツ母さんは、當初は實に善いお仁の樣であつたが、段段お馴染み申して見たら實に邪見な八釜しい仁だ」と怨み、これも亦人に向つて、切りに我が大切な姑の惡評などを致します。さあ最う互ひに斯う成つて參りますと、相方の間は次第に背中合の姿に成つて參りまして、一方で小言を言へば、一方ではふてる。そうすれば姑の方では益々大きな聲をする。嫁は泣出す、悴は間に立つて迷惑し、引いては一家内誰も彼も皆いやな顔をして、笑ふ門には福來たるなど云ふ、家庭の陽氣な分子は無く成つて仕舞つて、總ての點に於いて、最早決して其の家は、福の神のお宿をして居るとは申されません。

斯う成つて參りますと、一家は單に物質的の損耗を來すばかりで無く、また精神的にも何程の不快を感ずるかも知れません。さて斯う成つて參りますと、その罪は嫁に在るか、姑に在るかと糺せば、いづれを孰れと味方の爲やうはございません、先づお互ひさまと云ふより外はありませんが、一家の平和を此處まで破つた罪は、まだ世事に馴れぬ年の若い嫁よりは最早額に經驗の皺を疊んだ姑の方に多いだらうと私は思ひます。成程姑は嫁の爲に、大切な人に相違はありませんが、嫁も亦我が可愛悴に生涯添はせるものですから、その方面から云つても、また我が一家の爲から云つても、我が悴同樣に大切な者でございます。ですから此の後我が息子に嫁でも貰はうと云ふ仁はそれに先達つて、こゝは熟々思案して、今後姑と成つた自分が、嫁に對して如何なる感情を有てば好いか、また如何に振舞へば宜いかと云ふことを、確乎と定めておいたならば、その期に及んで我故に我家庭の親和を破るやうな事は、恐らくある

まいかと思ひます。

けれども私は世の姑の反對に出まして、當初は嫁を舐めるやうには仕ませんでした。それでは我が子の花嫁が憎く見えたかと云ふに、元よりそんな譯はありません、年十七歳にして來た花嫁、一家に花の咲いたやうで、珍しくもあり、また可憐くもありました。けれども左のみ我が愛に馴れさせず、先づ我が心を澄して居つて、餘り打解けませんでしたのは、謂ゆる花嫁なるものに就いて、私は少し考へがあつたからでございます。さてつら〴〵と世の中の、嫁姑の間を見まするに、兎に角何うも暖かに行かないのは、姑が惡いのか、それとも嫁が善くないのか、イヤ他の事は暫くおいて、自分は何うしたならば、嫁との間を常に暖かにして行くことが出來るであらうか。それに就いては、嫁は先づ如何なるものであるかと云ふことを考へて見ますと、先にも一寸お話を仕ましたやうに我が可愛子に生涯添はせるものである。申すまでも無く、我が子は生涯世を圓滿に送らせたい。これには先づ我が子に少しでも良い嫁を有たせなければ成らぬ。即ち少しでも我が子を内から助けさせねば成らぬ。整然として家を守る者のあると無いとは、外に出て事を爲す夫に取つては實に太した相違がある。而て見れば未だ年の行かない嫁に、即ちまだ世間の事に馴れない嫁に、我が知る限りの事は敎へて、少しでも長所の多い婦人に仕立てるのは、悴の爲でもあり、また嫁自身の爲でもあり、引いては家の爲、またズツト大きなもの丶爲にも成つて、一方には又これが姑の役目である。その役目を果たそうと云ふには、勢ひ嫁に向つて苦い事も云はねば成らぬ。これも決して望みはせぬ。云はずに濟めば、誠に以て結構だが、若木の枝に癖なかれ、まだ生木の匂ひのして居る柱に艶を出せよと云ふの

は無理な話で、それには是非とも惡い所はためてやり、光らぬ所には骨折つて、布巾も懸けて遣らねば成るまい。おなじく左樣する積りでも、當初は少しも關はずにおいて、即ち若い者の仕度放題に爲せておいて、俄に矯めたり拭いたりすると云ふと、世の諺にもあるやうに、俄磨は得て血が出る。その爲却つて一家の親和力を破るやうな、悲しいことに成つて來ぬとも限らない。それよりは當初は酷い姑だと、嫁に少しは烟がられても、萬事腹藏なく云つて敎へて、この家の家法は斯うだと早く嫁に呑込せて、それから何時も我家の嫁を見ること、昨夜我が可愛子息と三三九度のお杯をしたと云ふ翌日あたりの花嫁同樣に、幾年經つても飽きること無く、顏見る度に珍しがつて、それこそ眞個に甜めるやうにして嫁女々々と云つて可愛がつたならば、一方もまた阿母さん／＼と云つて、その間は幾年經つても、日を追ひ月を重ねても睦じく行くに相違はありません。私はこれを身自から實行して、好い成績をあげ得ました。さて色々順序を正さず、長々お話を致しましたが、その要點は唯これから姑たらんとするお方に向つて花嫁を珍らしがらずに當初は叱つて、その家々の家法に整然と合せた上で、幾久しく變らぬやうに、何時も我が家の珍しい花嫁として、お愛し成さらんことを希望致すのでございます。

（終）

思ふまゝ

三宅青軒

◎凡そ人は男女に拘らず其持物と衣類とに依て心の奥の測らるゝものなれ、特に女に在りては尤も著し。心の華美なる人は其衣類も華美に、心の質實なる人は其衣類も質實に、濃厚したる、淡泊したる、浮た

る、沈たる、剛き、柔かき、正しき、猥りがましき、總て其心の働く形を其衣類に表白せざるは無し。

△斯は其心の欲するところに從うて、衣類の縞柄摸樣又た仕立などの種々樣々に好まるればなり。

△されば衣類は其心を示すの廣告にして、我心は斯る樣の形を爲し居ると世間へ吹聽するものなり。耻かしく怖ろしきことかな。

◎繼子を育てねばならぬ位置に立つ婦人達は、われが思ふまゝを述べ申すべし。世に繼子と繼母との間の惡しきを推究すれば、只一言『繼子と思ふ』からなり、之を反對に『繼子と思はず』と更へなば、決して間の惡くなる筈は無し。凡そ愛憎は心の比較より來るものにして、敵として憎めるは味方として愛するものゝある比較からなり。此比較を無くして仕舞へば敵も無し、味方も無し。

△生みし子に別れて其容貌をも忘れ果し母の、其後我子に巡り會しが、夫れを我子と知らねば何の愛情もあらざりき。偖て人の、そなたの子なりと告るに及び、始めて心の中に親しく懷かしく可愛き情の融然と起りて、こゝに眞實の母子の名乘をなしたりと、或る女のわれに告げゝる。是れ我子と知る知らざるの比較から起る心の働きなり。

△『繼子と思ふ』からこそ、其處に遠慮も起れ斟酌も起れ。若し繼子と思はざる時は、何の遠慮のあるべき、何の斟酌のあるべき、愛憎の原たる比較心は無くなりて、こゝに繼子も無く繼母も無くなるべし。

△これはわれが知人の實驗なるが、先妻の子の二歲なる時故ありて其妻を去り更に後妻を迎へしかど、堅く其後妻に言つけて、おのれ繼母たるを其子に告げしめず、斯くて自分の子として養育せしめぬ。特に都合好きは、此人故郷を去りて他國に家を持つてとゝなりしにより、其繼母子たるを知るものなく又

之れを告げ知らすものも無くて、子は眞實の母と信じつゝ生長し、今年二十歳の娘盛りとなりても尚其母の繼母たるを知らざるなり。

△此後妻は賢き婦人なり、繼子も賢き娘なり、特にまだ二歳といふ嬰兒より育て上げ育て上げられし中とて、自らなる親愛の情の其間に起りて、殆ど眞の母子の如き關係となりしなるべけれど、併し後妻所生の弟妹と共に何の差別もなく何の間隔もなく誠に美くしき家庭を作りつゝあるは、之れを要するに、『繼子と思はず』の繼母の心より、此結果を來せしなるべし。

◎役人とか會社員とか云へる側の人の、其妻娘が、『奥樣』とか『御新造』とか『お孃樣』とか出入の商人に尊稱せらるゝよりして、徒らに見識張り、體裁振る今の樣こそ片腹痛けれ。此見識張り體裁振るが爲に、主人の收入の少なきにも似合で、おのれ手内職など爲すを大いなる恥辱として、一向に服裝を飾りたがり見榮を繕ひたがり、終日でれ〳〵と何の處在もなく暮すことの淺猿しさ、思へ、歐米の婦人は、其生活の爲にする職業を耻るものは一人もあらざるなり。

△『人造金に光る令孃』やら『衿無し双子の奥樣』やらがうろつく世の中では、婦人の地位の高まりようは無し。

△女は產兒器械にあらず、翫弄物にあらず、男と共に社會に向つて働かねばならぬものと思はゞ、斯る馬鹿々々しき見榮も體裁も入たものにはあらざるべし。

蕈狩

清水橋村

「綾ちやん、そんなに馳けんぢやありませんよ。」

姉様があれと云ふ間に綾ちゃんは美くしい蝶を追ふて山道をハラ〳〵。

「だつて姉様、奇麗な蝶なんですもの。」

秋草の花の上に舞ひ上つたのを見送つて

「私欲しいわ。

と此方を見る。

其姉妹の顔の様に温和な日和で、双の瞳のやうな空の景色で、玆に咲いて居る桔梗の花の色の様に澄みきつた秋の日、大江博士はその愛嬢双美と、奥様と、小間使の菓と、書生の竹村と、奥様の甥に當る梓といふ少年とを引連られて、△△停車場より左程遠くもない△△山まで散策がてら茸狩を試みられやうと云ふので、竹村は其手に奥様と嬢様が手づから調理された晝の行厨を携へて居る。

博士は道すがら植物動物の簡易なお話をし、或は露霜風雨等十月節に起るべき現象をお話しなされ、特に當月は農家の夏作の收穫、冬穀の播種に忙しなき事、播種は重に京菜、小松菜、大麥、小麥、裸麥、豌豆、油菜等である事など農作の辛苦を説明し、食物としては、サンマ、松蕈、大根、芋、甘薯、柚子、柿、栗、山鳩、雉子、鴫などで、狩獵は當月の十五日より始まり、現時の狩獵法によると、鳥類の中、保護するものと禁止するものとある事など凡そ十月節に關する智識は大小漏さす平易な譬へを引て敎へられたので、足弱の人々すら道に休息もせず面白げに目ざす△△山へと着たので、書生の竹村や梓などは、其の早くも目的地へ來て先生のお話の混々として盡くる所なく、最とも趣味あるのを惜むだ位であつた。

松林へ這入ると、人々は四方に分れて薄の中、落葉が下、各々志す方を探つて獲物の多少を競はんとする。

「姉さん澤山とつて？。」
「未だ三つよ」
など丶云つてると、彼方では先生が
「竹村、あるか、私にや見付らんが」
「先生もう手前は七ッ程とりました。」
「七ッ！、豪氣だな。」
此方では奥樣の組が、
「葉、これも初茸かい見ておくれ」
など丶中には笑聲を交へて賑はしい。
すると姉さまの元子樣が
「綾さんは菌の種類がどの位あるか知て丶！。」
と問ふので綾子は。
「姉さま私その位知て丶よ……云つて見ませうか、ね、菌の普通のものでは、はつだけ（青頭菌）、まつだけ（松蕈）、しひたけ（香蕈）、しようろ（麥蕈）、れいし（靈芝）、さるのこしかけ（猢猻眼）などで、皆な紳士だねホヽヽ。」
「紳士？さう高等な菌類ね、その外人の知らないやうなものは……。」
「えゝと、知らないわ。」
「さう、まあ普通の賤種ではね、綾ちゃんの云つた外にきくらげ（木耳）、かはたけ（茅蕈）けかび、あをかび（黴菌）くろかび、くろほ（麥奴）などがあるのよ又毒のある菌はね、ちゝだけと云ふ乳のやうな液ので るものや、まぐそたけと云つて銀を硫化銀に變化させるものや、べにたけと云つて紅いのや、きつねたけと云つて惡臭のあるのや、しゝたけと云つて苦味のや、つきよたけと云つて暗夜に光を出すものや、其他名の知れないものが澤山ありますから、無暗に食べると中毒する事があるのよ。」
など話しをして居ると此方でも博士は松の切株へ腰を下して、竹村や梓を相手に講話を試みて居る、今

其れを筆記すれば大略斯うである。尤も竹村は植物學を學んだから舊智識であるので初學のやうには說明せず、順序として實物を示して簡略にをしへ、他は專ら自然物の構造の巧妙な處を話され。重に梓の爲めになされた。



「菌の多數は、其の形狀傘に類して居る所から上部の張開した所を菌傘といひ、其の柄を菌柄と云ひ、菌傘の裏面に多くの指あるを菌指と云ひ、菌指の裏面には多くの胞子を生じ、胞子地に落ちて萌發すれば絲狀をなして地下に蔓延し、次で此の菌絲(絲狀を云ふ)の所所に膨れたる部分を生じてきのことなる、きのこは即ち胞子(實)を生ずる蕃殖器で、その重要なる本體は地下にあるから、人の食用する所は他の植物の花の如きもので而して花でないから、きのこはしだ(羊齒)苔藻類など丶共に隱花植物の部に這入つて居る。

菌類は獨り人の食用するもの許りでない、彼の食物や器物や諸般の有機物に寄生するかびの類、或は麥酒、葡萄酒、清酒、醱酵を促す醱酵菌なども矢張菌類で是等は皆な下等なものである。而して是等寄生せらる丶有機體には死物活物の二種ありて、朽木、塵芥、動物の屍體、排泄物等に寄生するものは死物寄生。生植物の葉莖、生動物の身躰等に寄生するものは活

物寄生で、死物寄生の方は重にかびの類であるが、活物寄生の方には、麥の黒奴、稻のいねかうじ蠶兒のおしやり、人體のしらくも(白癬)、たむし(頑癬)、混蟲に寄生するスフェリア、トルビア（これ即ち冬蟲夏草也）など最も著明なものがある、今是等菌類の功用を考ふるに、松蕈、椎蕈の如く食用に供し、醸母菌の如く酒類を造るに用ゆるものあれど、他は概ね有害にして或は農作物を害し、蠶兒を斃し、或は樹木に多枝病、瘤病などを生ぜしめ、或は劇毒人を殺すに至るものであるので、その菌全體の種類は凡そ三萬あまりある。

松蕈は即ち松葉の腐敗せるものに寄生する死物寄生菌で多く赤松の林にある、椎蕈は柯、槲櫟、櫟、栗などの古木に寄生するものでこれは人工に依て作ることができる、今夫れを爲すには右の木を伐り皮に多く切口をつけ、藁の如きものにて深く覆ひ、之れを濕地に横たへ置きて日々米糖の如きものをかけると、大凡一年後となれば春秋多くの椎蕈發生すべし、

椎蕈は食用貿易品として海外に輸出すること、明治二十九年に金額六十八萬圓以上に達し昆布に亞げる。又松蕈の成分は左の如くである。

水	蛋白	脂肪	無窒有機分	灰
八一、七	三、七	〇、七	一、二八	四、三

と云ふのでお話は未だ中々盡きさうもなかつたが皆なも大分草臥たし、きのこは尠なからず籠に滿ちたので一先づ林を出で、丘の上の楓樹の蔭に毛布を廣げ、とつた初蕈を炙つて行厨の蓋を開かうと云ふので、竹村と梓とお藥は、燃木をとりに水汲みに……………………その樂しみといふものは。(完)

造花科

女子工藝學校教師 太田とみ子

今回から造花の極て手易い花から御話申上ませう先づ造花の内にては梅の花が一番手易う御座いますから此の花に就まして造り法を御話いたしませう併し御話申上ます前に入用の原料及び器具を御目に懸けます筈で御座いましたが少しく都合が御座いますから器具は次號にて御覧に入れませう造花の原料も諸事の進歩に從ひまして色々と珍らしき品を用ひますがあらましを申上げますと先づプキヌレーシヤ（キヌカンレーシヤとも申升）羽二重アヤハブタエ、天鵞絨、紕、シユス、リンネル、綾リンチル、白木綿の二子糸、白木綿三子糸、綿カタン糸三十番、五十番

十番、薄美濃紙、ウスギヌ、臺灣紙、ドーサ引厚美濃紙、紐ゴム、などで御座います、又繪具の名及び色を申上げまするとオーラミン（黄色）、グリーイン、（青竹色）、スカレット（赤色）、オレンジー（橙黄色）、パイオレット（紫色）フロクシン（時色）、結晶エルロー（こげ茶色）エオシン（肉色）マセンター（海老色）、ロータミン（牡丹色）、カシユトラバル（幹色）、ブローウン。ミシリンブリウ（淺黄色）、セルリン。コンブレツトなどの類で御座います扨て梅の花を造りますにはタイワン紙を水にて浸し是れに綿を入れてまろくなし其下を五十番のカタン糸にて括りまして其下を切り取るので御座います次にはキヌレーシヤを適宜に切り是を八枚折りとなし打ち貫臺の上に新聞紙を二枚或は三枚折りとなして布き其上に折り合せた.

るキヌレーシヤを載せ打ち貫を當てヽ上より二つ三つ打つので御座います、(打ち貫臺は成る可く堅き木の木口を用ひます)そして打ち貫ました瓣は白の花なればオーラミンとグリーインとを解き合せたる淡きみどり色にて花瓣の下を染めるので御座います其染め加減は第一圖の如し染ます時に花瓣を一度白湯にて浸しおきまして染め汁にて染めるので御座います次には乾かしまして梅の瓣鏝にて花瓣をくぼませまして次には一枚づヽになし第三圖に示せる萼をよく開かしめまして是に飯糊を着けまして花瓣を一重の花なれば五枚八重の花なればそれ相當に花瓣を多く着けるので御座いますそして着きましたらば次には第五圖に示せる蕊を花の眞中に付けますると第二圖のごとき梅の花が出來上ります次に前に造りましたる莟みを矢張り少しく淡き染汁にて染めまして第三圖の萼に糊を着けて入れますと第四圖に示めせる莟みとなります(注意梅の花も種々の造り法が御座いまして同じ白の花にても時によりますと打ち貫きませんで先に極めて淡き黄色に染きて置きまして次に打ち貫くいたし法も御座います)第三圖の萼と五圖の蕊は出來合せを市中の店にて賣つて居りますから是の造り法は別に申上げませんがもしも御問ひの御方が御座いましたら造り法も申上げます是にて花及び莟みの造り法も濟みましたから次には是れを纏めるので御座いますが梅の花のごとき花は實物の枝を用ひます實物の枝を切り取りまして二三日陰きそして細き千枚通しにて小孔を開け萼の下に糊を着けて押すので御座います(注意押しまする時に莖の長く出でざるよう注意すべし、なんとなれば此の花は坐花と申物なれば莖の出ざるをよろしとす)次に後に出ました莖を食ひ切りと申物にて切り取りますと出來上りますので御座います。

第一圖



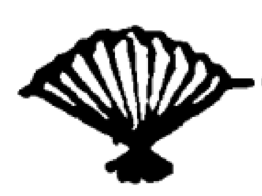
之より下迄染める

第三圖



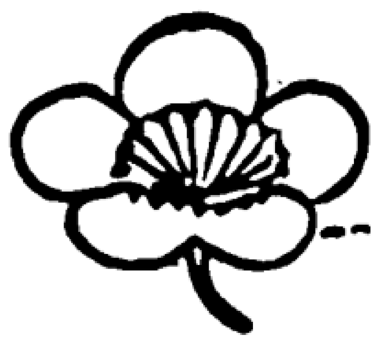
萼

第五圖



蕊

第二圖



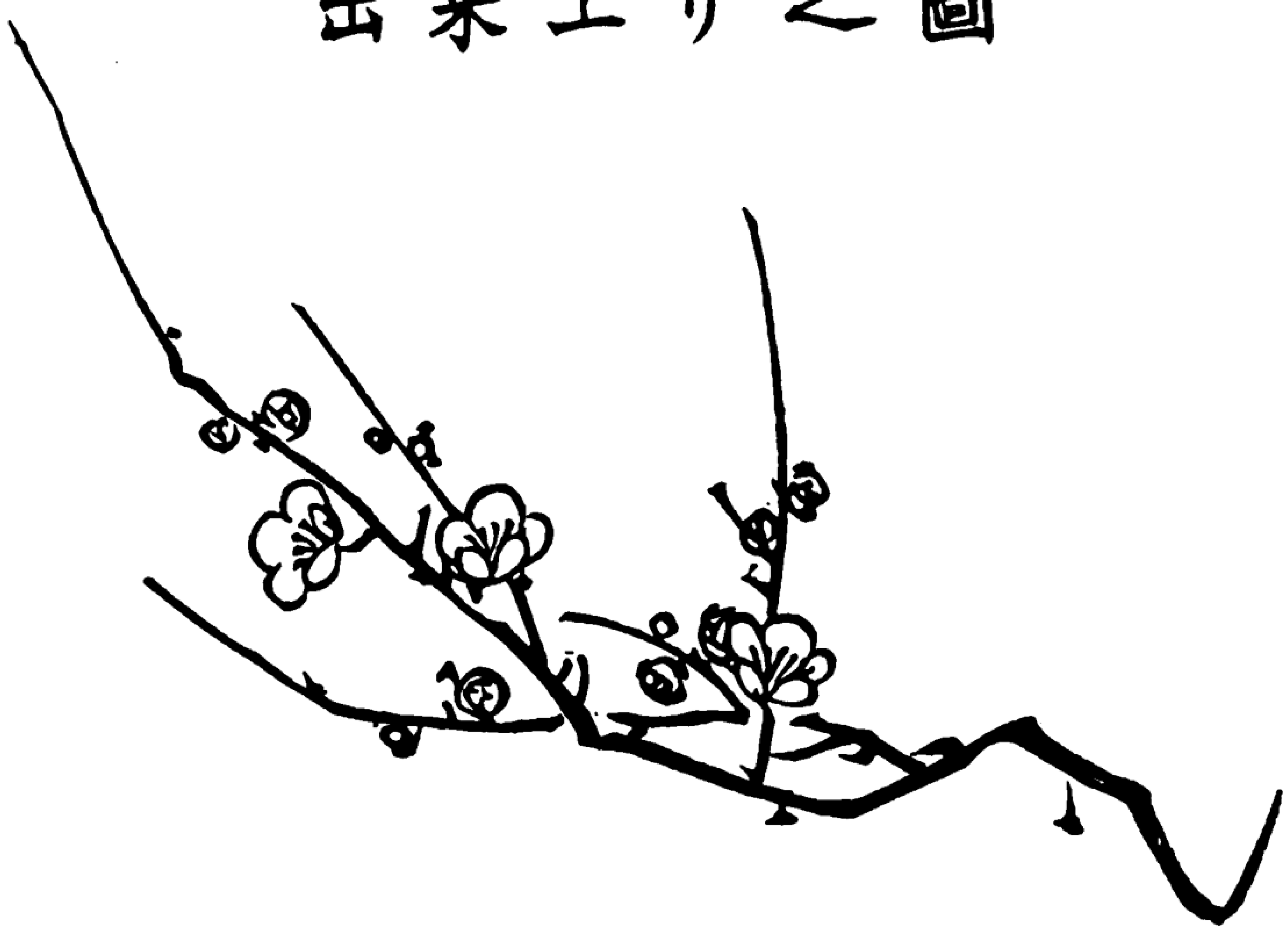
花出来上り

第四圖



蕾出来上り

出来上り之圖



だいところ

東京女子美術學校講師　石井湧太郎

○十月頃

中皿　丸百合根白煮
　　　溜り漬鯛
　　　結び青昆布

○溜り漬鯛の仕方は小鯛成は大鯛いづれにても用ふ小鯛ならば其のまゝ、大鯛ならば適宜の大さに切身となし、醬油に暫らく浸し置き大概其の身の色付きたる頃に取り出して、之に鐵串を打ちて燒くべし。

○丸百合根の白煮、之は百合の新らしき物を撰びて用ふるをよしとす、先づ清水にて洗ひ凹き處にある汚物をよく取り去り次に根付きの堅き部分を尖りたる小刀にて、ゑぐり取り之を竹の皮を細くさきて水に浸し置きたるものにて三重四重にくゝりて結び付け扨て頃合なる鍋に砂糖五十匁に味りん五勺食鹽極少量を入れ倘水二三勺を加へ火にのせ此の内に右の百合根をならべ上に美濃紙を覆ひて文火を以て靜かに煮込み、百合根の白色を去りて水氣色を帶ぶる迄に煮るをよしとす、而して結びたる皮糸を去りて皿に盛るべし。

○結び青昆布の仕方

昆布は青昆布をよしとし、水に浸し柔らかになりたる時洗ひて五寸位の長さに切り之れを程よく細く切りて結ぶべし、少しく、かたき加減に結びたるを湯の内に入れて五分間程茹でゝ後ち煮るべし堅魚だし四勺醬油二勺五夕味りん二勺砂糖は八匁位の割合にてよろし。

　　椎たけ
　木耳

猪口　せんきり
黄味あへ

椎たけは、小なるものにてよろしく、暫時水に浸し置きて之れを洗ひ茹でべし、木くらげも同じく水に浸し置て茹で共に茹だりたらば椎茸の石突を取り去り細く線切りとなし木くらげも石突を取りて同じくせん切りとなし共に合して鍋に入れ醤油味淋、砂糖、にて鹽梅し煮染置き、別に玉子三四個程を温湯の頃より入れて二十分以上茹べし、全く茹だりたる時冷水に移して後ち殻を剥き白味を去りて黄丸のみを取り摺鉢に入れ少しく擂りつぶし置きて、さて前に煮込み置きたる椎茸、木耳の煮汁をよく絞りて此の内に入れよく黄味にてあへるなり。

○栗の調理

二色栗の仕方

新栗八合、之れは中栗がよろしいのである、最初鬼皮を剥いて次に澁皮を剥き、少時水に入れて、澁を抜き晒して後ち二三度水を替へて茹るなり、よく茹りたる時其の湯をしぼり置き別の鍋にザラメ砂糖百匁を水八勺入れて煮解かし其の上に浮びたる渥を扱ひ捨て絹篩にて漉し之れを前の栗の内に入れ尚味りん八勺と食鹽四匁を加へよく煮込みて煮汁の大凡栗に染みたる頃目細なる笊にあけて餘りの煮汁を滴らせ而して馬尾篩にて裏より漉すべし、此の漉粉の五分の一を取りて挽茶五ふく程を混ぜ合せ又再び馬尾篩にかけべし、さて折の極小なるもの丶底に美濃紙を敷きて先つ白色なる栗の粉より詰め一度紙を上より敷きて蓋にて押し付け(輕く押すべし)然る後ち茶入栗を詰めて再び押し付け少時重きに過ぎざる壓を掛け置くべし、之れを用ふる時は其の折箱の椽をくづして取り出すべし切り方は好み次第になしてよし。

○茶巾栗

右の粉栗を大サジ二杯程を布巾に包み捻りて下より母指の頭を以て押したるを茶巾栗と云ふなり。

雜錄

赤十字看護婦

磯水生記

看護といふ事は、本來女子の有てる天職である而かも一言看護婦とし言はゞ、我國人の多くは直ちに之を卑下し、忽ち一種不快の念を起す傾きがある、是れ果して誰の罪であらう?、是れ果して神聖なる看護といふ務其物を侮つては居らぬであらうか?

看護は確かに、女子に最も必要なる、最も適當なる最も高尚なる職業である、特能である。而かも一度現今我邦に有觸れたる何々看護婦會てふもの、多くを見れば、是が女子獨特の技能とは受取れぬし、又隨つて是に向つて何等尊敬を拂ふべき氣が起らぬのである。古今上下を通じて、花茶琴其他種々樣々の遊藝が、盛んに歡迎せられて居るにかゝはらず、それにも優した此看護の事が、獨り念頭から忘却し居らるゝの感あるは、何たる事であらう?、何たる不始末であらう?

昔しナイチンゲール孃が、クリミヤの大戰に、看護の好果を擧げてから、全世界一樣に赤十字事業を締結し、我邦に在つては、明治十九年該條約に加入し、それから後やむごとなき貴婦人を始め、多くの立派な人々が、熱心盡力する事になり、玆に日本赤十字社病院が成立ち、隨つて看護婦の養成も盛んになつて來たのである。其赤十字社病院に於ける看護婦の現今は什麼に?、抑も日本に於ける看護婦の眞價を

知らむとせば、宜しく只獨り此の病院に於ける看護婦に就いて窺はねばならぬのである。

固より皇室恩眷の下に立ち、博愛慈善を旨とし、戰時に於ては陸軍の豫備病院に供せらるゝのであるから、平時一般病者を治療する上についても、他の病院とは自から其趣きを異にして、何事によらず、凡て慈愛を以て充されてある。然り、赤十字社の看護婦は、其品性に於て、其修養に於て、其熟練に於て、其親切に於て、確かに頭角を現はして居る。

赤十字社の看護婦にならんとするには、先づ年齢十八歳以上の女子にして、身體强壯、品行方正の者に限り、普通教育――高等小學卒業位――の素養ある者を試驗の上採用し、三ケ月間假入學を許すのである。而して此三ケ月目に再び試驗を施して、始めて入學の許否を決定するの規定であるが、扨て此の三ケ月間、什麼に苦學をせねばならぬか、什麼に勞働に堪へねばならぬか、是が既に他の高等女學校などとは全然其趣きを異にして居る所である。

勿論凡てが軍隊の組織と同一であつて、又他の女學校等のやうに、規則的に學術の教授をすることは出來ぬのではあるが、而かも慈善を以て眼目としたる所謂實地修養を重しとする點から、到底規則的に時間の經過を許さず、隨つて最も多くの勞働に堪へねばならぬといふ至難の關門は、實に如上三ケ月間の修養練習の期間にあるのである。

修學期間は三ケ年であつて、此間規定の寄宿舍に收容せられ、日曜と大祭日との外は、外出を許さず、それも偶ま遲刻等の事あれば、審に其事情を保證人から證明せねばならぬ。此等の事は普通の女學校等にも其例少なくはないが、併しながら其規定が既に軍隊的組織である以上、頗るヨリ嚴密であるとの事である。

假入學の三ヶ月間に於て、第一志願の當人其者が、斯くまで強き勞働に堪へ得るや否や、次には病院それ自身が、此者をして斯くまで強き勞働に堪へしめ得るや否やを試した後、尙斯の如き嚴密なる規定の下に、斯る養成をするのであるから、既に其敎養が精神的に行はれて居ることが分ると同時に、又看護婦其者に抱ける精神の、什麼に緻密にして、什麼に高尙であるかゞ推察し得らるゝのである。で、隨つて看護婦自身に於いても、固より左程苦痛を感せぬかの如く見受けらるゝ。

三ヶ年の修養中は、之を前學期後學期に分ち、又一期二期三期に區分し、或は隔日病室勤務、或は六時間勤務、或は每日病室勤務等、それ〳〵次第を經て漸く卒業する事になるのであるが、其後十五ヶ年が間は、所謂義務年限であつて、每年點呼があつて、一朝國家有事の際には、直ちに招集に應ずるの義務を有するのである。

斯く嚴重に、些しも軍隊的組織の精神を失はぬであるから、看護婦同志間に在つても縱令一期にても一日にても自分より故參の者には、一日の中に何遍行き會うとも、必ず敬禮をせねばならぬ事となつて居ること、些しも彼の兵卒が同僚以上の所謂上長官に對して敬禮を拂ふと異りが無い。で、此院の院長の云ふ事といつたら、行はれぬ事はなく、隨つて各自が院長の命令通りに守つてさへ居れば、決して間違ひは無いとの事である。

感ずべきは、戰時戰爭中の兵隊を扱ふ方法を練習するために、施療室を設けて置き、或は常に擔架をも備へて置いてそれ等の稽古をも爲ることである。またそれのみならず、技術の練習の必要なると同時に日本女子特有の優かなる起居振舞に慣れざる事に力め、何時何處へつき出しても、確かに大丈夫なもの

であるといはれる樣にならねば不可ぬと訓誨を加へて居る。是等の事は、稍些末の事のやうではあるが、此病院以外、何れの看護婦養成所に求め得られやうか？

扨て此赤十字社看護婦が、平時入院患者に對する態は甚麽であらう？　內科、外科、婦人科、眼科及び耳科其他の各病室に、各自重大なる責任を有て散在せる幾多の白衣婦人、其擧措頗る靜淑であつて、又淸廉なる事は、一見驚くばかりであるが、恐らくは此慈愛のこもつた手に依て介抱せられつゝある患者の意は甚麽であらう？　多く玆に言ふを俟たぬのである。

先きに北淸の役に、佛蘭西病傷兵が廣島に來つて、我が赤十字社看護婦の手に依つて看護せられた時、大に其手厚く親切なるに感じ入り、隨喜の淚をこぼしたといふ事は、既に知れ渡つた事實である。斯かればこそ平常の事も容易に思ひ遣らるゝので、常に幾十百の病室が空く事なく、外來患者の蹤ひきもきらぬは、實に偶然ならぬ次第であるけれども、尙現在の儘にては到底甘んずべきでは無い、無論當局者の意見もさうである。たゞ夫れ現今日本の婦人……否男子までが、偏に看護てふ物に就いては、至つて淺墓な考へを有つて居るのを、根本的に改めねばならぬ。看護の業務は什麽にも悲しく苦しきことではあるが、併し其より生ずる處の功德たるや、什麽に高大無邊なるか？を考へねばならぬ。これ即ち赤十字看護婦の常態を多くの女子達に紹介する所以である。

（をはり）



菊

小畠蓬城

性來學に疎く、只人の語るを聽書くに、何よりも實
に興あるは花なりけり。
菅公も秋の花には殊に白菊を好まれしとこそ聞きし
か、四條の大納言が宇治、前關白と春秋の花を品評
して、春には梅櫻と別れしにも、秋は共に菊こそと
一致しけること、何とかいふ書籍に出づると聞く、
菊は蝶と同じく和漢呼稱を共にするにや。日精、節
花、傳公、周藍、延年、更生、陰成、帝女花、女節
金莖蘇等は漢土の別名にして、我國又翁草と呼ぶ、
陶弘景は曰く、莖紫に氣香しくして、味甘く、
葉食すべき者は眞菊と爲す、靑莖にして大葉、味苦、
くして食するに堪へざる者は薏、眞の菊にあらざる
なりと。之何の謂なるにか、薏は多く野邊の濕地に
生じて莖葉共に淺緑に、瓣も黄、蕚も黄、單英にし
て一朶に數花相連り、菊と較ぶるに僞蜂の蜂に於け
る單翼複翼同じからざるよりも尙ほ異なり。弘景が
其の混同せんことを恐れしは杞憂といふべし。且つ
葉の苦きを以つて菊にあらずと謂はゞ、今の世の菊
概ね菊にあらざるなり。
史正忠が白菊百餘株を植ゑしに次年盡く變じて黄花
となるといへるを以つて、直ちに古は悉く瓣白く
蕚黄なりしに、後紅、黄等に變じたりと斷ずるは稍
周章過ぎたる論ならんか、我國の菊は自から我國の
菊にして漢土の菊と同じからざるものあり、中世よ
り菊合せといふことも流行し、多くの變種を生じた
る今までも、自然生の野菊山菊が各其の特色を失
はざるは、眞の菊を愛するもの丶最も喜ぶところな
りとす。
菊の最も好きは野生なり、夏には繁かりし草川の、

水さへ芝さへ枯れ涸れて、細き馬踏の崩れ落ちたる小堤に、弱々と咲顯れて獨白きは何に譬んものもなし。葉は嫁菜に似て幹細く枝稀に、蘂は大に瓣は疎に通稱して野菊といふもの丶中、花に白きと藤色なるとあり。藤色の稍深きものを陶淵明と呼ぶ。名の由て來る所を知らずと雖も、秋の末野分の明旦、誇顔の大輪菊が風伯に蹂躪られ、慘胆と右徃左徃に伏亂る丶を餘所にして剪栽の奥岩の蔭、一本二本氣高く匂ふは趣深きものぞかし。

一年伊勢なる菰野の温泉に遊びし時、花、葉共に甘菊に似て、此は又此所一種の花と見ゆるが、蟠龍と見るべき樹の根より蔓かの如く細き溪流に咲下りたる、哀に捨難くて携へ歸りて培ひ置きしに、其年のみこそ扨てありしが、次年よりは武骨らしく肥太りし。是を以つて推量るに、養老、吉野、伊吹、御嶽宮城野、吹上其他の野菊山菊、皆名に呼びて園に植うるもの、原種と姿の異るはいふまでもなく、多少は花も變りたらんか。

鶴裳といふは唐種ならんか、名も賤からざるに雪白の中英、數條の縱線文を成し、氣品高く色清く、眞に之れ鶴裳に似たるにあらず、鶴裳偶此に似たるなり。然れども惜い哉複瓣にして色鈍し。花葉全然鶴裳に異らずして、而も單瓣なるを養老となす。養老は我國にて菊の王といふなれども、花かあらぬか浪の寄するかといひけん吹上こそ尚に優れるにや。吉野は吹上に似て趣深く、伊吹は花瓣稍小に、薩垂といふは品少し下りたり。

飛雲閣といひ甘谷といふ、共に黄褐色の單瓣華美ならず、其の漢種たるや言ふまでもなく、賢相老して自適し、而も山林に隱れざるの風あり。多くは幹枝上に伸びずして地に蟠居す。寒菊といふも恐らく我產にあらざるべし、斯も亦幹枝地に居ること蜘蛛の

如きを特點とすれども、其の最も尙ぶところを葉の紅變するにありとすれば、紅寒菊と稱して、花も淡紅色に植物酸の度深うして、甚しく紅葉するものこそ、上に向ふ幹枝の風情薄きに拘らず見所は多からめ。

達摩菊といふものは變種とも見られず、といへども原種とはいよ〳〵受けられず、いづれ九年面壁の變物なるべし。葉は厚く羅紗に似て白綠青色の軟毛密生し、其質極めて堅牢なり。薩摩菊といふものは植物學上何に屬するかを知らず、思ふに加密列の種類にして菊にはあらざらん。夏菊といひて四五月頃に開花するものは原來の秋菊川芎煎液を屢施して催花期を早めたるものに外ならず、緣日にて購ひ求めて翌年夏期に開かざるを悲しむ勿れ。稚兒菊といふに白きと淡紅きとあり、菊に稚兒菊あるは猶ほ犬に狆ある如く、眞趣味を解せざる一種の人に愛せらる。



大輪菊の長も高く揃ひたるは適に愛たきものなれども、彼の直ぐなる枝を曲撓めて、自轉車、水車等の形に擬したる、誰人が好んで觀るにか、團子坂とやら名から卑しき所に、如何なる下司の住むにかあるらん、菊人形といふ物作れる、是等は寧ろ觀に行く人の惡しきなり、或はいふ、菊人形を美とするにあらず、只其の丹誠を見るなるのみと、切枝をば夜々挿替へて、而も一根より

生せし如く僞り裝ふものに何の丹誠ぞ、且つ又左程までも丹誠を喜ぶならば、まづ汝の室に筆を見よ、紙を見よ、書籍を見よ、墨を見よ、硯を見よ、机を見よ、家を見よ、道路を見よ、凡そ宇宙の森羅萬象を見ばありとし有るもの何物か丹誠ならざりける。范氏が菊譜に、春苗尺許の時、其顛を掇去して數日なれば則ち岐れて兩枝出づ、又之を掇し、毎に掇すれば益々岐る、秋に至れば則ち一幹出す所數千百朶云々といへるは今世千輪と俗稱し簇爲といふものの類か、雅尙齋の菊譜に紫白の牡丹金銀の芍藥云々といふは大英に屬する花形と色なるべし。大英を能く咲かすは容易の業にあらず、如何なる大英にても放任して捨つれば次年には中英若しくは小英となる、又菊も他の蘭牽牛花等と同く變種を得るを喜ぶが故に、古幹の根より生ずる新芽にのみ委するを好まず、毎に實を收めて播種すべし。如何にして種子を得、如何にして蒔くべきか、野分の過ぎ、露霜も過ぎ、眞の霜の來べき頃までも籬に置きて、花の自然に枯るゝに至るまで放置するは善良の方法にあらず、歌には再び匂ふなどいへど、白菊にして、露霜に逢ふて紫變したるが如き、餘り嬉しきものにもあらざるが故に、何時までも未練を殘さず、十月頃、花の充分に熟したる時、最も能く發達したるを收めて瓶に挿し、他は悉く苅り去るべし之れ古幹を保護する所以なれば、而して收めたる花は其の自然に枯れ行く時、徐に厚き紙袋に各別に藏す。

（つゞく）

寸鐵物語

阿多廣介

◎嘗て支那の碩儒呉汝倫氏が、歸國の折東游に付て

善惡とも特に感せられたるとは何ですかと問ひましたれば、東京に女學生の多きこと、統計上離婚者の多きことでありますと答へました。

◎或る敎育家の戯談に敎育者が財産を作るには東京に女學校を設立するに如くはなし、其證據には雨後の筍の様に出來るぢやないかといふた。

◎成る程計算をして見ると左の様になる
授業料一人一ケ月貳圓とすれば五百人の生徒を收容するときは千圓となる、而して女敎員の月給が廉いから平均二十五圓の職員十五人として敎員給三百七十五圓、諸經費二百圓と見て四百廿五圓の剩餘を得一ケ年には四千六百七十五圓となり、入學金等を合するときは五千圓以上となる、されば五萬圓の創業費を投じても優に一割以上の利益ある算當なり。

◎斯る利益の上より打算して設立されたる學校に態々地方より游學する女學生の東京に蒐集するのは如何しく思はれる。

◎地方官は勿論地方有志家幷に父兄諸君は可憐なる令嬢の爲め完全なる女學校を其土地に設立せしめたきものなり。

◎充分なる監督者もなくて年頃の女子を遠く游學せしめ下宿屋住をさして然かも利益一偏より打算したる學校に入學せしむるが如きは危險に堪へない。

◎容色を修むるは固より女德の一つなれども、東京の女學生は少と華美に過ぎて居る、所謂過ぎたるは及ばざる如しだ。

◎上流の人は下流の情況を知り下流の人は上流の風儀を習ふと云ふことは、誠に結構なことである、東京の女學校にては實に我邦上中下の階級の人を收容して居る。

◎我邦上流の子女は上品の人格を備へて居るが、一般の模範たる家庭の養修を受けて居るか、少と怪い、

却て上流の家庭は紊亂して居るようだ。
◎上流の子女の勝つて居ることは横柄なこと、華美なこと、孱弱なること、贅澤なことの樣だ。
◎女學生の父兄は男生徒よりも多くの費用を要するとを困て居る家庭が少くない、其理由を聞くに上流の子女に對する交際費なり例へば富豪の家に遊びに行から御馳走を受ける、されば返禮をせねば女子の弱性として輕蔑を受けるなんと、謂て止むを得ないとのことだ。　（つゞく）

邊境の女子（つゞき）

東川楊舟

二、臺灣の女子

臺灣及び澎湖島の我領籍に歸したるは、明治二十八年の事にして、年を閲する極めて淺きを以て、未だ我が王化に沾はざるものあるは固より怪むるに足らず。且つ宗教及び習慣上の事に就ても、國家の秩序社會の風紀に有害ならざる限りは、其意思の自由によりて行動すべきことを許しあるを以て、該島古來の習慣はなほ依然として存するもの多し、辨髮及び緊足の如きは、即ちその主なるものなり、余は今該島女子の性質及び風俗に關してのみ、在臺中の實見談を紹介せむとす。

臺灣の女子（澎湖と同樣なり）は、全く支那的にして「アイヌ」の女子などは大に其趣きを異にする所あり。然かも唯だ性質の温柔なる點に至ては、敢て大差なきも、該地の女子は「アイヌ」女子の如く、同族を棄て、自ら内地人の妻妾たらむとするが如きことは、殆むど絶無の事に屬す、尤も幾千萬人の中には、（千島「アイヌ」は男女共に現在數五十人内外に過ぎず）たま〳〵内地人又は外國人の妻妾たるもの

なきにあらざるも、これは最劣等の家の娘にあらざれば、必ず多少の事情の存するものなり。多少の教育あり而かも恒產ある家の娘は、男子に顏を見することとだに羞ぢて、何か己むを得ざる用事あるにあらざれば、苟も外出せざる程なり。殊に該島の習慣として、史家の所謂賣買婚的の婚姻法行はれありて、男子を有する者は、其の幼少の時より相當の家の女子を購い求めて、これを息子のいひなづけの嫁となしその年頃に至るに及むで、黄道吉日をえらびて花燭の宴を擧ぐるを例とするを以て、男女の間は極めて嚴格にして野合等の弊甚だ稀れなり。

該島の婚姻は、婚姻當事者の意見を無視し、全く父の意見次第によりて結合するものなれど、古來よりの習慣の然らしむる所とて、敢て不平もなく、而かも夫婦の間に頗る睦ましきものあり。故に離婚再婚等のことは極めて稀れなるのみならず、男女ともに甚だこれを忌めり。共諾婚の主義を採る我民法上の眼を以て、これを觀れば、壓制とや言はむ、野蠻とや許せむかなれども、その名を美にしてその實を醜にするものに比すれば、蓋し亦取る所なきにあらざるべし。されど、人世の一大重事なる男女の結合を金錢を以て取計ふの一事は、厭くまで排斥せざるべからず。而かも臺地の習慣殆むど取るべきものなき中に、婚姻を以て終生的の結合となすの點、及び女子の温柔にして、且つ節操の堅固なるの點は、特に大書するの價値あり。

聞く二十八年の兵亂の時の如きも、臺灣婦女の危險の爲めに節操を枉げず、從容として死に就きしもの多かりしに、流石の日本兵士も、爲めに一驚を喫せりと。これ蓋し彼等が平素の修養によるものなり。所謂る危うきに臨むで節操の現はるゝもの是れなり。

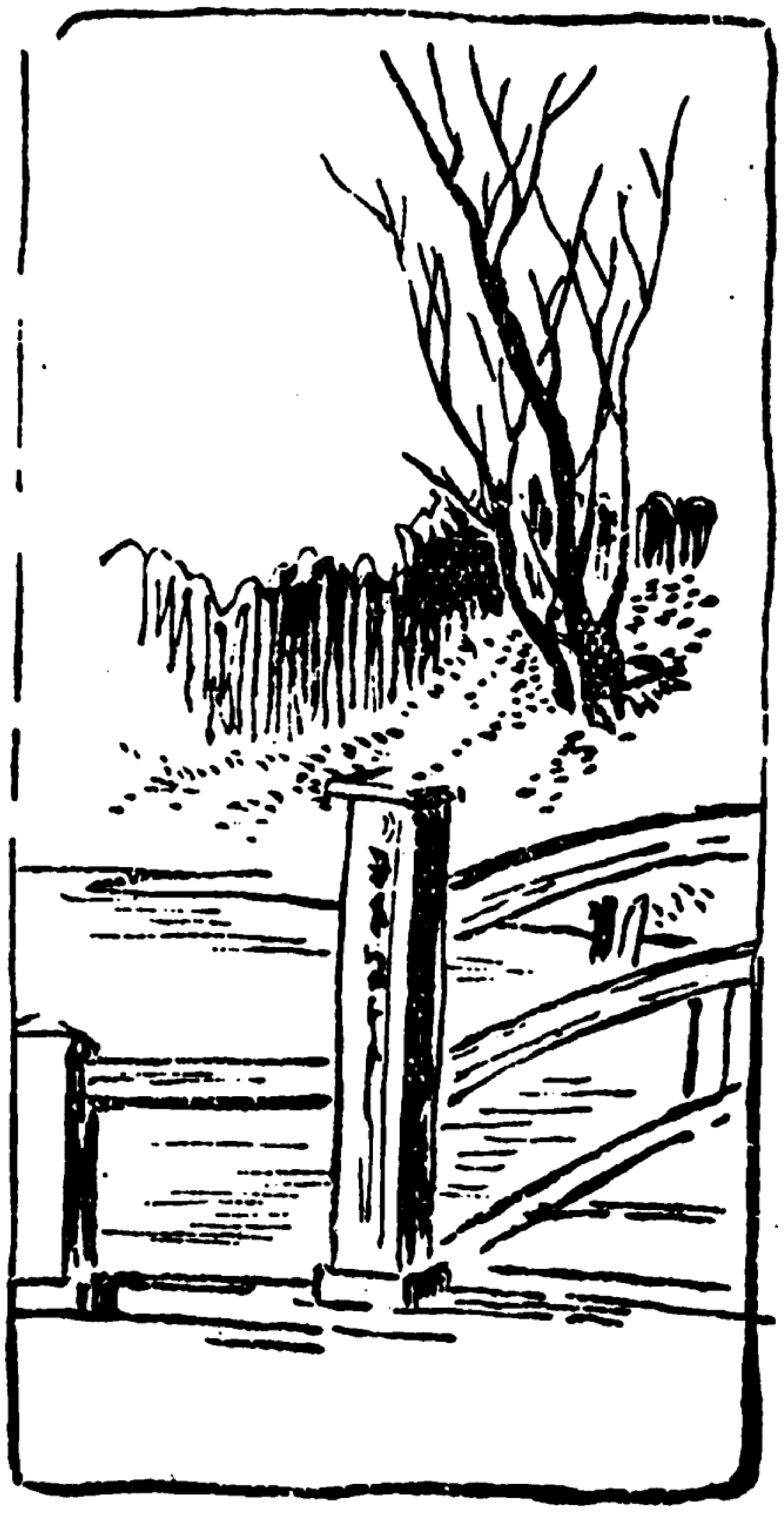
三、大島の女子

余がこゝに紹介する所の大島は、大隅國の大島にして、伊豆の大島にあらず、本島は鹿兒島縣の管轄に屬し、大島本島、喜界島、沖永良部、與論、德の島の五島を以て組織せられ、島司これが行政事務を執れり。本島は元と鹿兒島藩に屬せしと雖も、その地が舊琉球に近きを以て、土人の性質及び風俗は、琉球人に酷似せり。即ち男女の服裝及び頭飾まで、全く琉球人の如くなりしも、明治十年後に至りて、男子のみは散髮和裝に改良せしも、女子はなほ依然として舊態を保てり。

舊藩政の當時は素より明治初年まで、土人は全く奴隷的虐待の下に養成せられしを以て、其の子孫たる今日の土人も、なほ卑屈の風習を脱せず。否、たゞ卑屈なるのみならず、淫奔醜猥、殆んど驚くべきものあり。中にも女子の最も淫猥なるは、大島の赤名と稱する少部落なりとす。今まその一例を擧げむに、余たま〳〵赤名に用務あり(在大中)二三の鹿兒島人と共に其地に滯在せし時、一夕鹿兒島人某余に謂て曰く、今夜戸長某を訪はむとす、君も同行しては如何と。(大島は未だ自治制を布かず)余もその時戸長を訪ふの用ありしを以て、極めて眞面目に贊成の意を表しぬ。某等互に目笑せし樣子なりしも、余はその何の意たるを解せざりき、既にして戸長某の宅に至れば、四十前後の婦人出で迎へて、某と何事か土語にて對話し、余等を室内に導きたり。然るに戸長らしき男は出で來らずして、さきの婦人が二十五六の婦人二人を伴ひつゝ、泡盛酒と豚肉を携へて出で來りぬ。余はいさゝか奇異の感を生せしも、未だその內情を解し得ざりしかば、唯だ默して始終の樣子を熟視しつゝありき。斯くて某等と婦人との間に、何事か交渉事件の開かれたるが如くなりしも、

土語を解せざる余には、更にその何の事件なるかを解する能はざりき。されど、その動作によりて、敢て眞面目の事件にあらざるべきを推知せしかば、余は某等の止むるをも聽かず、袂を拂ふて旅寓に歸りぬ。後にて聞けば、戶長と稱するは村內の娘の子を統轄し、その命令權を有するものにして、彼の四十前後の婦人は、卽ち戶長のそれにして、また彼が伴ひ出でたる二人の婦人は、所謂用係(今日の助役)なりきと。故に彼等の歡心だに得ば、村內の娘の子は求めて得ざるなしといふ。

右は古來よりの習慣なるを以て娘の父母兄弟もこれを默認するもの丶如し。さればこの赤名といふは



甞て西鄕南洲等の竄せられし所にして、現に南洲もこの戶長の(尤も當時は戶長とは云はざりしならむ)周旋によりて一女子を愛し、終に一子を擧げたりといふ。また黑田淸隆氏の父も、この地に謫居中女子を愛して一子を擧げ、余が滯在せし時その子現に同地に生存すと聞きぬ。重野安繹氏もまた甞て當地に竄せられしことありて、氏の書きしもの甚だ多く、余も處々に於てこれを見たり。

大島の男子は概して資性魯鈍にして且つ怠惰なれども、中には狡猾奸智に長け內地の三百も三舍を避けむ底のものなきにあらず。而して女子は資性溫柔

にして且つ耐忍力に富めり。色は概して黒き方なれども、頭髪多くして肌膚濃かなり。而して年十二三歳に及べば、母親に逼りて指甲に黥せむことを乞ふ、こは精通を意味し縁談の早からむことを欲してなりといふ。既に嫁したる上は、比較的貞節を全うし、離婚再婚等のことは極めて少なけれど、未婚中女道を全うし得るものは、殆むど皆無の有様なり。去りながらその玆に至りし原因をたゞせば、初章に於て述べたる北千島「アイヌ」の女子と同樣にして、全く内地人の誘導によるもの多し、何となれば、土人の男女の間は、比較的嚴格なるに徵して、これを知るに足ればなり。而して該島にある内地人といへば、十中の八九までは鹿兒島なりとす。

然らば邊境及び新領土の風俗の良否如何は、先づその内容の因緣を詳かにして、然る後ちにその責を論ずると共に、改むべきものは改め、存すべきものは、存ずるの策を講ずるを要す。强ちその外形のみを見て、良否を判斷すべきにあらざる也。

（をはり）

米國だより

澁谷愛

女學生の内幕

◎女學生の内幕など云ひますと大さう恐ろしさうに聞えますが、これは新聞雜誌記者の慣用手段で、人の注目を引く爲で御座います、私も只今は新聞記者と云ふ肩書を持つて居ますので、こんな事を覺えましたので御座います。こゝに申上ます一條はワシントン州立のユニヴアシテー即ち當シヤトル市に設置されてある大學校の女生徒の狀態の一班でございます。私の友人一兩人此の學校に入學して居ますので、

色々取調べるとが出來ましたのでございます。

◎米國ではいつぞや申上ましたかと存じますが小學から大學まで男女共學 Co-Education で何もかにも皆一所にやつて居ます、併し寄宿だけは別でございます。先號の雜誌に井口さんと仰しやる方の御論が見えました、この方はボストンで御脩業あそばしたと承つて居ますが、やはり男女共學の學校でございました事と存じます。御論によつて大體の樣子がわかりましたやうですが、米國も廣いことでございますから、所によつては學校の風などもかはつて居ることゝ存せられます。

◎當大學女學生は大分寄宿舍に入つて居りますが、其他に親族や、知己の家に寄寓して居ますのも見えます、數名共同の自炊などもあります、人の家に勞働して居て晝の間だけひまを貰つて學校へ通うて來るやうな者も少くはありません、寄宿生活をして居まするのは、おもに富者の令孃たちでございますが、其以下は大抵は獨立自活して側ら勉學すると云ふ趣向の者が多いのでございます。獨立自活の側ら勉學すると云ふ事は男子の方には最も多いのです。日本人の米國の各學校に居る者は十の九までは自活學生でございます。女學生も決心次第で自活して人の世話にならずに學校に入つて勉强する事もむづかしくは御座いません。そんな女學生の働き口がいくらもあります。勞働と申しましても決して骨の折れることではございません。併し女學生はどうしても其居る所に適當の保護者がございませんと危險でございますことは東京と同じことでございます。

◎當大學の寄宿舍は二棟に分れて居まして、一つは男生を入れ、一つは女生を入れて御座います。いづれも立派な建物で、勿論日本とあべこべに富者の子女のみ入りますのですから、萬事行き屆いて自由が

きくやうになつて居ます。男の方の事は申上る必要がございませんから、女の方の寄宿舍の樣子を申上ます。

◎教場へお出かけになります時は嚴重に服裝をつくろひて御出になりますから、如何にも立派な姫君たちと見えますのは、申すまでも御座いませんが、授業をへて舍へおかへりの後の有樣は、また格別な者でございます。これが米國風かと思はれますが、姫君たちが舍へ御かへりの後は復習、豫習など云ふ事は更にございませんで、まるで遊び通しでございます。

◎部屋は奇麗に裝置されて居ます、其部屋は一室一



人が通常でございます。都合上一室に二人居ますのもございます。其部屋の中にはいろ〳〵室內遊戯品がございます。其中にもトランプは非常に持てはやされて居ます。向う三室兩隣室の姫君たちが御集りになつてほかの遊びのないをりは、いつでも此トランプ遊びに無我夢中になつて勝敗を爭うておいでになりますのは日本の女學生とまるでちがひますのでございます。併し日本の學校ではあまり學科で姫君だちを御いぢめ申すかと思はれますがどうでございませう。トランプはおすすめ申したくございませんが、他のよい遊びにもそつと時間を差上ましてもよろしうございませうと

存じられます。
◎カルタの外には、まだ色々遊び道具がございます。殊に室外ではベースボール、ローンテニスなど好んで致しますやうです。
◎トランプにも、ローンテニス、ベースボールなどにも其他の遊び事をも、男生の方が晝とかぎらず夜分でも御客様になつて御出になります。そして御一所にダンスなど致されます。其邊はさすが自由國で御座いまして、それでも猥りがはしい事がございませんのは誠に結構々々。
◎尚次回に詳く申上たい事がございます。しばらく御待を御願申ますが、一寸書添ます、シガコの大學で男女學生が只二人で湖の中でボートを漕いで居ましたが、どうした事やら、二人一度に湖中に飛び込んでしまひました。事は二ケ月ばかり前の事でございます、これに就いては同大學校長の云ふ所と世間で話す所と大へん相違して居ます。とにかく米國にはあまり多くはきゝませんことでございます。
北米シャトル市、ノールス、ウエースターン、ニウス編輯局に於て認む。

◎今の料理

鰯の摘入　鰯の頭を採りて腹を洗ひ拇指もて骨を抜き叉背の方より皮を剝し後摺鉢にてザツと摺り別に鰯の分量の廿分一程の辛味噌を庖丁もて細かく刻み之を其鰯に掻交ぜ(摺るにあらず)湯の沸立ちたる中へ摘入れにして醬油を投じ菜大根の類をも相手に遣ふなり出來上りたれば膳に上す時椀の中へ酢を適宜に入れ置きて件の汁を盛るべし酢は決して鍋の中には入るべからず

英語會話

ENGLISH CONVERSATIONS WITH JAPANESE TRANSLATIONS.

BY. A. MIYAMORI.

No. I.	第一.
Age.	年齡.
How old are you?	御幾歲（イクツ）ですか.
I am twenty (years old).	二十歲でございます。
May I ask your age?	失禮ですが御幾歲ですか。
I am thirty-five (years old).	三十五歲です。
I am of your age.	あなたと同年です。
Are you so old?	そんなになりますか。
You do not look so old.	あなたはそんなに多くは見えません。
How old is your sister?	御姉妹はおいくッですか。
What is your sister's age?	同　　上
She is five years older than I.	あれは私よりは五歲上です。
I thaught she was younger.	あの方はそれよりもお若いと私は思てゐました。
How old would you take me to be?	私は幾歲になると思ひますか。
Well. you look about twenty-one.	そうですねあなたは二十一歲位に見えます。

Haw well you guess!	能く御當てなさいました。
I am just twenty-one.	私は丁度二十一歳です。
Haw old do you think Miss Nakamura's mother is?	中村さんの御母は御幾歳だと思ひます。
I think she is at least fifty (years old).	あの方は少くとも五十歳だと思ひますか。
Your brother is very tall for his age.	御兄弟は御歳の割には大層御高い。

Notes〔註　解〕

1. I am twenty (years old). 括弧の中の語は略して單に I am twenty. I am fifty. と言ふ方通論なり。

2. May I ask........? は「失禮ですが」の意にあたる尚目下の例を見よ。

May I ask your salary? 失禮ですが御俸給は幾何ですか。

3. 日本國語にては兄弟姉妹の事を言ふには必ず〔お兄さん〕〔お妹さん〕又は〔兄が〕〔姉が〕と言へども English にては其兄なるか弟なるか姉なるか妹なるか分明なる場合には單に Your / my } brother or sister と言ふ決して my (your) younger (elder) sister or brother とは言はず故に How old is your sister or brother? の sister 及 brother を御姉妹御兄弟と譯せざるを得す。

4. She is at least fifty. I at least は<u>少くとも</u>の義なり<u>多くとも</u>は at most なり。

I think his salary is at least fifty yen.

あの人の俸給は少くとも五十圓位です。

I think his salary is at most one hundred yen.

あの人の俸給は多くとも百圓位です。





小説

貴夫人

廣津柳浪

（中）

斯波伯爵夫人多嘉子は、彼日暮里の諏訪祠畔の茶店に哀れなる兒等を見られた以來、深き思に沈んで居られる樣子が、何時か良人義敦伯の眼に留りました。

庭の端の紅葉山を、多嘉子夫人は氣に入りの初音をも連れずに、彼方此方歩いて居られました。はら〳〵と散かゝる紅葉にも、諏訪祠畔の哀れな有樣を思浮べらるゝものと見え、四阿に歩を休められた時も頻りに太息を吐かるゝのでありました。

「御前へは未だ申上げて見ないけれども、第一家憲が許すまひし、家令や家扶などが結局同意を致すま

ひし』と、多嘉子は覺えず斯う呟いて、またもや深き思に沈まれました。

『多嘉子、あなたは一人で何を考へて居るかね。』

突然斯う聲を掛けられたのは義敦伯でありました。

『おやッ、御前は、』と、夫人は痛く驚いて顔色が變りました。

伯爵は夫人の顔色が變つたので、眉を顰めながら、夫人の傍近く腰を卸されました。

伯爵は年季三十二三、色白く頬豐に、義經眉の美しく而も威を備へて、怜悧げな眼をもつて居られます。來客に接せられた後と見え、五ッ紋黒縮緬の羽織に、茶宇の袴を着けて居られました。

『お客が歸つたから、奥へ來ると貴女が見えんので、澤野へ問ねたら、紅葉山にお居でぢやと云ふから私も來て見たのぢやがね、』と、凝乎と夫人を見られました。

『左樣で居らッしやいましたか。御覽遊ばせ、今が盛の色で御在ますは。』

『左樣。』と、伯爵は鳥渡梢を仰がれたばかりで、其眼はまた夫人の上に注がれました。

夫人も伯爵の事ありげに自分の顔を見据ゑられたのに氣付かれたので、何と云ふ事はなしに垂首かれました、伯爵は夫人の樣子に、其胸の中に何か深い思の潜んで居るのは、更めて問ふ迄も無いと思はれたが態と素知らぬ顔を作られまして、

『今日望月が見えたのも、また慈善會を起したいから、賛成者に成つて戴きたいと申す事でな、』と、伯爵も覺えず溜息を漏されました。

夫人は顔を上げて、『左樣で御在ましたか。新にまた慈善會が……何の慈善會と申しますので。』

『貧民の子弟を救濟したいと云ふ事でな。』

夫人は覺えず乘出さうとして、『貧民の子弟を救濟したい、其慈善會を起したいと申す事なら、私も贊成で御在ますが、御前は御聞濟み遊ばしたで御在ませうね。』

『贊成は無論贊成ぢやがね、基本金の拜借を願ひたいと、斯う云ふのでな、能く考へた上で何れ此方から返事を致さうと云ふ事にして置いたのです。』

夫人は伯爵の面に當惑せられた色があり〳〵浮んだのを見ておいたはしいと云ふ感が胸に溢れて、覺えず淚含まれました。

伯爵は早くも夫人の淚を認むると共に、夫人が何故に斯く心を勞するかを覺られたので、

『多嘉子、貴女が其樣に心配して吳れられるのは、實に滿足ぢやがね、今日初めて起つた事ではなし、何も致し方が無いですな。貴女は慈善の事に就いては、今日まで隨分盡力せられた、私も亦出來得るだけは寄附金も致し基本金として出金してあるのぢやが、先代の時に定められた家憲がある、亦先代から殘された相談役の面々もあるのだから、一々相談せん事には、極端に云ふと、一金たりとも私の自由に任せんのぢや――貴女の御生家さんでも矢張其通ぢやから、宅ばかりが左樣云ふのでなし、此も止むを得ないさのう。今度の基本金も一萬金と云ふのぢやね、無論私ばかりでなく、一色さんに、其から畠山さん、山名さんなぞの名も見えたが、彼此十何人の名が列べてあつたのぢやね、私の自由に成るものであると

慈善の爲に費すのぢやから、百萬金であらうとも惜まんけれども、』と、頻りに歎息して、『一萬金と云ふのでは、相談役の面々が無論承諾せんに定つて居るので、望月へは氣の毒であるが、一兩日中に書面で斷つて遣はさうと思ふて居る處ぢや。』

夫人は伯爵にして斯うであるから、自分の希望を達する事の困難なるを、一入思染みて、伯爵を慰むる語さへ出ないのでありました。

伯爵は夫人の樣子が、一入憂はしげに見受けられたので、

『多嘉子、貴女は何か考へてお居での事がありはせ



んかね。兩三日來、顏色が勝れん樣に見受けるがね、』と、凝平と夫人の顏を見られたのであります。



夫人は伯爵が斯う問ねられた時、俄かに悲しさが胸一杯になつて、覺えずほろりと涙を溢されました。

伯爵の吃驚は一方なりませんでした。

『多嘉子、貴女は涙を……其程の事があるなら、何故早く、私へ御話をなさらんのぢやね。』

夫人は我知らずではあるが、はしたなき樣を見せ申して、一時にても所天の心を驚かしたのを、いたく後悔されながら、

『御前、何卒御免し遊ばして。』と、手巾で涙を拭かれました。

『免すの免さんのと、其樣な事では無い。貴女が何か、其程思に餘る事があるなら、何故早く私へ御相談をなさらんのぢや、と申したまでゝ、貴女を咎めたのぢやない。』

『恐入ります。』と、夫人は容體に充分其身の不束を謝する意を示して、御前が唯今御意遊ばしたのを承はりまして私もあの……。』と、云淀まれましたが、終に思切つた體で、

『私も不圖見聞を致しましたから、自由になる事ならと存じ付いた事がありましたので……。』と、語を斷られたのであります。

伯爵は眉を寄せながら、『貴女の存付、承つた上で、私の意に合ふ事ならば、必ず聞届けよう。』

『恐入ります。矢張貧民の子弟を救濟致したいと存じまして、』

『貴女も亦、何かの慈善會を起さうと云ふのぢやね。』

『會と申すほどの事はありませんけれども、』

夫人は諏訪祠畔で見聞された二人の子供の事から、其崖下の貧民窟に四五十人の哀れむ可き貧兒の群ある事、其貧民は今尙は穢多として世人に齒いせられざる新平民たる事など話された後

『……其貧民の爲、其子弟の爲に盡して見たいと存付いて、其方法に付きまして、種々考へて居りましたので、つい御前の御目に留まる樣な事になりましたので御在ます。御前でさへも、御意の儘に遊ばす事が御出來遊ばさないので御在ますから、私には尙更出來る筈がありませんけれども、何樣な故障があつても、何かな致して何處の人達を救ひたい、必ず救はねばと、何時心の中に契を立てましたから、何卒致して其希望を遂げたいと存じますけれども……。』と、夫人の聲は漸次低くなつて、終には語が出なくなりました。

伯爵は夫人の熱心なる希望を、凝乎と聞いて居る中に、夫人の心の氣高さを、一入思染まるゝと共に其容色さへも平生よりは幾倍か美しさを勝した樣に見えたのであります。

『多嘉子、私も貴女の決心は、非常に尊く思ふのぢやがね……其貧民を救ひ、其子弟を救はうと云ふのは多分の費用を要するのだから、』と、伯爵は椅子に倚つた儘背を反らして腕組をしながら熟と考へられました。

『其で御在ますから、』と、夫人は賴無げに、『私は此兩三日、何致したら宜敷いかと、種々考へて居るので御在ますけれども、』

『いや、其樣に心配なさらんでも可からう、』

『左樣御意遊ばしますが、私は一旦心に契ひましたから、』

『私も及ぶだけは助力して上げやうから、』

『えッ、御前も、』

『左樣、』と、伯爵は確と答へて、『貴女が其程熱心に考へて居るのぢやから、私も決して見過しは致さん積ぢやがね、費用の出所を何したものかと、種々に考へて居るぢやが、』

『其程に思召して、』と、夫人は覺えず伯爵の膝へ手を掛けて、『私は交際社會へも今日限り出ますまい、其費用やら、粧飾の品やら、其外不用の品――無くとも濟みます物などを、他へ讓りましても、』と、云掛けて語を斷つて、凝乎と伯爵の機嫌を窺ひながら、軈て語を繼いで、『はしたない事を申上げまして恐入りますけれども、私は身に替へましても、此希望を達したいと思ふので御在ます。』

伯爵は首肯かれたが、『貴女が交際社會へ全く顔を出さない――緣を絶つと云ふ事は、私の關係もあるものだから、些と出來にくからうね。それは假に出來得るとしても、宮中へ伺候致す塲合には、伯爵家の體面もあるものだから、分相應の粧飾も必要であるし、第一御上へ對し奉り、禮を失する樣な事があつては相濟んのぢや。いや、貴女の苦心も、私は能く了解したから、充分考へた上で、貴女が滿足とまでは行くまいがね、何とか方法を考へて見ようから、餘り心配なさらんが可い。』

『難有う御在ます。』と、夫人は嬉しさに漸く色を直して、懐しげに伯爵の顔を見上げました。

『それでね、私も一度、貴女が救ひたいと云ふ貧民窟を視察して見やう。』

『えッ、御前が』と、夫人は覺えず嬉しさ餘る笑を漏して、『私も御供を致したいと存じますから。』

『無論貴女に案内を頼まんければね。』

『何日お行で遊ばします。』

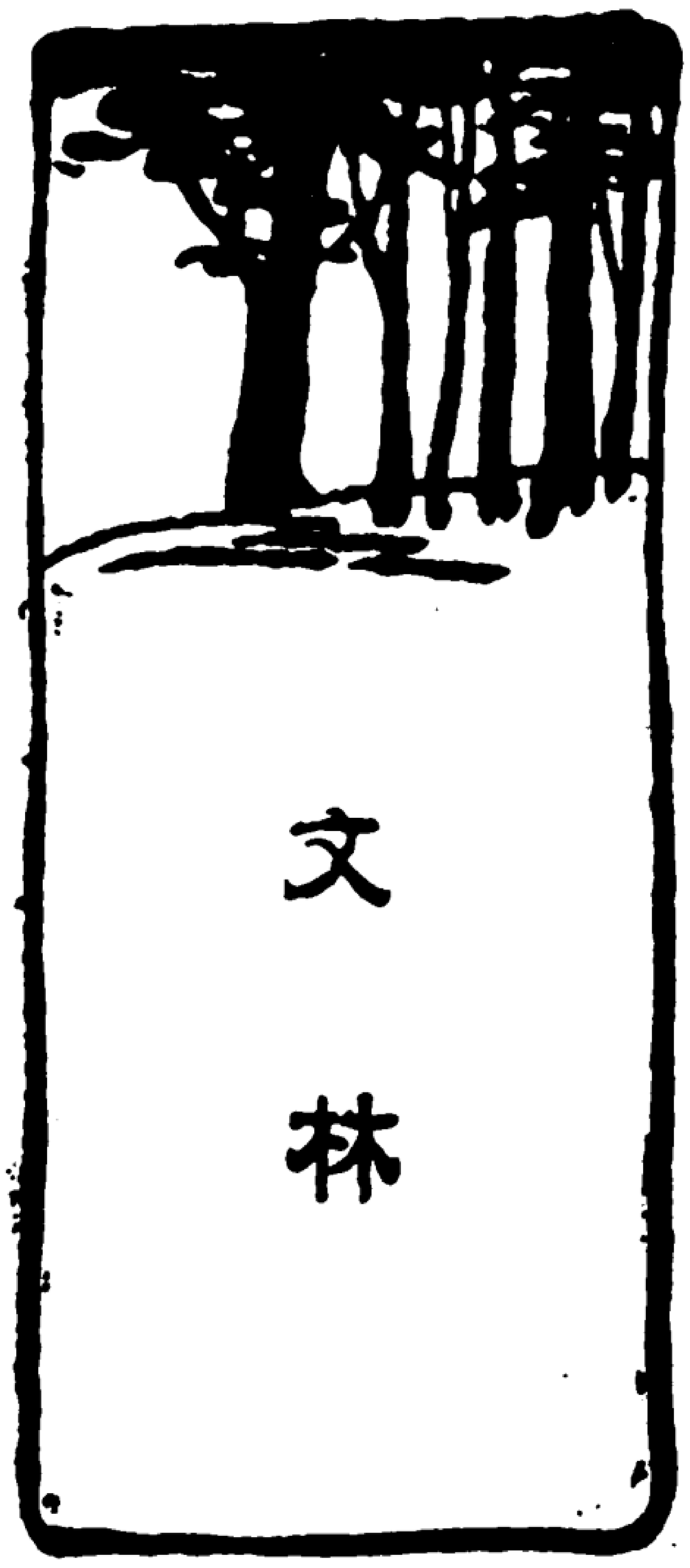
『明日でもよろしい。』

『あの明日。』と、夫人は覺えず椅子を放れて、伯爵へ對ひ、『御前、私は此樣に嬉しい事は、』と、喜極つて、はら〳〵と涙を溢されました。

伯爵も夫人の貧民救濟の熱情に、いたく感動して、夫人の涙を見られた目附、同じく眼が潤んで居りました。

（以下次號）





山水秋深　久我建通

やなきちるやました水におち鮎の
あきはふかくもなりにける哉

松平樂翁　松平乘承

よにあせすかくはしきかな月花に
思ひをのへしことのはのいろ

原鹿　水野忠敬

棹鹿のこゑあはれなりきりたちて
あきもふけゆく春日野のはら

太安麿　宮地嚴夫

いそのかみ古事ふみをよむたひに

仰くはきみかいさをなりけり

夜殘暑　小杉榲邨

秋といへとひるにおとらぬ閨の外に
かのこゑおくる風むしあつさ

晴夜虫　植松有經

つきかけのはれわたる夜は鳴虫の
聲にもさわるものなりけり

岡萩　大口鯛二

萩かはなみきひたりより咲なひき
ゆかれすなりぬ岡こえのみち

古宅薄　加藤義淸

はなすゝきたれまねくらむ秋風の
外にはとはぬやとのかきねに

谷霧　岩崎勝從

霧ふかくたちこそこむれ谷かはの
流れもけさは見えぬはかりに

田家萩　近衛貞子

秋の田のみのりも見ゆる賤かやの
かきねたわゝにはきの花さく

遠樹紅　鍋島榮子

をはなさく野末にあかく交れるは
はしのひともと染しなるらむ

女學校　前田朗子

少女子もふみのはやしにわけ入て
まなひ覺ゆる世となりにけり

萩ちらんとす　西四辻茂子

あきかせはこゝろしてふけ眞萩原
花のさかりもやゝすきにけり

幽居秋風　南郷柳子

軒はよりたかき尾花をなひかせて
このかくれ家に秋かせそふく

雁來　大谷籌子

わたりくる初かりかねも聞ゆなり
月におりたつにはのはきはら

鷄　佐野尚子

庭とりの聲をちこちにきこゆなり
あさ日のかけや匂ひそむらむ

暮山月　田中瀧子

さやかなる月こそのはれ村からす
ねにゆくみねの松のこすゑに

湖上雲　小川直子

鳰の海や一むらなひくうき雲に
つらなるふねの帆かけのとけし

薄露　服部磯子

おく露のふかくやあるらむ此夕へ
尾花かそてもまねきやみけり

エバンジェリン（承前）

ロングフェーロー原作

河越てる子譯

（三）

多年を過ぎぬアカデヤの
民の木の葉と散りしより
友なく家族なく望なく
燃ゆるが如き草野原
寒き氷の果までも
迷ひ〳〵て散り〳〵に
さるは草葉の露と消え
盡ぬ恨みを永久に
石碑の下に埋むなる
流浪人の其が中に
聖の君に導びかれ

夫を尋ぬる少女子が
名も無き墓に向ひては
あはれ我夫失せしかと
共にやすまん日を夢み
情に滿てる人々の
「惜ら我娘よ美くしき
花は嵐に散りぬべし
果敢なき望に泣かんより
より美くしき男子の
眞實の腕にすがらずや」
涙と共にすゝむれば
少女は悲しく嚴そかに
「否とよ我が手は與へじな

思ひの至らぬ其人に
暗黒は失せて永久の
光ぞ見ゆる我が心
君をし思ふ其時に」
聞いて聖は頬ゑみつ

「忍び〳〵て美くしき
愛のわざをば成し遂げよ
清く悲しく靜かにて
強きは神の其れのごと

貴き聖の言の葉に
なぐさめられて少女子は
靜に待つ朝夕に
頃は五月の春と夏

其中空の行かひに
吹風涼しきオハヨーの
川波漕ぎて下り行く
一葉の舟の此方には
夫を尋ねてエバンジエリン
長の旅路に疲れはて
靜かに眠りてありつるが
アッチャフャラヤの湖の面に
舟は進みて來つるとき
折しも彼方の木がくれに
北へと急ぐ船ありて
思ひに沈めるグブリエルが
行衛定めず出て行く
道すがらにてありつるを
あはれ眠れる少女子に
斯くと知らする天使の

囁きだにもなかりしか
舵の音はるかに過ぎ去りて
少女はしづかに夢さめつ
「聖の君よ我父よ
ケブリエル愛にさまよふと
誰かは耳に囁やきぬ
夢なりつるか將神の
示しましたる幻か」
云ひて顏をば赧めつ
「あな恥かしや愚かなる
心のなしにてありつるを」
貴き聖はほゝゑみて

「愚にあらじ少女子よ
テチーの川邊を沿ひ行けば
ルイヂアナのイーデンと
人の呼ぶなる廣野原
ありと聞つる其所にこそ
長く迷へる花嫁は
其花婿に返されて
さまよふ信者は失へる
おのが牧師を喜こばん」
慰められつ慰めつ
夕暮れ近き頃ほひに
テチーの岸へと着きにけり

（つゞく）

敎の庭

樞密顧問官 正三位子爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊地武則先生）

擣衣

天

熊本市中坪井町 七十七番地 日高かず子

子を思ふあきのよさむを身にしめて
たかたらちねかころもうつらん

地

埼玉縣川越町 横田秋子

あたこ山おろすあらしのおとふけて
ころもうつなりつきの輪のさと

人

赤坂一ツ木町 七十八番地 河田いし子

はた織のなきはしめよりからころも
うつおとしけくなりにけるかな

秀逸

東京 敷島うた子

きぬたうつこゑをちこちに聞ゆなり
いつくもおなしよさむなるらむ

東京 しゆん子

照つきのかけまきこめてうつゝちの
おともさやけきさよきぬたかな

筑前 三木さと子

小夜更けてよさむのころもうつならん
またねぬおとのそらにきこゆる

東京 金原玉城子

ころもうつおともよことに聞ゆなり
かはかせさむきかつしかのさと

東京 三好賢子

山てらのねよとのかねをきゝすてゝ
夜さむのさとにころもうつなり

たかさともおなし夜寒にいそくらん
おともひまなくうつきぬたかな
和泉 稲原すみれ子

甲

たらちねは縫てきせむと子をおもふ
よさむのきぬたうちしきるらん
名古屋 木下鶴子

さよふけてひゝくきぬたの音きけは
しつかふせやそあはれ身にしむ
肥後 徳永識子

かせさむみねさめかちなる秋の夜の
まくらにひゝくさよきぬたかな
東京 芳野みつ子

たかためにうつや霜夜のおさころも
おとのしめるはつゆやおくらむ
大和 栗山たか子

虫の音のたえにしひまにきこゆるは
たかためにうつきぬたなるらん
長野 所孝子

稲むしろしきてきぬたをうつやとは
ねよとのかねをきゝもらしけむ
東京 河合象子

ふけぬるかちまたのわたち音たえて
きぬたはかりそなほきこえける
東京 岩谷浅子

つきよゝし芳のゝさとにころもうつ
おとゝともにもさえわたりけり
東京 山本茂子

吹きおくる風のまに〳〵きこゆるは
とほさと小野にころもうつこゑ
岡山 亀山仙子

むしの音をきくもさひしき山さとに
あはれをそふるさよきぬたかな
岡山 大橋廣江子

ふく風のみにやしむらんゆふへ〳〵
しつかきぬたのおとしきるなり
岡山 大橋象子

山寺のかねのひゝきのこゑのうちに
きぬうつおともあはれをそそふ
岡山 橋本文枝子

比叡おろし身にやしみけんおと高く
しつのをはら女ころもうつなり
岡山 吉田文江子

澄わたる月のひかりにしつのめか
こゝろもそらにころもうつなり
筑後 鏡山増代子

このはちるおとたに秋はさひしきを
ふけゆくつきにころもうつなり
筑後 武田鎚子

たかためにうち明すらんからころも
たゆまぬおとをきかぬよそなき
筑後 武田外代子

しつの女もよさむの風におとろきて
なかきよすからころもうつらむ
松山 梯たけ子

さよきぬた打つ音しけくなりにけり
あきもよさむになりやしつらん
東京 岡田春子

きく人のあはれはしらてさとひとは
月見かてらにころもうつらし
東京 安井あや子

をさな子のいねたるひまと賤の女は
しも夜のころもうちいそくなり
東京 安井京子

秋ふかみこゝろいそけはからころも
うつおとしけくなりまさりゆく
東京 添田あき子

山さともあまかとまやも夜をさむみ
うつやきぬたのひまなかるらん
肥後 佐々有隣子

きぬたうつまとよりつきのさしいりて
おとはしもよにすみのほりけり
東京 小杉うた子

さえ渡る月にこゝろやうかれけむ　陸前　三浦ゑん子
きぬたもおともたゆみかちなり

東京　藤澤文雪子
故郷の秋はいかならむたえ〴〵に
きぬたきくなりたびのやどりに

埼玉　前野ふさ子
からころもうつ音たかくすみのぼる
つきも夜さむのかけをそへけり

埼玉　横田音羽子
更わたるつきの夜しもをまきこめて
ねさめのさとにころもうつなり

東京　竹本郁子
さらぬたに秋の寐さめのさびしさに
あはれをそふる小夜きぬたかな

下野　菅沼徳子
秋もやゝふかくなりけんおちこちに
うつやきぬたのおとの身にしむ

すみ渡る月にこゝろのうかれてや　壬生　森田みと子
しつかきぬたのおとのたゆらん

乙

たが爲にうつきぬたかはしられとも　大隅　稲恒やす子
きけは身にしむあきのよはかな

ものすごきやまのおくにもすむ人の　大隅　稲恒まさ子
ありとしられてころもうつなり

月かけのふけゆくそらにすみにけり　大隅　山田よれ子
とほやまさとのころもうつこゑ

秋ふけてときあらひ衣もいそくらん　東京　杉田繁子
よたゝひまなくきぬたうつこゑ

月ふけてねよとのかれもきこゆるを　東京　大江春子
うちもたゆまぬさよきぬたかな

折をりにねさめてはきくつちの音を　東京　篠田圓子
うちたゆむともおもひけるかな

いつこにもたえすきぬたの音すなり　熊本　田代綾子
すさむのころもとりいそくらん

遠かたはまたねぬひとやありあけの　鳥取　大塚信子
つきのいろまてころもうつなり

いさよひの月のよころもしつのめは　東京　林艶子
よさむをわひてころもうつなり

曉のめはあすのたつきのしろいとて　長野　松澤まつ子
小夜ふくろまでころもうつなり

さらてたにねられぬはかりてる月の
かすらのさとにころもうつこゑ　豊橋　本多きよ子

ねさめする枕にたえすきこゆなり
たか子のおやかころもうつおと　上總　高石とよ子

汐かせのみにやしむらん海士の子も
なみかけころもうつしきるなり　秋田　小島いわ子

あはれたかころもなるらむ賤のめは
なかき夜すからうちしきるなり　愛媛　梯内京子

月きよみくもふきはらふあきかせに
いつくのさともころもうつらん　神戸　無名

きくひとのたもとの露もうちそへて
うてはきぬたのかなしかるらむ　山口　村上操子

橋の上におくしもしろくふけわたる
よさむのころもたれかうつらむ　東京　山田ふみ子

秋くれはいつくのうらもにきはしく
きぬたのおとそたゆまさりける　肥後　澤田春子

秋のよのかせにたくへてきこゆるは
いつれのさとのきぬたなるらむ　美濃　吉村せむ子

秋ふかきそてのうらかせ身にしみて
あまかとまやにころもうつらん　三河　永井さい子

よの秋もふけゆくそらにしつのめか
いそくきぬたのおとそきくかな　東京　八尾いへ子

旅ちなるきみはいつこにきくならん
おもひなそへてころもうつらむ　東京　後藤喜代子

秋かせのみにしみ〲ときこゆなり
たれたかためのさよきぬたかな　東京　青木たま子

秋の夜のさとのきぬたのおときけは
ふけてのゝちもねられさりけり　薩摩　松原みれ子

今うちしきぬたのねとのたゆみしは
背になく子にやちゝなそゆらん　信濃　小岩井茂子

風さえてしもみえそむるあきのよに
はきのはころもうちいそくらん　筑前　芦屋ふさ子

こゝかしこ風のまに〱きこゆるは
夜さむにいそくきぬたなりけり　攝津　大岡はな子

ころもうつ音もみたれてきこゆなり
よさむのさとのまつのあらしに　攝津　鹽見文子

しほなれし衣かへんといそきつゝ
うちもたゆまぬつちのおとかれ　東京　小杉みつ子

たへ〲につちの音さへきこえけり
ころもうつれもこほりそめけん　東京　小杉きよ子

小山田なかりほしかへるあせみちな
まよふはかりにうつきぬのおと　陸前　前田河みさな子

月にうつしつかきぬたのおとさへて
夜さむのおもひいやまさるかな　横須賀　上田雪子

なかき夜のふくろも知らて賤のめは
まきかへしつゝころもうつなり　壬生　岩間ひさ子

さひしさなしのひかれたる秋のよな
ころもうちつゝあかしけるかな　東京　荒井千代子

月に日にすゝむ手わさやおとめ子か
みにもあまれるきぬたなるかな　東京　荒井幸子

丙

朝なゆふなせはしき村のおとめ子か
こゝろこめてそころもうつなり　東京　荒井こと子

衣うつしつかふせやのひきはより
ともしびあかくいともあはれに　東京　荒井せい子

賤の女のころもうつおとたへ〲に　かわかせさむく身にしみにけり　同　荒井てい子

ねさめしてふみ見るまとの友とせむ　てたまもゆうにころもうつおと　但馬　田尻保代子

まれにきてさひしきものをふる郷の　となりもとほききぬたをそきく　三河　河合ぬひ子

つききよみ賤かきぬたをうつおとに　ねさめてきけはかりもなくなり　同　服部萬子

あき高くよはなりぬとやをちこちの　さとにころもをうちしきくらん　同　服部正子

ねさめするまくらへさむく月ふけて　いとゝ身にしむさよきぬたかな　同　鵜野くわ子

たひごろもきかのやとりに聞ゆなり　こゝろほそえのさよのきぬたは　同　宇都野代年子

さとかわの橋につきみるひとたへて　おとふけわたるさよきぬたかな　羽後　三浦さわ子

秋くれはいとゝさみしきやまさとも　やなみつられてころもうつなり　羽後　三浦ふさ子

紅葉はのにしきなきゝにかけなから　よことつゝれのころもうつなり　羽後　佐藤かつ子

月かけのきよきひかりもまきこめて　つちの音たかくきぬたうつなり　後藤のぶ子

あてひとのなかむるおなし月の下に　あはれしつの女ころもうつなり　東京　林環子

やまさとのふせやにのころあり明の　つきにころもをうちしきるかな　白井よし子

ともし火のかけほそりゆく閨の戸に　さひしくひゝく小夜きぬたかな　熊本　田代艶子

さ夜更てしつかきぬたのせはしきは　たれたかためにころもうつらん　東京　清水はるみ子

軒ちかくきぬたの音のさゆる夜は　うたぬ身さへそねられさりける　東京　下田しげ子

なか〲にねさめの友ときくまてに　いまはなれぬる小夜きぬたかな　東京　篠田久子

たひ人の身にやしむらんやまさとの　さむきゆふへにころもうつこゑ　丹波　大槻ふさの子

きくたひにあはれなりけり秋の夜の　ふけゆくつきにころもうつこゑ　丹波　大槻ふさの子

山さとのまつのあらしのをり〲に　たゆめはしきるさよきぬたかな　東京　小河原操子

さよふけてかりなきわたるこの里に　それかときけはきぬたなりけり　東京　松原勝枝子

古さとにむかしのこせしさよころも　またうちかへすなりはたかづま　東京　荒井あさ子

秋されはふるさとこひしわかつまの　ころもうつなりおとのせわしさ　東京　荒井満武子

さしかゝる山ちのやとにたそかれぬ　しつかきぬたのおとのせはしさ　同　荒井幾久子

あるは絶えあるはきこえて遠さとに　ひとりさひしきさよきぬたかな　若松　川島謙子

さよあらし吹かまに〲ころもうつ　おとの身にしむあきのやまさと　若松　高橋久子

妹かためしつはたおろしよもすから　うつやきぬたのおとそきこゆる　若松　高橋泉子

秋たけてむしのねよはるやまさとに　こよひもきこゆころもうつこゑ　若松　高橋操子

秋ふけてみにしむかせもこりすまの
あまのさころも夜たゝうつなり　東京　岩谷梓子

吹かせにつれておちこちきよきぬた
つちの音さえてねられさりけり　東京　石川薫子

唐ころもうつかときけはたゆむなり
つきみかてらのすさひならまし　東京　中村外千代子

きぬたうつおとをまちかく聞よ半は
いそかぬひともねられさりけり　東京　山口學子

さよ更てころもうつなりをちこちに
うちもたゆまぬおとそきこゆる　東京　大枝庸子

空さむきあきのよな〳〵たゆみなく
ころもうつなりおほはらのさと　東京　甲藤若子

風なきてあたりしつけきつきのよに
きぬうつおとのさえてきこゆる　静岡　竹内みつ子

月きよみさとはいつらかしらつゆの
あきの夜すからころもうつらん　東京　三好珍子

賤か家のかとへにつきのかけさむし
ころもうつ手やつゆけかるらん　岡山　高橋桃花子

たかさとか砧もたえ〳〵しつの女の
あきのよさむにころもうつなり　東京　椎野きぬ子

さらぬたにわすれかねたる別れをは
ゆめ路ゆるさぬ小夜きぬたかな　東京　椎野薫子

ゆふ月夜なみしつかなる島のうらに
うつおとするはきぬたなるらん　秋田　和田りつ子

里ひとはつき見かてらにあきの夜の
ふくるもしらすうつころもかな　長野　山本基子

夜を寒みふけゆくまゝにころもうつ
おとたえ〳〵になりにけるかな　長野　山本直枝子

たゆみなく打おとろかす小夜きぬた
きくたひことにあはれなりけり　長野　小泉みつし子

とりきせむうからや多きあきの夜を
かされてもうつしつかきぬたは　松山　上原のふ子

ふく風のかなたこなたにきこゆるは
をちこちひとのころもうつらん　山口　田村多豆子

吹く風は身にしむはかりさよ更けて
まくらにひゝくころひうつこゑ　東京　山口靜子

さえわたる松のあらしはしつまりて
やまさとゝほくころもうつなり　東京　積山きやう子

うき人のなくさめかねつうちぬらん
きぬたのおとのたゆみかちなる　信濃　牛山さと子

夜もすからしつか伏やはいねかねて
こけのさころもつきにうつなり　肥後　德永萬壽子

秋ふかみかせそ身にしむさよきぬた
たれをこひてやうちもたゆまぬ　肥後　德永多瑠子

小夜ふけてあはれもふかきやま里に
つゆけきころもうちかはすらん　仝　德永廣子

やまあひのもりのこかけに月おちて
ころもうつなりさらしなの里　東京　牛山業子

みとり子に乳ふるやあたふひまならん
しはしきぬたの音はやみにき　壬生　佐藤おき子

すみわたる雲井のつきをともとみて
ふもとのさとにころもうつなり　壬生　佐藤たか子

秋ふかみこからしさむくさよふけて
ころもうつなりをちこちのさと　廣島　和住千鶴子

小夜ふけてとたえかちなる砧のねに
あきのあはれもいやまさるかな　横須賀　岩橋花子

おさな子のそへ乳に時やうつしけむ
夜ふけてころもうちしきるなり　横濱　米原琴子

虫の音もともにまくらにひゝきつゝ
あはれみにしむさよきぬたかな　伊豫　小野末子

小夜ふけておなし思ひにしつのめか
うつやきぬたのおとそきこゆる　仝　小野文子

ころもうつ母のちからをゝもいしに
いまたたゆまぬをとのうれしさ　信濃　小岩井茂子

かりかねのなきつるなへに打そへて
あはれそまさるとほのよきぬた　備中　福島ます子

さよ深くころもうつみにしみぬらむ
こすゑのかきもこゝろしてふき　東京　岡原雪子

をとめ子か笑ひなからにうたひつゝ
おとおもしろくころもうつなり　鹿兒島　西山きよ子

寒かせにいとゝこゝろのこそけはや
ひゝくきぬたもみたれかちなり　鹿兒島　西山つる子

しつの女か霜夜のかせもたゆみなく
つま子のためにうつころもかな　東京　安井じゆん子

小夜ふけてねられぬまゝに月みれは
たか家のいもかころもうつなり　東京　安井みし子

賤の女かうたぬ夜もなしからころも
ふしおもしろくうたひなからに　東京　添田みつ子

しつのめか月にこゝろやあこかれて
あさのさころも夜半にうつらん　東京　山崎文子

をちこちにまたねぬ人やありあけの
つき見かてらにころもうつらめ　東京　大町律子

みとり子のねるましのひて賤の女か
うしろめたくもころもうつなり　常陸　飯田古宇子

秋ふかくなり行くまゝにしつの女か
きぬうつおともせはしかりけり　攝津　森本芳江子

おいらくの母をしはしとゝめおきて
なれぬわかみのうつきぬたかな　兵庫　駒井登雄子

賑はしくころもうつおときこゆなり
ゆたけきあきのよろのやまさと　沖縄　仁保しま子

きのふかも麻おひにしさとかはに
こゑあはれにそころもうつなり　東京　芝生よし子

まちはふるなみたを袖にかされつゝ
あきのよさむにころもうつらん　東京　椎野秀子

さよふけて軒はをすくるあきかせの
つてにこそきけころもうつこゑ　仝　椎野鋭子

うちかはすさとの擣衣のひまそなき
つままちかれのころもなるらん　肥後　佐々小琴子

木のまもる月をみはやとおり立ては
つきのかなたにきぬそうちける　陸前　前田河千年子

よもすからときれ〳〵にきぬたうつ
ころものぬしはいつちますらむ　三河　石原逸子

秋かせの身にしみてしかさよころも
夜こと〳〵にうちかされつゝ　埼玉　前野壽賀子

ころもうつ加茂のかはらの月すみて
あはれそさそふたひのそらかな　三河　堀田伊勢子

あきかせにたくへる里のさよころも
きく身もよごとあはれなりけり　河内　竹内敬子

秋ふけてころもてさむきありあけの
まくらへちかくころもうつなり　河内　竹田けい子

秋かせの身にしむころはおちこちに
音もさひしくころもうつなり　伊豆　佐藤春子

草まくらつゆけきゆめをむすふ夜の　ふけてきこゆるころもうつこゑ　伊豆　佐藤敬子

さと人もよさむ知られてよもすから　こゝろいそきてころもうつなり　下野　菅沼靜子

賤の子がなかきよすからきそひつゝ　うつやきぬたのおとの身にしむ　下野　菅沼淑子

月きよみさやけきかけにしつの女は　きまかへしつゝころもうつなり　北見　中川伊代子

ころもうつ聲はなかれてみなかみの　ふせやにのこるありあけのつき　横濱　小泉春子

華族女學校教授 井上賴圀先生撰

故郷の母に

天　肥後國菊池郡城北村　徳永廣子

桐の一葉のちりそめてより、いとあはれふかう覺侍る。御母上樣には、如何わたらせ給ふにや、草木の色かへ候ころは、樣々の病差起るものと聞侍れば、かねて御持病とてはおはしまさず候へども、御老體の御身、もじや、をりからの御わづらひも、おはしまさずやなど、思侍りて、御なつかしさは、いはん方なく、夜は千草になく虫につけ、大空に飛渡る、雁金のこゑ、ききては、事傳まほしきなどおぼえ侍れど、海山遠くへだてし身の、詮方なく、朝な夕な御地の方をのみふしをがみ居まゐらせ候、妾ことも恙なく、日々學業におこたりなくつとめ侍れば、かまへてかまへて、御心なやませたまふまじく候、親思ふ心にまさる親心、子を思ふ身に思ひくらべてと、かや、よめる歌のごとく、妾の思ひよりも、御母上樣の思召は、いかばかりとおしはかり候へども、學業のしげきがまゝに、ふりはへても、御けしき伺ひ奉らず、いといと深き罪ゆるさせたまはりたく候。日々寒さにおもむき侍れば、寒衣の御仕度などさぞかし、御多用の御事と思ひ侍れば、子たる身の都の空にもの學ばんも、忍びがたきわざにて、いと心くるしう覺侍れど、今一年の後は、學なり侍りて、御

膝下に歸りて、仕奉らん、かへすかへすも、神かけて祈り奉るかしこ。

地

東京市本鄕區東片町四十二番地　下田しげ子

さらでだに秋としいへば物さびしきに、此頃ふり暮す雨のいといと、いぶせき折柄。御母樣にはいかゞ渡らせ給ふにか。かゝる頃には、いつも御持病の起らせ給ふを、さしたる御なやみも在らせられ候はずや。遠く距たる身の悲しさには、御そば近く侍りてなぐさめ奉る事も叶はず、雨につけ風につけ思ひやられ申候。まして月さえ渡る夕、虫のなく夜半などには、ひたすら御地の方のみながめ暮し申候。誠に海山も只ならぬ御恩を受けながら、御老體の御身をいつまでもわづらはし候事、われながら實に忍びがたきことに存じ候へども、來む春には業を卒へ、やがて御膝許へ歸り、かはらぬ御姿見奉り、御心やすめまゐらせむと、それのみ樂しみ居り候。返すかへすも寒さいやましに加はり候らへば、御養生おこたらせ給はぬやうなめげながら偏に御願ひ申上候かしこ。

人

東京市本鄕區東片町四十二番地　清水はるみ子

初雁の聲音づれそめて、庭の千草におく露も何となう身にしみ候折節、御替りも御座あらせられず候や。秋の習ひとはいへど、ゆきかひ繁き都にある身さへいといと哀れを覺え候を、まいて、人目も草もと云けむ山里に、只獨り待たせ給ふ御母樣には、いかばかりか淋しう、ながめさせ給ふらむ。ありし秋には、親はらから打ちつどひて、樂しく暮したる事もありけるものを、父上なき身はなど思ふにも、はふりおつる涙に袖の露は葉草よりげに置きまさりて、ながめやる月の光もいとゞかき曇りてなむ。さはいへ卒業の程も早まじかになりはべれば、之よりはいよゝいそしみはけみて、一日も早う御母樣の御膝許にかしづき奉り、日頃の御心なぐさめ奉らむと存じ候。今

えばしの間何卒御しのび給はり度願ひ上候。此女鑑は兼て御好みでらん遊はされ候ひしが、この頃は一きは其のさまをあらため、おもしろき事共いろいろ多き様存し候へば、つれ〳〵の御なぐさみにもと一冊御送り申上候。友の進めにより次號よりは私のこしをれをも御らむに入れまゐらすべく候。是よりは寒さもいといやましに變り候へば、折角御身御いとひ遊はされ度、偏に願上候。まづは御機嫌伺ひまであら〳〵かしこ。

東京　岡田柳子

夕べ〳〵、秋の上風、身にしみ侍るにも、故鄕のみ忍ばれて、垂乳根の母君には、如何に過し給ふらんと、いと御懷かしきを、今日しも學びやにて、故鄕の空なる音樂を、歌へ給へるに、「夕空はれて秋風吹き、月影おちて鈴虫なく、思へば遠し故鄕の空、あゝ我父母如何におはす」とうたひつゝいつしか淚は頰に傳はりて、さらぬだに又戀しき母君のみ許、げに飛びもゆかまほしき心地せられ侍りてなん。されど母君よ、いにし年家出づる折、業ならずして、ゆめな歸りぞと、のたまひて孟子が母君の機をきり給ひにし、諭をさへそへて、賜はせつるみ情、つゆ忘るゝ折とては侍らず。如何にして此の惠に報い奉らん。あはれそが給文机に藏めて、朝な夕な拜しつゝ、山よりも高きみ惠の露にぬれて、學びの道をつとめ侍り、尙今よりはいよ〳〵いそしみ勵みて、高根の花を手折りて、故鄕にかへり、母君の家づとと、なさんとこそ思ひはべれあなかしこ。

東京　三好珍子

うちひさす花の都も秋の最中となりては、吹風も何となう淋しく身にしみ候へば、御地はさこそと思ひやられ、北の空のみながめ勝に候をましてひさぎありく虫賣の聲をきゝては、故鄕の秋も目の前に見ゆる心地して、一しほ御懷さに堪ねず候。さてとかく不順なる時候に候折柄、御母上君御始めいかゞに過させ給ふらん。此頃中はとかく雨降勝にて時候の變りめに候へば、例の御持病の起らせ給はずやと、寢てもさめてもそれのみ氣にかゝり、とくより御伺ひ申上ばやと存じながらも、學事にのみおはれ候て、心ならずも打過ぎ居候事幾重にも御詫び申上候。こなた御伯父上様御始めにも、御さえ〳〵しくいらせられ候まゝ、御安心願ひ上參らせ候、御伯母君には殊に御すこやかにて、我子の如く何くれと御世話遊ばし載き居候事誠に嬉しく存じ居候。扨て別封小包郵便にて御送り申上候粢は、母上様の如き御持病によくきゝめある由聞及び候まゝ、御試用遊され度、もし其しるしもいらせられ候はゞ又々御送り申上べく候。猶申上度事さわに候へども、筆まはり兼候まゝ餘は後便にゆづり申候。朝夕は吹風もいとゞ肌寒う覺え候へば御いとひ遊され候やう念じ上參らせ候、私にも冬期休暇のみたのしみに勉强いたし居候まゝ御安心願ひ上まゐらせ候。先は右御伺ひまでめで度かしこ。

肥後　佐々有鄰子

十月の十五日は陸際國枚閣神社の大祭典なり、大祭の御式をはじめて拜奉りつれば、母公の御もとに、大略記してきこえたてまつらんとす也、故鄕の菊池神社の秋季大祭は去る九月十五日に執行されて、いと賑合たりしむれ、御委細の御玉章給はり、拜見ありがたく奉存

候、此度は妾事當所の學校に入こみしより、昨今のことにて委細の様子はわかり不申候へども、學業は随分進み居候様に見受け申候、本日は枚岡神社の大祭典なれば、奉幣使の參拜いといかめしく、奉仕の宮司禰宜主典の祭服も御おきてのごとく、神々しく見うけ奉りぬ、郡中の各學校は男女の生徒を、學校長はじめ男女の教員引つれ、君が代うたひ、校旗ささげて參ばいせり、いといとにぎはしき式にて候、母上様にも、明春には御旅衣きよそひたまひ、花の下やど、御立ならし給ひなば、すこしは御心なぐさめにもなり侍らんかと、今より指をり、御まち申上候あなかしこ。

和泉　福原　すみれ子

花のをり、御膝許を、別れ奉りて、西の都へ登りしは、昨日とのみ思ひ侍りしに、隙行く駒の足かき早く、いつしか秋のも中となりて、さらぬだに、つゞれさせてふこほろぎの聲、あはれに身にしみ渡り侍るに、折を忘れぬ雁のこゑにいとゞ故郷の空なつかしう思ひやられ侍り、母君にはいかゞおはしますらん、殘りの暑さのわきてしのぎがたく侍るを、例の御腦のなやみなどのおはし給はずや心がゝりに侍り、こゝには事なく學びの道をいそしみ居り侍れば、御心安うこそ、末子は、よろづまめに御仰せにしたがひ、學問をも怠りなう勵みなさるゝ由、かげながら喜び居り侍り、歸國のをりはいとよき物とらしくれんに、ゆめ心な許るしぞと、此だん、御申きけ給はり度なん、心ならずも此程は、とやかく事の爲めあまり遠々しう、うち過ぎ侍りしおぼつかなさに、一筆はせて、みけしきうけたまはらまほしうてなん、あなかしこ。

東京　篠田　園子

桐の一葉の落ち初てより、松吹く風さへ哀れを催し侍る折柄、母上様には如何渡らせ給にか。年々斯く霜の結び初る頃には、御持病の起らせ給ふを、今年はいかに御在しますらむ。差並の隣茂き都ながら、猶秋とし云へば、物悲しく、唯々、故郷の空のみ眺められ侍るを、況てや、谷水の音のみ友なる片山里に、侘しう過ぐさせ給ふ御身に、如何斗りにか覺し召すらむ。父君の世に在し頃は、親子三人打揃ひしがば、山住もなかなかに、世の憂きよりは住みよかりけりなど、打ちずし侍りしが、其れも今は昔の夢とはなり侍りぬ。去り乍ら母上よ、御心な落し給ひぞ。私も來春は、望みの業も卒へ侍るぞかし。さすれば御膝元に侍りて、雨の朝、雪の夕、いや久しく御慰め奉る事も儘ならむ。待てば久しき物乍ら、しばしのほど御忍び給はり度、偏にねぎ上げ奉るになむ。唯々願はくは、御身御大切に御厭はせ給ひてよ。是のみが第一の心がゝりになむ。先はみけしき御伺ひまで。あかなしこ。

熊本　田代　艶子

露ふく風も、そゞろに、物寒う、おぼえられ、侍る頃しも、何れも、さはらせ給はずや、殊に、母君には、かれて、いたづき、おはしませば、一しほ、心づかひし侍る、妾事は、さはりなう、日々、いそしみ居、侍れば、いかで、御安心う思召給はりてよ、折からとて、茸狩の、催など、耳にし侍るに、つけても、まづ裏山の、きのこはいかにと、思出られ、そゞろ、故さとの、空のみ、なつかしう、こそ侍れ、扨も、都は、ことわざ、しげき所とて、萬の業、日に月に、進み行き、見る物、聞く物、皆、あたらしく、おぼえぬは、侍らしかし、さあれ、妾事は、物學びの、身にし侍れば、それらの事は、兎に角、只一すぢに、學の道をいそしみ侍りて、一時も早く業を卒へしたしく御ひざもとに、仕へまつらん日をのみ、たのしみ居侍るになん、尙きこえ上たき事も、數々、侍れど、折ふし試みの業に、おそれて居侍れば、よろづは、又こそと、まつは御けしき伺ひまでかしこ。

横須賀　岩橋　花子

秋もやう〳〵ふかくなり行き庭もせにちる木々の落葉哀なるに、ま

してや夜半のなく虫の音に、夜寒の思ひいやまさるなる折柄、母上樣には如何に渡らせ給ふにや、さらぬだに故里戀し懐しと、とかくに塞はしきを、月見ればてふ歌のごと、秋の夕は中々にたへ難く候、我庭の垣根に咲ける桔梗の花、其葉の色や如何に、朝夕めでし萩の花、今年も紅うるはしく露や結べる、美子と共に露けき小道たどりつ、母上にとて參らせし女郎花咲く野べの樣など、くる〲くりかへし、靜の君に有られども、昔を今となすよしもがなと、かこたれ申候、叔父上叔母上樣とも、何の恙もなく御在し、綾子樣と共々愛しまれ居學びの業の暇には、都の千草をとり〲に眺めがはし居候美子にも健かに學びの業にいそしみ居候や、よしなに御申聞け下されたく候、尙々申上きこと度は數々御はし候へども、學びのみちにいそがはしきまゝ申殘しぬ〲、時候柄何卒〲御風など召さぬ樣御厭ひ遊ばされたくれんじあげ候、先は御けしき伺ひまゐらせ度くかしく

長野 所 孝子

時雨の空のいと物すさましく、まして寒さのいよゝ加はりぬるにもかゝはらず、御すこやかにわたらせらるゝよし雁のたよりにうけたまはり、誠にうれしく、心も安まりはべりぬ、最早御老體に在せば片時もみそばはなれず、何かと御助けいたす可きに、いかに我希望とは云へ無理なる願をいれ給はりて海山遠き此地に物學びさせたまはる事のありがたさよと、人知れず落つる粟を袖に受けたるも、朝澤に侍りき、されば、此恩の片はしにも、むくいまつらでやはと、業な夕なにいそしみ居り侍れば、御心安くおぼしめし給ひてよ、神りぬるも間近なれば、御心丈夫に恙なう御すごし遊ばさるゝ樣、かけて念じまつるになむ、あなかしこ。

長野 松澤まつ子

大路に七草ひさく聲を聞くにつけ庭の紅葉を見るにつけいとゞ古里の野山邊をなつかしみしも、いつしか木枯あはたゞしう吹きすさみて、虫のこゑ〲枯れ行く夕まぐれ砧の音など耳に致し候折はそゞろやるせなき迄、御地の空なつかしく存ぜられ候、さても母上樣には如何御過ごし遊ばされ候や。露おく朝、霜結ふ夕、幼き人達を和げ給ひて、情あたゝかき家庭を、つくりなし給ふ、御心つかひの程いかばかりかと御察し申上奉り候。せめて私御手許にあらば、御心なぐさめ申すべきを、遠く都に遊ぶ身となりて、かへつて、一方ならぬ、御めぐみをかふむり候事いと〲忝く存奉り。あはれとく業卒へて此みめぐみにむくい奉らばやと自ら心を勵まして、學びの道にいそしみ居り候まゝ憚りながら御安心下され度候なほ〲日に添え寒さ加はり行き候へばいやが上にも御身御いとひ遊ばされ度御願ひ申上候ついて此何品いたく滋養に相成る由につき御送り申上候まゝ御味はひ下され度候、かしこ。

伊豫 梯 ゆづる子

秋の半も、いつしかすぎの戸の、明け暮れ、いかにみ心淋しうおはすらんと、おしはかり參らするにも、御わたりの一しほ懐かしうこそ、昨日はも、御手づからものし給ひし、衣類數枚、賜りたる嬉しさよ、いつもながらのみ心づかひの有難さ、深く身にしみて、おし戴き候、あはれ此頃の夜寒につゞれ一つを身にまとひて、來る、辻占賣の少女等を、見るにつけても、厚きみ惠を受けつゝ、何不自由なく物學びする身の、げにも幸なる事よと、感ぜられ候、何はともあれかれ〲の御敎訓を守りて、いとしみ勵みつゝいと健やかにて、日々通學致し居侍れば、必ず御案じ玉はる間敷、ねぎまつるになむ、やがて、こん年、卒業したる曉は、花々しく錦を飾りて、戀しき故鄕に立歸り、さて厚恩の萬分の一つだに報いまつらばやと、今より其期をのみ、樂しみに、待ちわたりつゝ、明し暮し居候、きこえあげまほしき事は數限りもなうはべれど、後のたよりにと、書き殘し、復習の余暇をもて、燈火のもとにかくは。しるし侍りぬ。

きり〳〵すの聲さへも、夜へゆく此頃の寒さ、み心し玉ひて、風邪など召さぬやう、御自愛遊さるべく、吳々も願上候、

但馬　田尻保代子

いと早も秋は最中の景色となりて、何となう物悲しきに、心づくしの風身にしみ渡る夕つ方などは、おなつかしさも一しほにて、只管古里の空のみながめやられ候。殊にか弱き御母君様には、時氣の御障などおはしまさずや、いとゞ心元なき限にこそ。さるは妾が外には誰一人仕へ奉るべき者も侍らぬに、御身の御自由を缺せられても、妾が行末を思し給ひて、はる〳〵と都に物學びせしめ給ふ御惠の程、たとふるに物もなく、秋風よりもいたく身にしみて覺ねられ候。いでや今よりは師の君の御教のまに〳〵、一層勉めはげみ、智德を磨きにみがきて、一日も早く學びの業を修へて、御側近う仕へ、御心を安じ奉らば、厚き御惠の百千が一つをだも、報い奉るべきなど、思ひつゞくるまゝを、かくなむ。

伊豫　小野末子

目にはさやかに見えねども、風の音にと昔の人の、言ひけん如く、いつしか秋とやなく虫の、聲も古里戀しさと共に、一日〳〵とまさり行く、折ふし、たらちねの君には如何に過させ給ふらん、妹弟もかはりなく、學びの道に通ひてかと、そゞろに古郷の忍ばるゝけふしも日曜の事とて、硯引きよする折しも、郵便との聲に、胸とゞろきつゝ、誰が御便りと思ふ間も、忘るゝ間なき、母様よりの御文よと、下女の差し出すに、とび立つばかり嬉しくて、取る手おそしと打ち開き、拜しまつれば何くれと、妹弟の愛らしき、御話しまで、夜ごとにかよふ夢ならで、まことや、御目にかゝりし心地いたされ、且つはみ情あまる御いましめ、身にしみじみ、かばかり、妾が爲に、み心いため給ふかと、思へば胸もせきあへず、嬉し涙に、くり返くり返し拜し參らせ候。さるにても、妾の都地へ上りこしてよりは、妹弟の御世まで何くれと、日頃虛弱き御身の、さはりもし給はゞ如何にせんと、朝な夕なに、御案し奉るにつけ、一日も早く業なし卒へ、御兩親様の御傍に侍り。いさゝかなりともみ心やすめ參らせ、十八年が長き年月の、海山よりもいや深くもいや高き、御恩の萬分一なりとも、報い奉らんものと、たゞ〳〵花咲く春のみ打ち待たれつゝも。學びの庭の教草つみため、其折の御土產にもと、日頃の御さとし身にしめ、日々そが道にいそしみ居侍れば、御安心う思召給はりたく、またまた後れん雁にと〆敢す、あら〳〵。

肥後國菊池郡城北村

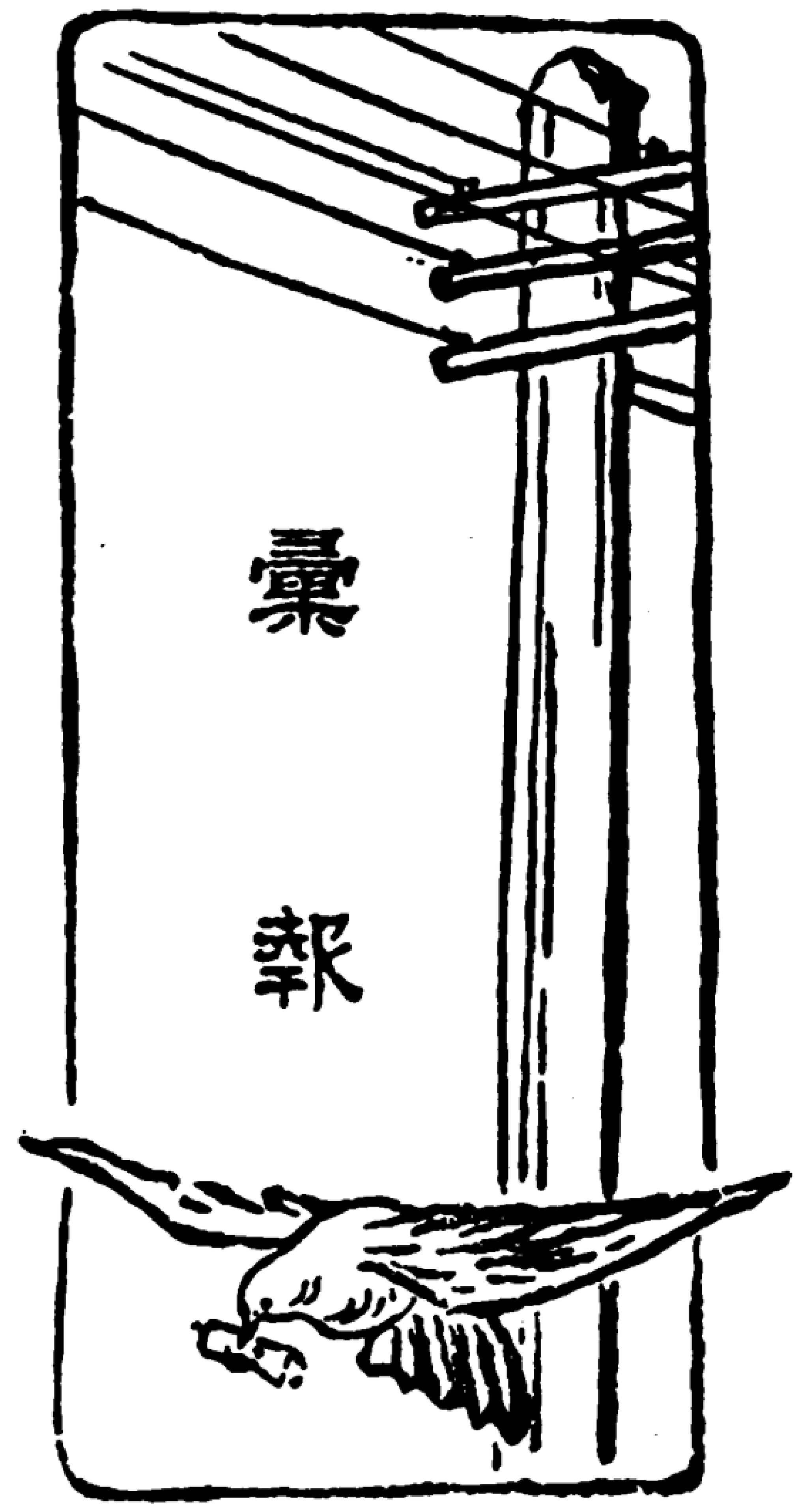
六十七翁　佐々小峯子

女鑑教の庭撰歌の歌題として幽のほまれひとやの花といふ双紙を賜りければ黒鬱金香（くろうつこんかう）の花さかせし處女絽紗を詠る歌

紗絽をとめ心つくしの黒花は
　よにたくひなきくにのほまれそ
黒玉のひとやの花は七ふしき
　八ふしきとこそほめられにけれ

女鑑兼題豫告

	歌	文
十一月一日…	浦千鳥	野戰演習を觀る
十一月十五日…	落葉	菊花を贈る文
十二月一日…	遠山雪	冬の家庭
十二月十五日…	寒月	歳暮



◎善行美事

◎學生救護會　靜岡縣志太郡小川村立小川尋常小學校長曾根友市氏は同縣師範學校卒業以來十數年の久しき一意同村の教育に盡力し徳望少なからざる人なるが村內貧困者の子弟のために學校用具を給與し就學の義務を果さしむる目的を以て去三十一年中學生救護會なるものを組織し各職員率先して其の俸給の百分の一宛を義捐し來りしに間もなく村內の同情を博し同校卒業生は特別の事情あるもの丶外凡て卒業に際し金五錢宛を寄附する事となり會の事業益隆盛して能く當初の目的を遂げ居れりと

◎少年赤十字社員　福島縣福島市字上町穀物商橋本精熙氏長男熙(十三)は今より數年前同町內に赤十字社の幻燈ありし際之を參觀して深く感動し是非とも其の終身社員とならんと志せしが當時自己の所持金とては日々僅かづ丶貰らひ貯めたる小遣ひ五圓程あるのみ迚も希望の如く終身社員となる能はざりしにぞ父にも其の志を語り學校の課業優等なりし節は特別の賞與として規定以外の小遣を貰ふ事に定め一意專心之を貯蓄したる結果本年に至り遂に十九圓某の金を餘し居るに至りたり然るに先月十九日恰も同地にて赤十字支部總會の開會せらる丶に際し熙は如何にもして此の盛會に列するの榮を得たしと種々に心を碎く有様の餘所の見る目もしはらしかりしにぞ父精熙氏は其の志を憫み不足せる分を貸し與へ後々

又貯金して返濟せしむる事とせしに熈は天にも昇る心地して打ち悦び直ちに同地の支部に馳せ行きて名譽ある終身社員となり十九日の總會には町内の有力者等に伍して其の盛式に列りたりと

◎少き印刷業者　鳥取縣日野郡二部村にさゝやかなる印刷業を營める小竹原喜一郎と云へるあり老母と娘二人の四人暮らしにて人手を借らず稼業に力め居りしが先頃來重き病に罹り約束の仕事も調へ難き場合に立至りしにぞ今年十五になれる姉と僅に十二に達したるばかりの妹とにて父の仕事一切を引受け學事の傍夜の目も眠らず家業に從事せるのみならず更らに廣く新規の注文にも應じ尙は朝夕には二人手を携へて氏神の社頭に祈願をこめ只管父の平癒を祈りつゝありと

◎勤勉貯蓄組合　大分縣南海部郡中野村柴田政太郎と云へるは村の靑年が日夕怠慢に流れ行くを憤慨し昨年五月中數名の同志者を勸誘して勤勉貯蓄組合なるものを組織し組合員は各自其の稼業に勉めたるの餘暇必らず何ものをか勉學する事に定め尙は組合の事業を擴張する基本として組合員は每月必らず紙尾草履五足宛を製造し之を金に替へて貯蓄する事に定めたるが最初は多少の冷評と反對とを以て迎へられたるに拘らず今日にては會員の數も增し貯金額も殖へ村內有力なる團體となりたりと

○一家に金銀婚式　家庭の趣味と云ふても是以上の深さは無かるべし爰に荏原郡平塚村大字下蛇窪二二二農秋元善次郎(五十)は一家に揃へる三夫婦が力を一つに協せての勞働に依り平和の生活を樂み、妻お幾との一對に加へて上には父善兵衛(七十)母阿作(七十)の友白髮あり下には伜仁三郎(二十)嫁阿松(二十)の兩個あり阿松の腹に出でたる善藏(五つ)は祖父さん祖母さんに曾祖父さん曾祖母さん都合八つの皺手の上を球と

なつて轉げ廻れりそれに男女三名の雇人を加へ都合十人の賑はしき家内にて、笑ひ聲の外、門前に漏出る物音無しと云はるゝ家なり、老翁善兵衞が若年の頃には他人の小作をなしたる貧しき水呑百姓なりしが積年の額の汗は屋を潤し身を潤して相應の財產となり子孫の繁昌となり人に羨まるゝ家庭を造るに至りしかば今年恰も善兵衞夫婦の結婚以來五十年、善次郎夫婦の同じく二十五年に相當するを期として古風の家の文明流の金婚式銀婚式併せ行ふの御目出度事となり、五十年前善兵衞夫婦が婚禮の盃を擧げし夜は十月九日と樂しき記憶に刻み附けられゐるを便りとして本月の其夜に双方の式を行ふ事と定め、手作りの黍を炊きては金婚式の金色を表はし白粟を蒸しては銀婚式の銀色を表はし一門親戚を招き集めて農的趣味の大宴會を開く用意中なる由めでたし〳〵

○感ずべき少女

子供の十歲前後といへば腕白盛りの事とて男となく女となく兎角に親々の手を煩はす事のみ仕出來し勝なるに近頃殊勝なる少女あり四谷區簞笥町七十四番地皇宮警手三吉金吉長女さだ(十歲)といふものにて父なる人は舊幕臣にて名詮自稱性來大の堅人にて維新後は諸官省へ歷仕したるも堅き計りにては暢ぶる事の出來ぬ今の世の一時は非常に窮せしこともありしが先年來皇宮警手を勤むる事となりたるより性來の堅人に職務が職務なれば勤向の規律正しきは申迄もなく家庭も最と嚴肅なる由なるが此家に生れたるさだは一入殊勝の心掛けにて母やす(三十歲)が數年來の喘息にて著しく發作する時はつなゑ(七つ)とめを(三つ)の幼妹達の手當ても自然不行屆となり勝なるよりさだは通學の傍 幼き一つ手に何くれとなく取仕切り甲斐々々しく立働くは勿論平素も二妹の寢床の上げ下

しより何かの世話を手一つに引受け居るさへあるに父母に對しても至つて孝心深く現に過日も青山に團十郎の葬儀ありたる時抔同所界隈も大騷にて近邊の娘小供抔我勝ちに同所をさして押出す中に折節母なる人の病の稍や怠たり居たる爲さだは妹等は自分が注意し居ればとて無理にすゝめて青山へ出しやりたる程にて殊に母の病氣に就ては一方ならず心を痛め病の著しく發作する度に自宅より七八丁を距たれる市ケ谷八幡へ母の病を癒してよと日參を怠らず昨夕刻も例によりて參詣したる其歸りに境内の石垣にて銀側懷中時計を拾ひ取りたれば早速自宅へ持歸り父なる人の歸宅を待受け直ちに屆出でたるが同女の通學し居る同所の井上女子高等尋常小學校の受持教師の語る處によれば尋常四年の同級生中にては學藝も優等にて中にも習字算術は最も出來よく品行も柔順にて規則正しく日頃の教訓も思ひやらるゝ程なりとの事にて近邊にて温順しい殊勝なお子とて腕白者の引合には必ず引出さるゝ有樣なりと

◎車夫家庭の美　京橋區木挽町九丁目卅二番地人力車夫小林村太郎(四十三)は妻まつ(三十九)との間に長男仙吉(十三)二男源藏(十一)長女八重(八つ)の三人の子供あり村太郎は車夫社會には珍らしき心懸けにて自分は三歲の時長野縣伊奈郡座光村字宮崎の農宮崎清九郎の末子なるが家には相應の家屋敷さへあるに仔細ありて捨子にされ同村農小林源左衛門の養育を受け廿四歲の時出京し京橋區木挽町八百市方の挽子となりし以來車夫となつて必死に稼ぎ今は妻子のある身となりければ村太郎は自分は無學なるを悲しみ是非子供には相當の教育を授けんと同區元數寄屋町の泰明小學校に三子を入學させ目下仙吉は高等三年生源藏は高等一年生八重は本年春より入學させしが雨天の時は必ず人力車にて三子の送り迎へをなして奬勵し又村

太郎は小供に小遣錢を遣る杯の事を禁じ仕事の戻りには必ず菓子など買求めて子供に與て買食を許さず起臥の折には兩親に挨拶せしめて禮義正しくしつけ他の裏店社會にては家賃の滯るものさへある中に差配より催促を受けし事など一度もなく嗜む酒さへ止めて子供等の授業料にあつるなど近所にては其殊勝の心懸けを賞めぬものなしと

○女子靜修學館生徒の同情　日本橋區蠣殼町三丁目女子靜修學館生徒一同は淀橋小學校潰倒して生徒の死傷せし者あるを聞き同情の念に堪へず別項記載の如く合計金十一圓九十錢五厘を醵集して館長塚越氏に託し左の見舞狀を淀橋學校長へ送りたるよし

聞くも恐ろしき旋風にあはれ幼きはらからのあへなき最期さては重傷を負ひ給へると聞きはべりてせきあへぬ涙に袖をしぼり合せ申候例へばいくさ人の御國の爲に命をすつるも物學びする子等のこたびの事も思はぬまがつみとは云へ理に二つある事なからましと思へば斯る風あらき日に學舍におはせし其心ばせのほどなか／＼に雄々しくも得難くなん存上候されば わがおなじ學びのまどの友がき一同同情の念に堪えず思ふ心の一ふしにそへて

かくなん

○外國婦人の十三陵探檢　米國市俄古の富豪家クレーイン第七女チャードボン夫人は頗る我日本の風光を愛し特に美術探査を好み本邦滯在の序を以て去月末北京に入り彼の萬里長城及び明代十三陵の跡を踏査して之を寫眞に撮影し太沽より便船立神丸に乘じ長崎に於て亞米利加丸に乘り替へ香港及び廣東地方を遊歷して印度に入り古蹟美術の所在地を經て歸國の途に就きたり夫人は一昨年始めて日本に來り長く京都に住し毎朝知恩院に詣でゝ宗義を喜び復た東都泉岳寺に參りて四十七士の墓を弔ひ特に大石義雄

の人と爲りに深く感じ手向けの花香を捧げ嘖々其の忠烈を賞讃して措かざるが如き他の洋人の視察とは大に趣を異にし痛く我邦の山水明媚を慕ふてケーラーと云へる有名なる婦人の美術家を雇ひ佛人の從僕一名と共に本年六月再び本邦に遊びたるが如き又以て其日本を愛するの念慮と美術を探ぐるの熱心なるを窺知するに足るべし夫人や芳紀三十二にしてシカゴの狀師ミセッス氏に嫁し親厚なる家庭の薫陶を受け言語擧動眞の貴婦人たり京都人池田清助氏は夫人が京都滯在中美術の知己として夫人と親交あり即ち夫人に誘はれて萬里長城及び明朝十三代の廟を見んため芝罘丸にて渡清し最近の立神丸にて婦人の一行と長崎にて別れ歸京したるが夫人の一行は九月四日の朝北京を出立してナンコーに到り夫れより十六哩を進みて萬里の長城を滿州境界まで視察し更らにナンコーに引還して八哩を距つる明朝十三代陵の所在地に赴けり此間は行路として名づくべきものなく河水を渉り巖石を踰へ而かも轎に乘り馬力を藉り往來したるが米國にて富豪勢力ある丈け北京駐屯の米國軍より折り寢臺及び之が附屬品を供給せられ一行幸に安全なる起居をなしたれど概して外人の此地遊歷者は行路難を以て唱へ居れりチャードボン夫人の勇氣は到底日本婦人の企及すべき所にあらず荊棘陰惡なる道路を登て十三陵の廟地に着したるが、廟の面積は約我邦の二里餘に達し其規模頗る宏壯偉大を極め居れど星移り物變りて之を修理保存するものなく風に壞ち雨に落ちて屋上の瓦を始め建物の材破ぶれ庭園空しく雜草に蔽はれて亡國の狀態を示し唯だ視察者の來りて金を惠むものあれば其附近に住居せる明末の遺族が手足の勞を煩はさずして草を刈り境內を拂ふのみ尤も十三陵の保存費は皇緒皇帝代代の遺言とした保存修理費を北京宮廷より支出し居

りしも今は廢れて之れを顧るものなく自然荒廢に歸するも無理ならぬことゞもなり云々

○牡蠣の修業する學校　數年前米國フイラデルフイアの一魚商は牡蠣を急に其固着せる場所より取離すときは牡蠣は驚きて口を閉くより殼の中に有する生命を保つ液流出して直ちに死するものなることを發見したるより牡蠣の練習學校を設立せり其學校と稱するは普通の桶に水を入れたるものにて此中に牡蠣を入れ次で水を絶やし再び水を入れ其間最初は二三分間にして次に十分其次は三十分と次第に水の無き間を長くし終に水なきに慣るゝに至らば此學校を卒業したるにて此牡蠣は絶えず口を閉ぢ容易に死することなきを以て最も新鮮なる牡蠣として諸方に賣出さるゝなりと云ふ

○汽車の危險を防ぐ田舍者の名案　米國の或る地方には貨物列車に變事ありたるが幸に損害は貨物のみに止まりたり其夜の或る朝同所を通ずる列車の三等室には近傍の市場に赴く田舍者多く乘り居たるが談話は自づと變災の事に及び其場所を通り過ぐるや孰れも密に安堵の思ひを爲したるが最初より平氣にてビスケットを食し居る一人の婦人ありたるより乘客の一人は其婦人に向ひ汽車の危險を意とせざるやと問ひたるに婦人は豫ての用意あれば恐るゝ所なしと答へたり乘客の一人は更に其用意とは如何なることなるか聞きたしと迫りたるに婦人は「妾は此所に三百の玉子を持て居るが之を汽車の衝突なんかで破られてはたまらないから妾は車掌に六つの玉子を遣つたのです」と説明したるが人々は其意を解する能はざりしに婦人は更に語を續けて「車掌が其貰つた玉子を破るまいと思つて氣を附けて居る間妾の三百の玉子は大丈夫ですと」語りたりと

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縦六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

偉人の面影

安部正人編

新刊

泥舟遺稿

全一冊

菊判洋裝 定價四拾五錢 郵税金八錢

高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也其の言行の超凡脱俗なる誰れか嘆賞せざらむや、先生徴さるれども朝に仕へず、赤貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、逕の菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年。本書は即ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に、又一面には幕末の眞事精を知るを得べし。加ふるに先生の經歴及び逸事等編者先生に親炙して聞きしところのものを掲げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし。

村上濁浪譯述 ●鐵血宰相語錄 四六判洋裝美本 定價卅錢郵税四錢

甲秀輔編 ●徳川の孔明 菊半切洋裝定價 郵税共十五錢

山崎忠和著 ●日露の英雄 四六判洋裝 定價郵税共廿二錢

發行所 東京築地二丁目 國光社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

富田鐵之助題字　須田毎六著

銀行利用法

菊判洋装美本
定價金四十錢
郵税金六錢

中村清藏序　中村佐平著

銀行簿記學

菊判總クロース
定價五十錢
郵税六錢

磯部武者五郎著

新刊

家計簿記法

菊半切厚表紙美本
定價十五錢郵税二錢

一家に出納帳簿の必要なるは今更喋々を要せざるところなるに吾國の家庭にはたゞ日記帳あるのみにして完全なる帳簿を備ふるものゝ少なきは一大缺點といふべし本書家計簿記の法を説く簡にして明何人も一讀會得するを得べく主婦たる人には勿論苟も家計整理の任ある者必ず座右を放つべからざる良簿記法なり

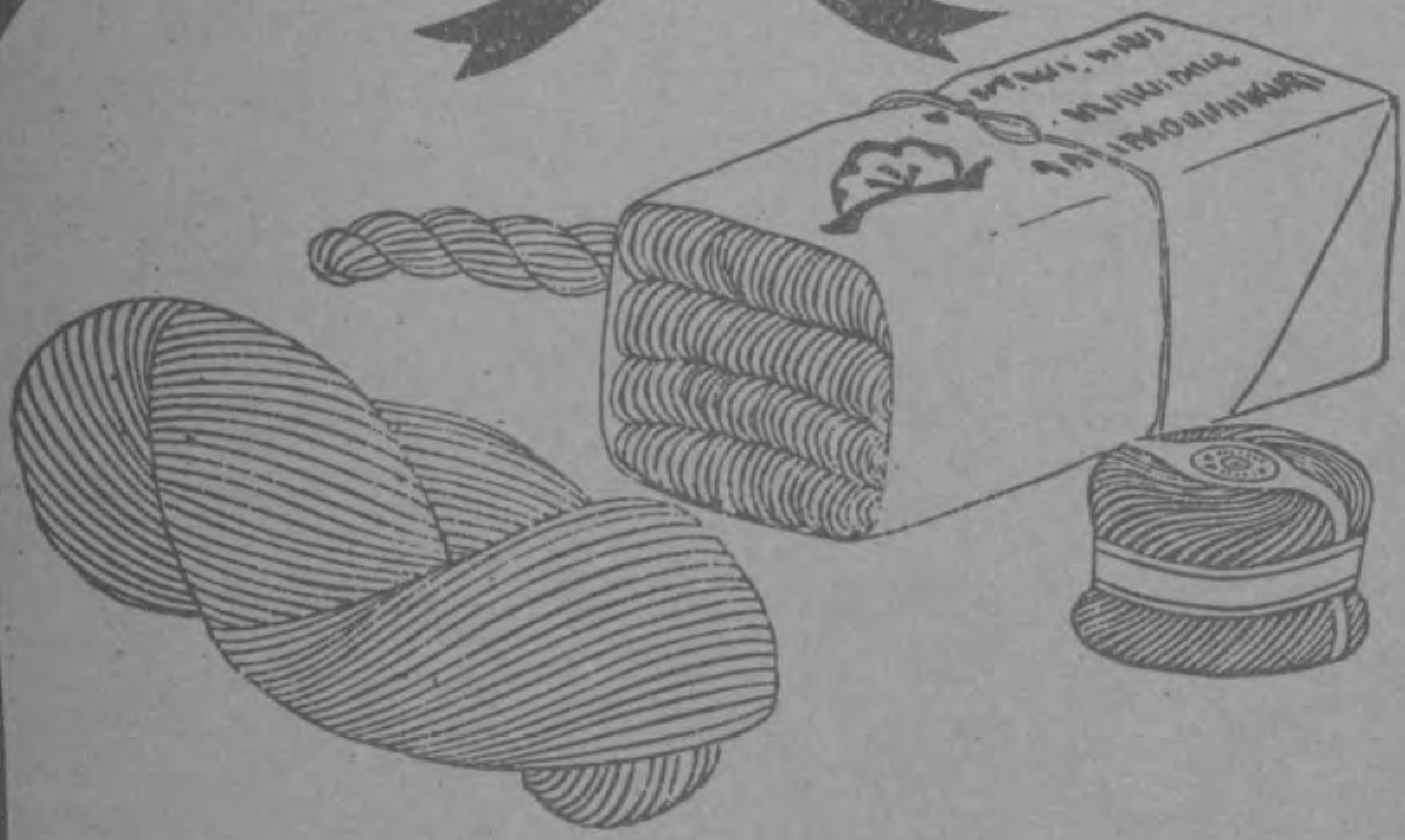


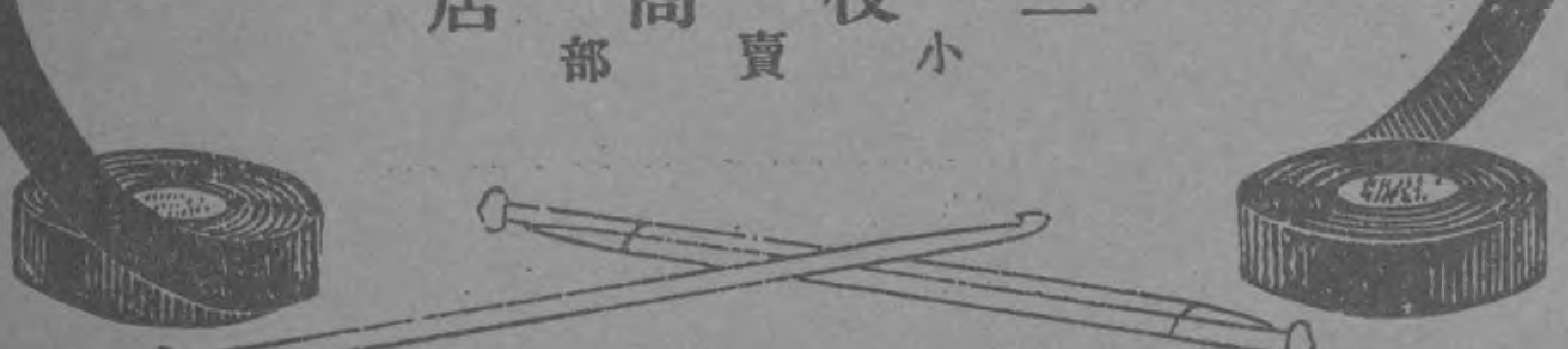
東京市京橋區築地二丁目

發行所　株式會社　國光社

明治三十六年十月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第貳拾號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

女鑑





東京築地國光社印刷